



Title	フィリピンにおけるコリアン・ディアスポラのジェンダー関係とその変容
Author(s)	渡邊, 香奈子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/49208
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第1章 本研究の課題と方法

第1節 本研究の問題意識

1. 研究の意義

本研究では、フィリピンで生活しているコリアンをディアスポラと総称している。なぜ、フィリピンにコリアンが定住するようになったのであろうか。それは、資本のグローバル化の一つの現象であるといえる。それも、ジェンダー化されたグローバリゼーションの中で生じていることである。

コリアン・ディアスポラの中でも、とりわけコリアンの夫婦に着目した。彼ら、彼女らが生まれ育った韓国で身につけた、固有の社会的価値観に基づく「男らしさ」、「女らしさ」の在り方を、フィリピンにおいていかに変容させ、新たなジェンダー関係を創り出しているのかについて考察した。

フィリピンで外資系企業が並び、外国人ビジネスマンとその家族が多数集住している地域はマニラ首都圏のマカティ市である。このマカティ市のある一角を歩くと、まるで韓国にいるかのような錯覚におちいる。韓国語の看板が立ち並び、衣食住に関わるものにとどまらず、レンタルビデオ店やカラオケ店といった娯楽もあれば、コリアンの子どもたちのためのピアノ教室や進学塾までそろっている。韓国ウォンをフィリピンペソに換える両替所、女性たちが集まる美容室、さらに宿泊施設もあればサウナまである。心のよりどころとしてのキリスト教の教会もある。そこには、コリアンが経営する会社や各種社会組織の事務所も集まっている。一歩足を踏み入れてみれば、キムチの香り、ニンニクのきいた韓国料理の匂いがただよい、韓国語が聞こえてくる。しかし、フィリピン人従業員のタガログ語が聞こえると、ここは韓国ではなく、たしかにフィリピンなのだと確認する。

この一角は、2003年2月、フィリピン韓人会（The United Korean Community Association Inc.: UKCA）の努力が実り、マカティ市長によって正式にコリアン・タウンと命名され現在に至っている。発展途上国の一国であるフィリピンに、現在では先進工業国の仲間入りを果たした韓国の人々による、このようなコミュニティが生まれているのである。

フィリピンは、総人口およそ8000万人のうち、約700万人が世界各国に渡っており、出稼ぎの送り出し国として知られている。しかし、フィリピンは送り出し国であると同時に、諸外国の人々を受け入れる国でもある。1999年（10月現在）、フィリピン側の統計に

よれば永住権所有の外国人は17,460人におり、アメリカ人55.6%(9,740人)、中国人9.1%(1,600人)、日本人5.5%(970人)、カナダ人4.1%(725人)と続き、多様な国籍の人々が居住している(Tigno 2001 : 11-12)。

フィリピンは、スペイン、アメリカ、日本によるおよそ400年近くも外国の植民地下にあった国である。戦後、フィリピンに諸外国からの人々の定住化がみられるようになったのは、外国資本を積極的に導入するようになった頃からである。フィリピンは経済開発の主軸として、1960年代後半から輸出加工区を設立し、アメリカ系や日系など、先進工業国の企業が相次いで進出するようになった。このような外資導入政策は、大挙して外国企業の進出を促した。現地資本と合併で工業製品や農産物を生産し、フィリピンから世界各国へ輸出するという、輸出志向工業化に転換していった。

本研究で対象としているコリアンもまた、このようなフィリピンの工業化政策の波にのって、1980年代後半からビジネスを主として入国するようになった人々である。同時に、韓国国内の経済状況にも端を発している。1980年代、韓国では賃金の上昇、労働力不足、韓国ウォンの対ドルレート上昇などの問題が浮上したことから、特に労働集約型産業が海外へ生産拠点を移転せざるをえなくなったからである。中小企業のみならず、商社を含む大企業、銀行といった、ビジネスを主とする人々の流入がみられるようになった。人と資本の移動が重なって動き出す、プッシュ要因、プル要因が表面化した時期であった。

グローバルな規模でコリアンが居住している国をみると、フィリピンは上位7番目に位置している [Overseas Koreans Foundation(在 外 同 胞 財 団) <http://www.korean.net.morgue/status> 2007年11月28日検索]。東南アジアの中では最もコリアンの人口が集中している。コリアンの大半が家族同伴で入国したため、定住化がみられるようになった。また、そのような家族を商売相手にする自営業者の入国も目立ち始めた。韓国でしか購入できなかった生活必需品をフィリピンでも容易に入手できる環境が整うようになり、自ずとコリアン・タウンが形成されていったのである。彼らは家族を同伴する長期滞在者であり、かつホスト社会に基盤を築いており、コリアン・ディアスポラ社会を形成する重要な役割を担っている。

本研究における主題は、「フィリピンにおけるコリアン・ディアスポラのジェンダー関係とその変容」というものである。従来の移民研究をみると、自国の経済的、社会的状況によって他国へ移動せざるをえない人々、また大国の移民政策の波にのって移動する人々が対象となってきた。その主な流れは、発展途上国から先進工業国への単身もしくは家族

再結合型の移動についてである。アジア域内の人の移動の特徴については、女性の単身移動が男性の人数を上回り、再生産労働の領域にまで国際分業が展開している「移住労働者の女性化」について、精力的に研究が積み重ねられてきた（伊藤 1996、安里 2002、小ヶ谷 2001a、2001b、2001c、2002）。

アジア域内におけるもう一つの特徴として注目したいのは、経済のグローバル化によるものである。それは、企業進出にともなう人々の移動についてである。この場合は、主に男性の単身移動や家族同伴型である。これは、経済のグローバル化現象によるものであり、きわめて現代的な移動形態と言える。しかし、アジア域内における、家族同伴型移動に関する研究はまだ多くはない。

2007 年にフィリピンで出版された、*Exploring Transnational Communities in the Philippines*, (edited by Virginia A. Miralao and Lorna P. Makil) は、フィリピン在住のコリアン、ベトナム人、日本人についての研究論文集である。筆者も執筆者の 1 人である。フィリピン国内において、アカデミックな領域で、アジア域内の人々の移動に関心が高まっている。9 本の論文のうち、3 本がコリアンに関するもので、フィリピン人研究者もコリアンの動向に注目している（Miralao 2007 : 24-39、Makil 2007 : 40-57、Kutsumi 2007 : 58-73）。

フィリピンへコリアンが大挙して移動するようになった契機は、企業進出であった。現在では、宗教関係者、観光客の入国が目立つようになった。当初、企業進出の形態でフィリピンに入国したコリアンの場合は、韓国国内の賃金や生産コストの高騰によって、経営における赤字を避けるために、より低賃金および低コストで生産が可能な国へと移動するものであった。

企業進出という形態での人々の移動は、ジェンダー化された現象であるといえる。なぜなら仕事をする男性が主体となる移動であり、女性、子どもたちは男性によって扶養される者であり、男性の決定に付随するからだ。酒井（2003 : 81-84）は、イギリスにおける日本人駐在員について、ジェンダー化された人々の移動であること指摘している。コリアンの場合もそのようにいえる。

企業進出にともなう人の移動は、基本的に個人が家計を助けるための移動ではなく、組織としての移動であり、そこに家族が同伴するものである。本社から派遣されるのはそのほとんどが男性社員であり、妻、子どもたちを引き連れて行くのである。つまり、海外移動の決定者は男性であり、移動先に形成されるディアスポラ社会もまた男性主導によって

拡張していったのである。

海外における日本人コミュニティも、日本人ビジネスマンが主体となって形成されている（グレーベ 2003：152-169、町村 2003：170-185、ベン・アリ 2003：186-203、呉・合田 2003：99-125）。

企業進出に関する諸問題は大きく取り上げられてきたが、移動する個々人に対して関心がもたれることはあまりなかった。町村（前掲 171）も指摘しているように、そのような立場の人々は衣食住も保障され、安定した高収入を得られるため、移住労働者のように諸問題を抱える立場とは正反対であるからであろう。

マクロレベルでみれば、そのような点しかみえてこないが、ミクロレベルでは、複雑な諸問題がはらんでいることがわかる。それは、家族という集団として越境する家族内部の問題であり、夫婦関係や親子関係のありかたである。さらに、コリアン家族が住むホスト社会とは切り離して考えることができない外国人としての立場上、生じる問題である。

フィリピンにおけるコリアン夫婦のジェンダー関係の変容に着目する際、まず、夫婦間における不平等な関係性が前提としてある。韓国で身につけた儒教的な家父長制に基づく地位や役割意識に基づいた夫婦関係では、主従関係がつくられる。生活の場が変わることによって、フィリピンでは、夫婦の関係にどのような変容がみられるのであろうか。

本研究の特徴は、資本のグローバル化、すなわち企業の海外進出に伴って生じる家族内の問題を対象にしていることである。これを、企業進出の側面とコリアン個人のライフ・ストーリーの側面の二方向から考察することは、従来の研究とは異なる観点である。

2. 研究の目的

本研究では、資本のグローバル化による現象を、ジェンダーの視点から読み解いてみたい。目指すことは、新たなジェンダー関係をいかにして創出できるのかを明らかにすることである。

新たなジェンダー関係の創出とは、伝統的なジェンダーの縛りから解放された状態をいう。伝統的なジェンダー規範に基づく男らしさ、女らしさという固定的な価値観から、一人ひとりが自由になっていく。それが新たなジェンダー関係の創出である。

そこで、本研究において着目したのが、韓国企業のフィリピン進出に伴う家族単位の移動についてである。資本のグローバル化が、各個人の生き方にどのような影響を及ぼしているのであろうか。国境をわたることで、家族そのものがそれまでとは別の環境に置かれ

ることになる。その国の文化や社会的な影響によって、家庭内の力関係に変化が生じて、新たな価値観が生まれているのではないだろうか。フィリピンでの暮らしが韓国の伝統的な社会規範をなれを促し、韓国固有の価値観に基づく夫婦関係ではなく、より対等な関係へと変容しているのではないだろうか、といったことが本研究の問いである。フィリピンの都市部における家族同伴型移動の事例を具体的にみていきたい。

ではなぜ配偶者関係に着目するのか。それは、婚姻関係や恋人関係にある男女間では、ジェンダー化がより強固に促されるということがあるからだ（土肥 2004）。

どのような人と結婚するか。それは、両者にとってその後の人生を大きく左右するものである。経済状態、精神面での心理状態、健康状態など、さまざまな出来事を共にするものとなる。本来ならば、自身の能力を開花させることができた状態であったのが、夫婦関係が原因のため、自己実現ができない状況に陥り続けることもある。同時に離婚もまた、人生において大きな選択の1つである。

森岡（2004）は、「家族とは、夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的にかかわりあいで結ばれた、幸福（well-being）追求の集団である。」（p.4）と定義している。家族とは、日々の疲れを癒す場でもあれば、夫婦や親子関係から心を傷つけられ（前掲 1）、また場合によっては生存までおびやかされることもある。

夫婦関係が基礎となり、そこから親子関係が発生し、さらにきょうだい関係が派生する（前掲 4）。どのような夫婦関係を作るかは、生まれた子どもたちにも大きな影響を与える。より平等な夫婦関係であれば、子どもたちもそれを見習うだろう。しかし、夫婦の間に不平等な関係がある場合、親のストレスが子どもにも影響され、不安定な環境で育つことになる。そのような夫婦関係を見て育つ子どもたちも、自然にその価値観を取り込み、その子が親になった時、世代を超えて自分の子どもへと価値観を受け継がせることになるであろう。家庭内で生活習慣や行動様式などを学ぶことで子どもたちは社会規範を内面化していく。そして、その社会において生きていく術を身につけていく。それだけに、夫婦の関係性は家庭内において大きな影響力を持っている。

家族の基礎となる夫婦の関係は、家庭内における地位と役割によって位置づけられる。男性優位の家父長制家族においては、男性と女性の地位が序列化され、役割も規定されている。それは社会規範となり、祖父母、夫・父として、妻・母として、子どもたちそれぞれが果たすべき基準がもうけられている。「役割の世代間共通性はもとより、世代間継続

性も規範によって保証される。規範への同調性の高い伝統社会では、役割は社会規範によって定められ、それからの逸脱には制裁が加えられた」(前掲 97)。

本研究でとりあげる韓国は、儒教が社会に深い影響を及ぼしてきた。「儒教は、男性は天で女性は地のシンボルだという価値観を広めながら、ジェンダー役割に最も決定的な影響力を持っており、儒教的家父長制モデルにおいては、男性が命令し、女性は従わなければならなかった。儒教の考(親孝行)は家父長制的家族構造を形成し、伝統的な社会において最も神聖な価値として考えられた」(ビュン 2002 : 50)。

韓国ジェンダー学の視点から韓国社会をみると、儒教は韓国女性を差別し隷属させた家父長制の根幹を成していると見ている(趙 2002)。儒教観からいえば、韓国の家族制度の柱となる戸主制度と同姓同本不婚制度は韓国固有のものとされ、確固たる男性優位思想を家族内に浸透させてきた。

戸主制度というものは、民法において、外部的には家を代表し、内部的には家族を統制する権利を戸主に与える制度である。この制度は、戸主の継承順序が男系を頂点として序列化しており、息子選好思想を助長してきたのであった。しかし、女性団体は長年に渡って、女性蔑視につながる諸制度の廃止運動を続けてきた。その成果が少しずつ実り、1990年に改正家族法が施行された。その中では、強制的戸主相続から任意的戸主継承制度への転換、親族概念における父系血族主義から父母両系親族概念への転換、離婚配偶者の財産分割請求権の新設など、画期的な改正となり、女性運動の実りの一つであると評価されている(相馬 2002 : 245)。

さらに、両制度ともに、同姓同本不婚制度は1997年に、戸主制度は2005年に廃止された。女性団体による運動の成果と同時に、女性の就業率の増加、結婚・離婚数の変化、少子化問題といった現実の諸問題と制度がかみ合わなくなったのである。

金(2006)によれば、「戸主制度は家族における男女の権力関係を固着させたばかりでなく、政治、経済、労働、教育など、韓国社会の全般にわたる公的領域でも性差別的国民概念を流布させた」(p. 177)という。

儒教に基づく社会規範は、男性、女性の地位と役割を固定化した。家族において男性には決定権が与えられ、権力が序列化された。家庭内における男女の勢力構造は、女性が義父母、夫に仕え、家事、育児、家業においてどんなに貢献していても、女性に対する評価は二の次であって、男性よりも低い地位に置かれた。

個人に内面化された社会規範は家庭内で世代間に渡って受け継がれてきた。この社会規

範にそった生き方をすれば、男性として、女性としての役割が評価され、地位が保障されるのであった。

家庭とは、別個の環境の中で人生を歩んできた者同士が共に生きはじめる場である。年齢差もあれば、学歴、職歴の差もある。また国際結婚の場合は、エスニシティの違いもある。個人の差異を抱えつつ共同生活を送る婚姻関係において、ジェンダー意識が強いほど、従属、服従関係が生まれることは否めない。

長い期間に渡って脈々と受け継がれてきた家庭内の役割は伝統となって迫り、お互いを尊重しあう関係を作ろうとする意識の変化はなかなか難しい。このような女性と男性のあり方は韓国に限ったことではない。日本でもそうである。文化的な違いはあるが世界の各地で起きている普遍的な現実の問題である。社会によっては役割が文化的に深く埋め込まれており、その正当性を疑うことは難しい。伝統的に女性の役割を教えるのは女性であり、女性たち自らが踏襲している。しかしまた、それらについて疑問を持ち諸制度の反対運動をしてきたのも女性たちである。衣食住が整っていれば、基本的な生存権が守られているのだからそれだけで十分に幸せなことである。しかし、衣食住が整えられても、基本的な人権が守られていなければ幸せとはいえない。

本研究で考察する上での筆者の問題意識は大きく3つに分けられる。第一にフィリピン入国の際の意思決定は誰にあったのか。その際に、どのようなジェンダー役割規範がみられるのか。住む国が変わるということは、人生の目標や計画に大きな影響をおよぼす。誰の意思決定によって、フィリピンに来ることになったのかということは、入国段階でのジェンダー関係のあり方を考察する手がかりになる。

第二に、海外移住によって、家族内部のジェンダーに基づく関係性がどのように既婚女性、男性たちの生活を規定しているのだろうか。フィリピンで生活しているコリアンの場合は、夫婦、子どものみで舅姑の同伴はほとんどない。フィリピン移住後は家族形態が変わり、自ずと家族内の勢力構造も変化することになる。また、移住は必然的に、家族外部で接触する社会そのものが違う。家族員を媒介として、家族外部のフィリピン社会に適応しながら吸収したものが家族内部に取り入れられる。そのような日常が、家族内における地位と役割にどのような変化を生じさせているのだろうか。

第三に、フィリピン入国後の生活の変化についてである。夫の場合は、社会的な下降移動というものがないが、韓国では働いていた妻は仕方がなく辞職しているケースがみられる。妻はフィリピンで専業主婦になるか、もしくは夫の仕事の手伝いをするか、自営業を

はじめなど、男性と比較すると大きく生活が変化することになる。夫のフィリピンでの仕事は、韓国での仕事の延長線上にある。よほどの理由がない限り、夫の場合は、フィリピンにおける社会的地位の下降をほとんど経験することはない。この社会的な地位の下降という経験の中には、ジェンダー関係の再生産という構造も含まれている。

これらの問いから、コリアンの意識の変化をひろいあげ、ジェンダー関係の変容について考察したい。インタビューによって得たライフ・ストーリーを手がかりとして明らかにする。

本研究で取り上げるコリアンの場合、フィリピンで暮らしながら、韓国とは異なる文化や習慣に浸ることになった。女性の社会的な地位が高く、男女関係が相対的に平等とされるフィリピン社会においても、実際には階層性が伴うものであり、社会的にどの層に位置しているかによって、男女のジェンダー役割は異なっている。しかし、男性が主導であることがあたりまえであった韓国と、フィリピンとでは異なる価値観、習慣がいくつもある。

3. 研究の範囲と制約

本研究において、ジェンダー関係の変容を考察する際、対象としているのは既婚のコリアン男性と女性である。年齢層では 30 代から 70 代を対象にしている。平均して男性 47 歳、女性 46 歳である。そのため、表れた調査結果を一般化することはできないが、比較研究の際には、基礎的なデータとして活用が可能である。

さらに、本研究であつかったコリアンの居住地は、東南アジアの一国であるフィリピンに限定されている。社会における文化、性役割など、異質なことが多い国へ渡ることによって、ジェンダー関係の変容が顕著に表れるのではないかと考える。

また、彼ら彼女らは、仕事を持っているか、なんらかの社会組織に関わっている人々である。それゆえ、フィリピンにおけるコリアン社会や、フィリピン社会との接点を持っているといえる。その分、否応なくジェンダー関係の変容が迫られる環境にいる人々でもある。

自身が既に身につけている男らしさ、女らしさの意識を変えなければ、フィリピンという異国の地で生きぬくことが困難にならざるをえないということも意味する。そのような人々に限定した上で、ジェンダー関係の変容について考察したものである。

4. コリアン・ディアスポラとジェンダーに関する用語の定義

(1) ディアスポラ

本研究において、人の移動をディアスポラと総称する。コリアンは、世界各地に散在する民族集団である。彼ら、彼女らがディアスポラとして、複数の国に居住しているコリアンを繋げ、ビジネスや社会組織活動、また朝鮮半島統一に向けた活動を円滑に進めるための一翼を担っている。

華人ディアスポラ研究の陳（2002）によれば、「彼らの繋がり、物質的にも、また精神的にも、民族国家の枠組みを超えたものであり、しかも、彼らの活動や意識は、国家間の交流を深め、差異や境界を縮める働きを含んでいる」（p.122）、という。

ディアスポラという言葉は、ギリシャ語の動詞 *speiro* 「種をまく」という意味と、前置詞の *dia* 「分散する」に由来する。この言葉は、迫害を受けたユダヤ人の歴史における離散を意味するものとして長く使われてきた。しかし、人も資本もモノも自由に移動する時代にあって、世界各地に国境を超え、点在している民族についても、ディアスポラと呼称されるようになってきている。1990年代半ば頃から、学術的に使用されるようになったものであり、いまだ新しい概念である。

ロビン・コーヘン（Robin Cohen）はディアスポラの特徴を次のように述べている。

- (1) 祖国から、多くは精神的外傷を受けて、複数の異郷の地へ離散した。
- (2) それとは異なり、仕事探しや貿易のため、あるいはさらに植民地を拡大するために祖国から自発的に出国した。
- (3) 祖国について、その地理的な位置、歴史、達成などにまつわる共通の記憶や神話を持つ。
- (4) 先祖代々の土地であろうと推定される故郷を心の中で理想的に描き、その地の維持、再建、安全、繁栄に対し、また場合によっては建国に対し、共通の強い関心を持つ。
- (5) みな賛同のもとに帰還運動を推進している。
- (6) 長い年月にわたって維持し続けた強いエスニックな集団意識を持つ。その根底にあるのは、自分たちは特別であるという感覚であり、共通の歴史であり、また運命共同体であるという確信である。
- (7) 受け入れ社会との関係に問題がある。少なくともそれは受容されていないということの意味し、場合によっては新たな災難がその集団を襲う可能性を示唆している。

(8) 他の国に定住している同じエスニックの者たちとの間に、共感と連帯感を感じていること。

(9) 多元主義にたいして寛容な受け入れ国においては、素晴らしく創造的で豊かな生活をおくることが可能である（コーエン 2001 : 59）。

このようなディアスポラの特徴を、海外で生活しているコリアンからも見出すことができるのではないだろうか。コリアンは世界各地にエスニック・グループを構成しており、ディアスポラとしての事例研究が可能である。

人は複数の国家間を行き来することによって、多様な文化と言語が融合しあう体験をする。それは、一つの民族性を保持し、その視点からのみ物事を見るのではない。移動した国の文化に適応し、また各国の人々との交流によって、民族意識、伝統的家族の在り方などを見直し、自己認識が再構成されるきっかけになる。そのような生き方を実践している人々を、ここではディアスポラととらえる。

(2) コリアン・ディアスポラ

コリアン・ディアスポラは世界各国にどのぐらいいるのであろうか。2007 年では、世界各地にいるコリアン・ディアスポラは、169 カ国に 704 万人を数える⁽¹⁾（Overseas Koreans Foundation（在外同胞財団） <http://www.korean.net/morgue/status> 2007 年 11 月 28 日検索）（表 1 参照、11 頁に掲載）。

表1 コリアンの居住国家（2007年度）

	国家	人数
1	中国	2,762,160
2	アメリカ	2,016,911
3	日本	893,740
4	独立国家共同体	533,976
5	カナダ	216,628
6	オーストラリア	105,558
7	フィリピン	86,800
8	ベトナム	53,800
9	ブラジル	50,523
10	イギリス	41,995
11	ニュージーランド	32,972
12	インドネシア	30,700
13	ドイツ	29,800
14	タイ	25,000
15	アルゼンチン	21,592
16	マレーシア	14,934
17	フランス	13,981
18	シンガポール	12,656
19	メキシコ	12,070
20	グアテマラ	9,944
21	インドネシア	7,367
22	イタリア	5,502
23	パラグアイ	5,431
24	スペイン	3,606
25	南アフリカ共和国	3,480
26	台湾	3,166
27	その他2,000名未満の国家	50,424
合計	169カ国	7,044,716

コリアンの移動について

第1期 流出期(1860年～1910年)
(農業)ロシア、中国、ハワイなど

第2期 流出増加期(1910年～1931年)
(強制労働)ロシア、満州、日本など

第3期 強制移動期(1931年～1945年)
(強制労働)満州、サハリン、日本、東南アジア

第4期 潜在期(1945年～1965年)
(労働、留学、国際結婚、戦争孤児)
アメリカ、西ドイツなど

第5期 噴出期(1965年～1974年)
(労働、農業、戦争)
アメリカ、ベトナム、ヨーロッパ、南米など

第6期 転換期(1975年～1997年前半)
(貿易、ビジネス)
中東産油国、東南アジア諸国、アフリカ、中国など

出所: 国民生活体育協議会韓民族祝典本部 1994年

第7期 移民ブーム期(1997年後半～2000年以降)
(就職、ビジネス、留学、国際結婚、出産、老後の移住)
ニュージーランド、アメリカ、フィリピン、フィジーなど

出所: Overseas Koreans Foundation (在外同胞財団)

<http://www.korean.net/morgue/status> 2007年11月28日検索

朝鮮半島は第二次世界大戦前から人々を送り出す国であった。その歴史は、1863 年にロシアに移動した農民から始まり、19 世紀末になると、中国へ生活の糧を求めて移動する人々が現れるようになった。1902 年には、アメリカン・ドリームを抱いて、ハワイへ砂糖きび農場の労働者として流入するようになり、1910 年以降、日本による植民地時代のもと、さらに周辺大国への移動が加速することとなった。戦後も帰国を断念し、定住を決心した人々は、それぞれの国において家族をつくり、また、親族を呼び寄せ、コリアン・ディアスポラによる同胞のコミュニティは拡大していった^②。

1950 年以降、コリアンの移動には新しい要因も作用することになった。朝鮮戦争やベトナム戦争、1960 年代後半から 70 年代に韓国で強力に進められた移民政策は海外へとコリアンを促した^③。1963 年以降は、西ドイツへ炭鉱労働者と看護師が、1966 年以降はベトナム戦争を契機として建設、沿岸輸送、港湾荷役をはじめとする各種技術者などが派遣されるようになった。ベトナム戦争が終息する前後、1974 年頃から、イラン、サウジアラビアを中心に、中東地域に建設労働者が移動するようになった。また、それだけでなく、世界中へ多くのコリアン船員を送りだすようになった。

1962 年の海外移民法が制定された以後、1977 年度末までの移民総数は、301,172 人に達した。国家別に見ると、アメリカが全体数の約 77%、カナダは約 5.6%を占めており、ブラジル、パラグアイ、ボリビア、アルゼンチンなどの南米地域は 9.9%であった。移民を類型別に区分してみると、招聘移民が 201,483 人で最も数多く占めており、国際結婚が 51,001 名、養子が 44,702 名、契約移民が 3,986 人の順であった。

図 1 (15 頁に掲載) は、コリアン男女の年度別にみる海外への出国者数についてである。常に男性のほうが女性よりも多いことがわかる。次に図 2 (15 頁に掲載) をみてみたい。これは、海外移住を目的とする男女の出国者数についてである。こちらのほうでは、常に女性が男性を上回っていることがわかる。

海外移住者は年々減っている。1975 年の海外移住者は 35,642 人で、そのうち女性は 20,287 人、男性は 15,355 人であった。これに比べ、1992 年の海外移住者数は 19,053 人で、約 1 万 6 千人減少した。

「海外移住者の男性 100 人当たりの女性の数は、1975 年 132 人、1992 年は 130 人と引き続き高い数値を示している。特に海外移住が多かった 1980 年、1985 年にはそれぞれ 144 人、141 人で、男性 2 人に女性 3 人の比率であり、女性の海外移住が多いことを示している。年齢別では男性 10 代および 20 代が最も多く、女性は 20 代が圧倒

的に高い数値を示している」(大韓民国政務長官(第2)室 1996:12-13)。

1997年まで人数は減り続けるが、男女の人数差はほぼなくなり、1999年以降はまた移住者数が右あがりをみせている。ところが、1980年代後半以降からは、経済のグローバル化の影響によって、アジア域内におけるこれまでとは違う人の流れがみられるようになった。特に、1987年の韓国の民主化に向けた社会情勢の中、国内賃金の上昇も伴って、低いコストで生産できる東南アジアへ工場を移転する人々が急増したことである。それは、従来のように永住を目的とする人の流れではない別のタイプである。

コリアン・ディアスポラは、コーヘンの分類によれば、①犠牲者、被害者ディアスポラ、②労働者ディアスポラ、③貿易ディアスポラ、そして移住先において芸術分野で花を開かせている④文化的なディアスポラという4つの側面から考えることが可能である。そして、コーエンでは取り上げられていないが、新たに⑤投資ディアスポラを新たに加えることができるだろう。

コリアンは、海外に住んでいる自分たちのことを、「韓人」(ハニン)と呼んでいる。各国にて「韓人会」(ハニネ)を設立している。これは、親睦、交流の意味合いを持ち、ホスト社会の情報も得ることができ、コリアンの拠点とも言える。その会の呼称にも、「韓人」という言葉が使用されている。朝鮮語辞典(小学館、韓国・金星出版社編 1994:1883)によれば、これは韓国人(ハングギン)の縮約形である。

しかし、海外居住の長い歴史を持つ人々は、その居住国別によって、それぞれの呼称を持っている。中国の吉林省にある延辺朝鮮族自治州と長白朝鮮自治県を中心に居住している人々は、「朝鮮族」(チョソンジョク)と呼ばれている。また、旧ソ連にいる朝鮮民族は、「高麗人」(韓国語ではコリョサラム、ロシア語ではカレイスキー)と言われている。この人びとの多くが、日本の植民地統治のもとで旧ソ連へ労働者として渡り、戦後現地に留められ、さらにスターリンの少数民族政策のもとで中央アジアへ強制移住させられた人たちである。そのほかに、アメリカ在住の人びとについては、韓国系アメリカ人といったように、別々の呼称がある。韓国本国にいる人々は、海外に在住している人々を、僑胞(キョッポ)と呼んでいる。

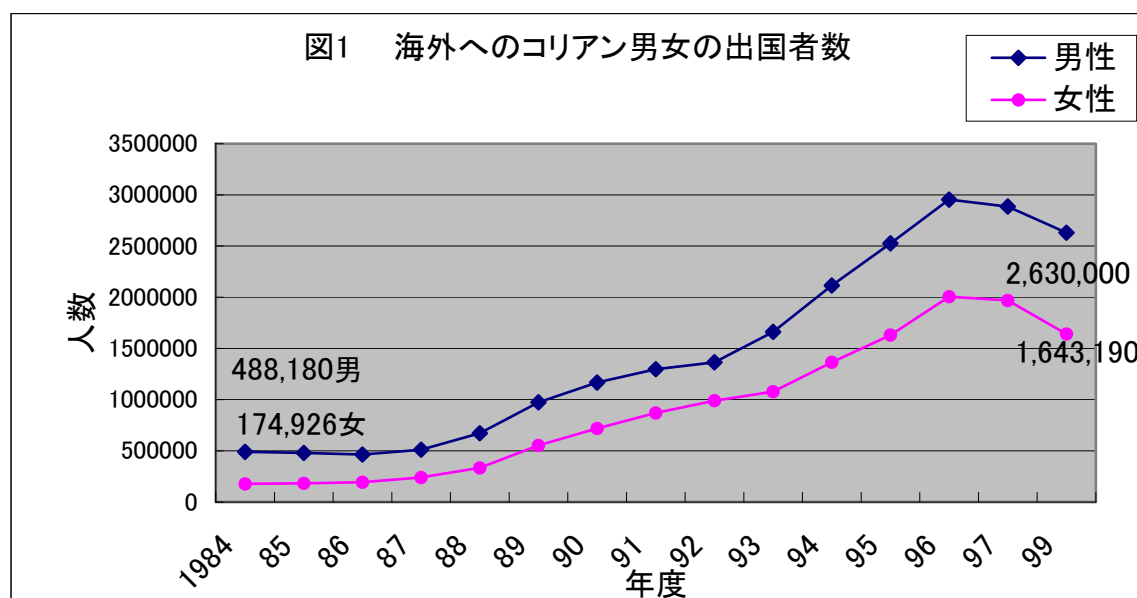
学術的な面から言えば、1980年代に、ハワイ、アメリカ本国在住のコリアンを、コリアン・ディアスポラと定義する論文も報告されており、海外在住のコリアンを、多角的に捉える視角が芽生えてきた(Bergsten & Choi 2003、高全 2007)。

コリアン・ディアスポラの歴史を紐解くと、彼ら、彼女らの移動の歴史は、朝鮮半島が

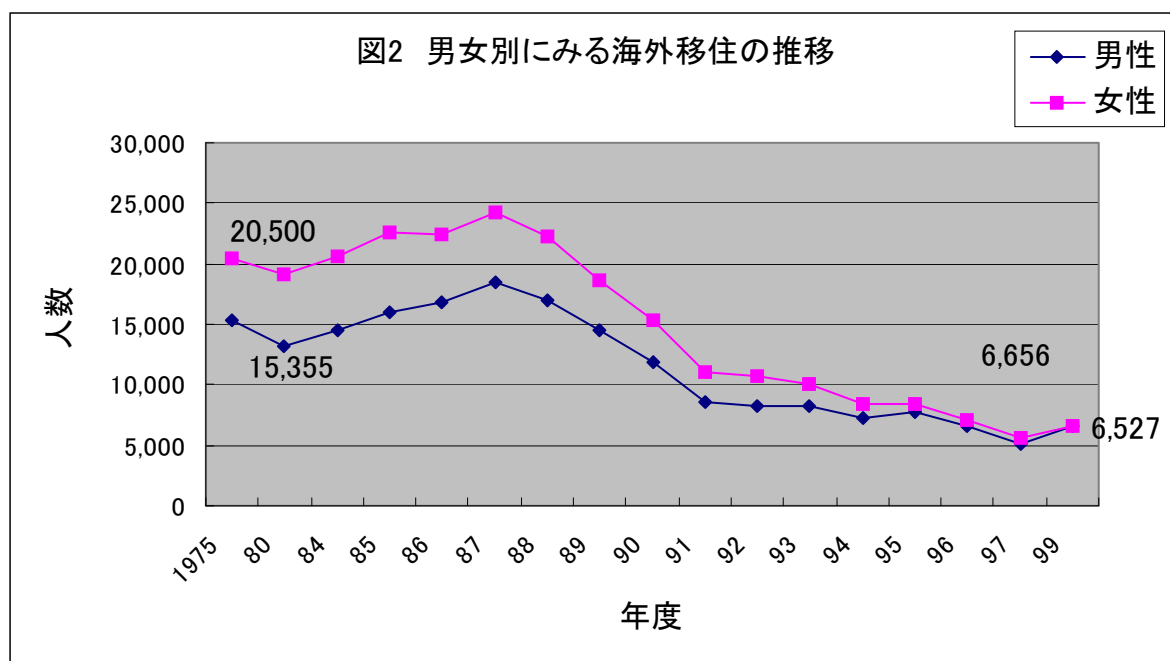
北と南に分断される以前から織り成されている。英語名のコリア (Korea) という言葉は、朝鮮半島の歴史上、初めての統一国家である高麗 (918 年～1392 年) の朝鮮語音コリョ (Koryo) が語源である。コリアン・ディアスポラの起源が、南北分断以前からのことである。そこで、本研究ではコリアンと称し、コリアン・ディアスポラとする。

本研究が対象としているのは、フィリピンのコリアン・ディアスポラであるが、彼ら、彼女らは、同じようにフィリピンに居住している華僑、アメリカ人、日本人、オーストラリア人など、多様なエスニック・コミュニティとも交流し、共存している。コリアンとフィリピン人の国際結婚も年々増加しており、その子どもたちの人数も着実に増え続けている。

フィリピンのコリアンは、民族心を保ちながらも、そのことのみに執着するのではなく、多様な文化に接触しながら、改めて自己を捉えなおしている。彼ら彼女らは、ディアスポラとしての立場を生かしながら、韓国とフィリピン、さらに多国間の国際関係を構築する橋渡し役にもなっている。韓国資本のグローバル化を進展させる中枢を担っているともいえる。



出所：韓国法務部出入国管理局『出入国管理統計年報』各年版より作成。



出所：大韓民国政務長官（第2）室『韓国の女性 アジア女性シリーズ No.4』（財）アジア女性交流・研究フォーラム、1996年、12頁より作成。

法務部出入国管理局『出入国管理統計年報』1985年、267頁、1986年、89頁、1987年、31頁、1988年、39頁、1989年、47頁、1990年、47頁、1991年、29頁、1992年、57頁、1993年、57頁、1994年、63頁、1995年、63頁、1996年、61頁、1997年、61頁、1998年、61頁、2000年、57頁より作成。

(3) ジェンダー関係とその変容

ジェンダーとは、生まれつきの男性、女性という生物学的な性差（セックス）とは区別されたものである。男性、女性がもつ生まれつきの性と、社会が作り出した「男らしさ」、「女らしさ」の行動基準、性役割規範とは、いつも一致するとは限らない。

私たちは幼い頃からの教育や周囲の環境によって、その社会に必要な知識や生き方を自然に学んでいる。女らしさ、男らしさ、女はこうすべき、男はこうすべきという違いは、社会的につくられたジェンダーであり、国や文化により内容は異なる。性別によって周囲から期待される役割が違う。そのような社会に暮らしながら、無意識的に、また意識的にも社会が求める男らしさ、女らしさを自分の内面に取り込んでしまうことになる。このような社会の構造自体が変わらなければ、両性の平等はありえないのかもしれない。しかし、個々人の意識の持ち方を変えない以上、社会は変わらず、両性の平等の実現はほど遠いものになる。

ジェンダーの概念は、フェミニズム運動のなかで獲得されたものである。フェミニズムとは、「家父長制という概念を手がかりに、女性を抑圧する社会システムからの解放を唱える理論体系および運動である」（菊池 2004：210）。

フェミニズム運動は、公の場や市場といった家庭の外部の領域における男女の権力関係を問題にした第一波フェミニズムから始まり、身近な人間関係における男女の権力関係を問題にする第二波フェミニズムへと移っていった。当たり前のこととされていた男女の社会関係を権力関係ととらえ、男性が女性を抑圧する構造を家父長制と名づけた。さらに、フェミニズムの視点は、従来の学問体系が、男性中心に作られてきたことを明らかにし、学問における権力関係を変革するために女性学が誕生した（前掲 212）。

女性学は、男性から抑圧され疲弊している状態の中でも、問題に対処する能力を自己の内面から発揮し、主体的に生きていきぬいていく力をエンパワメントとした。しかし、女性が抑圧されていることは、男性もまた、男性らしさのために抑圧されていることだとする男性学も誕生した。こうした流れの中から、1980年代の後半になると、女性学、男性学の両者を統合する形で、ジェンダー学が産声をあげるようになった。

ジェンダー学の概念は、社会的に作られたものは社会的に変更することが可能であることを示している。女性だけではなく、男性もまた生きる力を得るための方向性を指し示すものである。本研究が用いるジェンダーの視点は、男性と女性の双方を視野に入れており、両性の関係を必然的に含むものである。

本研究では、夫婦を対象としている。本国とは異なる文化に家族と身を置いている人々である。外国に住んだ時、想像もつかなかったような生活習慣や風習、文化にさらされて別の生き方、生活が存在することに驚く。そこで初めて自身が育ってきた国の文化、伝統的価値観について比較し、疑問を持ち始め、これまでの自身の生き方をふりかえる機会になる。

伝統的な性差役割が顕著にみられる社会から、フィリピンのような比較的、平等的性差役割を持つ社会に移り住んだ場合、どのような経験をしているのだろうか。出身国と移住先の国の文化、それぞれから学んだ価値観が拮抗することにより、物事の考え方が変容していくきっかけになるのではないだろうか。

ここで意味するジェンダー関係の変容とは、生まれ育った国、社会における固有の男らしさ、女らしさに基づく男女の役割を問い直し、新たな関係を作り始めていくことをいう。性による地位や役割意識を超えて、1人の人間として、自分らしい生き方を歩みだそうとする意識の転換に着目している。

本研究は、コリアン・ディアスポラの生き方をとおして、ジェンダーがはびこる生活空間を読み解き、両性における格差、平等観の意識の乖離を、少しでも埋めることができる一助となることを目指している。

第2節 調査の経緯と方法

1. 調査の経緯

そもそも次のような経緯から、本研究はスタートすることになった。筆者は、卒業論文（1993年12月、四国学院大学文学部社会学科国際平和学コースへ提出）と修士論文（1998年1月、大阪外国語大学大学院修士課程外国語学研究科インドネシア・フィリピン語学コースへ提出）において、フィリピンにおける韓国企業の進出について取り組んだ。

日本人である筆者が、なぜ、フィリピンへ行き、日本人を対象にではなく、コリアンを調査対象者として研究を続けてきたのか。まず、筆者が、韓国語とフィリピンノ語を学んだことにより、それらの言語を母語とする人々に接触できる要件をえていたからである。そして、1990年代の時点で、日本企業のフィリピン進出の事例研究はかなりの蓄積があったが、当時は新興工業国であった韓国企業の海外進出については研究がはじまったばかりの段階であったからである。

筆者が学部生の頃、1993年8月から10月にかけて、フィリピンにおける韓国企業の進

出について調査する目的で、韓国企業 31 社を訪ねた。カビテ輸出加工区、バタアン輸出加工区、ラグナ国際工業団地を訪ね、コリアン経営者 31 人（男性 30 人、女性 1 人）およびフィリピン人生産現場労働者、事務職員、幹部職員計 124 人（男性 46 人、女性 78 人）へインタビューとアンケート調査を実施した。

その調査の際、近隣のホテルに滞在したこともあれば、コリアン社長宅にも宿泊し、妻、子どもたちの生活に接する機会を得ることができた。また、フィリピン人従業員寮に滞在し、フィリピン人スタッフと寝食を共にしながら、生産現場に同行し、作業を手伝う参与観察をおこなった。

1995 年から 1996 年にかけては、フィリピンにおける年間売上金額上位 7000 社にランクされた、韓国系企業 83 社および、商社、銀行など 13 社の計 96 社（男性 88 人）を対象に、直接、コリアン経営者へのインタビューを実施した。筆者が過去の研究で対象としたコリアンの男性ビジネスマンは、日曜日には必ず、キリスト教会での礼拝を欠かさない信仰熱心なクリスチャンが多かった。筆者も毎週、コリアンたちが集うキリスト教会の礼拝に出席していた。彼らは、皆、家族同伴で出席しており、ビジネスの実態と共に、プライベートな家族の様子を伺い知ることができた。

やがて、筆者の関心は、海外企業進出研究から、コリアン・ディアスポラ社会の形成に広がり、2001 年 7 月、最大組織である韓人会の会長をはじめとする、各種協議会の代表者にインタビューを行った。ビジネスの傍らボランティア活動を通じて、フィリピン人と接点を持っており、別の姿もありありと見えてきた。

そして、それまで筆者自身が、男性の語りからしかとらえていなかったコリアン・ディアスポラの存在を再構築すべく、2003 年 1 月から 2 月にかけて再度フィリピンへ行き、コリアン女性を中心にライフ・ストーリーを聞き取る作業をおこなった。

調査対象としたフィリピンのコリアンは、思春期を韓国で過ごしてきた人々である。1930 年代から 1970 年代生まれと年齢層の幅は広いが、大半の人々が、韓国が軍事独裁政権の時代、またその残像のある時代に多感な青春期を韓国で過ごした人々である。

その時代、韓国では儒教を背景とする民族教育が熱心に行われ、また、家父長制に基づき男性は生産労働に、女性は家庭内のことをする再生産労働という概念が、家族形成や、就業にまで大きく影響していた時代である。

儒教の文化背景の中で育ったコリアンが、人生の途中段階で国境を越えて、生活拠点を海外へ移すことになった。それまで内面化し続けてきた、理想とされる男らしさ、女らし

さの意識を変化させ、新しい経験を積み重ねている。

1996 年までのインタビューを通じて、いくつか気がついた点があった。その一つが、男性は果敢にフィリピンでのビジネスに取り組んでいるが、妻は夫の身の回りの世話をし、情緒面からも支え、子どもにとっての良き母であること意外の顔が見えないという印象であった。夫は出国前と変わらずビジネスをしているが、女性は大きな変化の中にいるようにも見えた。

現在、フィリピンのコリアン・ディアスポラ社会は、ビジネスマンとその家族によって形成されてきたといっても過言ではない。女性たちは妻として、母として、家族を支え、韓国企業のフィリピン進出を支える役割も担っていた。

本研究では、コリアン・ディアスポラの男性、女性の意識が相互作用することによって、それぞれの生き方が多様に変化し、韓国本国とは違った新しいジェンダー関係のあり方に着目している。

2. 調査の方法——ライフ・ストーリーから

本研究におけるデータは、フィリピンのマニラ首都圏でおこなった聞き取り調査に基づいている。語る側にとって、自分のこれまでの生活を振り返ることは、これまでの経験、体験と現在の意識の持ち方を結びつける作業になる。聞き手側は、話し手の個々人が置かれている状況を聞きだし、ありのまま理解することによって、ステレオタイプに染まることを避けられる。

フィリピンに来てからの心境の変化、具体的な日常生活などは、本人からの語りを聞くこと以外に知ることはできない。本人の口から語られる言葉から個人の歴史を積み重ね、それを分析することによって、具体的な検証が可能になる。本研究では、語りに注目することで、男性、女性自身の視点に接近しようとしている。彼ら、彼女たちが生活の中で、男らしさ、女らしさの価値観をどう変容させ、自分らしい生であり、性を生きているのかを知ることができる。

ここで、ライフ・ストーリーとライフ・ヒストリーの用語の違いについて考えてみたい。ライフ・ヒストリーは、一人の人によって、これまで生き抜いてきたヒストリーをいう。一方で、研究者の依頼で、個人の歴史のある時期に語られるストーリーとは区別をつけないといけないという反省から、ライフ・ストーリーという用語がある（ベルトー 2003 : 31-32）。

本研究では、筆者のフィリピン滞在期間が限定されていたこともあり、調査対象者全員に生まれてからこれまでのこと、すべてを聞き取ることができたのではない。人生のある部分を、その人にとって最も重要な意味も含む部分を語ってもらった。そのため、本研究では、ライフ・ヒストリー（人生の歴史）ではなく、ライフ・ストーリー（人生の物語）という解釈によって、語りを収集したものである。

フェミニスト社会学者らによれば、個人史を聞き取るとは、社会的行動につながるものと位置づけている。なぜならそれは、女性の個人的な体験が、実は多くの女性と共通していることを気がつかせるからである。個人の問題は、社会的な問題であると知ることになるのである。それが、女性の意識を目覚めさせることになる一つの方法であるという（ハム 1999 : 175）。

男性が自分の理念や文化、言語を標準的で規範的なものとする中で、そこから疎外された女性は自分の言葉を失い沈黙し「他者化」されてきた。しかし、逆に女性の持つ「周縁性」が、問題の本質を捉える視座を有する可能性が高いため、男性中心の社会・文化構造が生み出した問題に対するオルタナティブを提起する力を持っている（趙 2002）。

本研究では、女性の体験や視点を改めて見直し、コリアンのジェンダー関係について考察したい。女性が単に性が違うという理由で担っている役割や彼女たちを取り巻く社会構造について、女性の内面を聞き取り、そこに男性がどう関わっているのかについて分析したい。

また、ディアスポラの視点を採用することにより、周辺国から中心国への人の移動や、その逆方向といったレベルを超え、移動した生活空間に焦点をあてて分析することが可能になると考える。

第3節 フィリピンと韓国の社会背景

1. 調査地であるフィリピン社会について

フィリピンはスペインによる植民統治以前までは、男女平等の社会であったことが知られている。フィリピンの親族制度をみても男女平等観があることがわかる。親族体系が父系もしくは母系の一方だけをとらない双系制である。しかし、1565 年以降、333 年間におよぶスペイン統治期の間に、「植民地行政による戸籍の導入によって男性戸主制度が協調されるようになり、本来の男女平等的家族のあり方が変化したとも言われる」（玉置 2002 : 62）。

スペイン及び、その後の 40 年あまりに渡るアメリカ統治期間も含めて、政治、経済システムが男性主導となり、女性が男性に従属的な立場においやられることになった。スペインからカトリックの信仰がもたらされ、アメリカからは女性に対しても教育がもたらされたが、同時に、性別役割分業が浸透することになった。

また、多国籍企業の進出は、生産過程の細分化によって、特定の分野における若い女性労働力が大量に流入することになり、労働分野における性別分業を促すことになった。

フィリピン国内における性的分業に関する研究によれば、グローバルな経済・政治・文化の再編成がフィリピン人女性の労働と生活に影響を及ぼし、生まれ故郷から都市への移動を促したと指摘している。そして、都市に出てきた女性たちのほとんどが再生産労働の職種に就いている。これまでフィリピンという社会の枠の中で展開されてきた再生産労働が、現在では国境を越えて移転している（エヴィオータ 2000：274-282）。

しかし、フィリピン社会は、女性大統領にみられるように、社会における女性の地位が高い。女性が働くことはごく自然なことであり、持っている能力を社会でいかさずに家庭に留まることは経済的に非効率であると一般的に指示されている（永井 2001：105）。さらに、フィリピンの場合は、安い賃金で住み込みの家事、育児、また介護労働者を担う女性が豊富におり、働く女性を支える基盤がある（前掲）。

フィリピン人女性たちが職に就き収入を得るようになって、家事、育児など妻・母の役割は依然としてある。無償の再生産労働と有償労働のうち、再生産労働は外部に転化する傾向が強まることになる。その部分を、低賃金の家事労働者に任せることになり、女性間の階層化がみられるのである。

その一方で、海外出稼ぎ者約 700 万のフィリピン人のうち、その 6 割を女性が占めている。フィリピン人女性は、家事労働のほか、老人介護、看護師といった有償のケア労働に従事するなど、国際的規模で再生産労働（reproductive labor）の需要が生まれている。

海外へ出稼ぎにいく女性たちの場合は、雇用者の子どもの世話や家事をしている一方で、フィリピンに残してきた自分の子どもは、家族や親戚、近所に住む人々、あるいはメイドにまかせることになる。彼女たちは、先進工業国で専門職に就いている雇用主を支える立場であり、同時に、フィリピンにいる子どもたちを世話する家事労働者を、彼女たち自身が雇っている。これを構造的に見れば、2 つの国家において家事労働の国際分業という、女性間での三層を成す再生産労働の構造が形成されているのである。彼女たちは、2 層目に位置しており、労働市場における矛盾した階級移動もしくは社会的地位の変化を経験し

ている。これは、先進工業国と発展途上国間において女性間にヒエラルキーをつくり、不平等なジェンダー関係が構造的に作られているのである (Parreñas 2001)。

さらに、パレーニャスは、移住労働者は国境を越えて、物理的には家族と離れて暮らしているが、家庭内におけるより平等なジェンダー分業が実現されるわけではなく、離れていてもなお、ジェンダー不平等な関係が再編成されている様相を述べている (パレーニャス 2007 : 127-147)。

国連開発計画 (UNDP) は、国会議席数、議員・高官・管理職、専門職・技術職等における女性の割合を示す、ジェンダー・エンパワメント指数 (GEM: Gender Empowerment Measurement) を毎年、発表している。2006 年版によると、177 カ国のうちフィリピンは 45 位で、韓国は 53 位であった (国連開発計画 (UNDP) 編 2007 : 417-420)。韓国、フィリピン間における経済発展の格差が歴然とあるが、女性の地位で考えるとフィリピンのほうが凌いでいる。

2. 韓国の女性をとりまく儒教

韓国の女性の立場は、儒教的な家父長制の影響のもと男性に従属的であることが求められてきた。そもそも儒教が日常生活に重要な位置を占めるようになったのは、李朝時代 (1392 年-1910 年) 以後のことである。

高麗時代 (918 年-1392 年) 末、中国の宋から導入された新儒学 (Neo-Confucianism、朱子学) が、李朝時代以後、支配イデオロギーとしての地位を研究し、それに基づく社会全般の改革が推進された。今日の韓国社会で見られる強力な父系偏向性および男性優越主義は土着的な本来の韓国文化の特徴というよりは、約 500 年間にわたって形成された韓国文化を「儒教化」するための意図的な努力の結果と考えられるべき (文 1997 : 241) という。

そして、現在にまで受け継がれてきた儒教は、韓国女性の生活を規定するほどの影響を及ぼしている。

韓国社会で「代を継承する」ということは、男性の血統を引き継ぐという意味が強く、血統は必ず息子を通じて継承されなければならないと考えられてきた。また、息子は姓氏を継承し、父母の老後扶養の責任を負う。父母の死後には祭祀を行う権利と義務を持つことになる (前掲 244-245)。

言い換えれば、

女性にとっての最大の目標は、息子を出産し、「立派に」育て上げることを意味している。息子を出産することによってはじめて、女性の婚家での地位、社会的な地位も安定することになり、その息子が成長し家長になれば、「家長の母」として尊ばれ、相当な権限をもつことができた。つまり、嫁としての立場では女性は無力であるけれども、息子が成長し、家長となれば、息子が母の地位確保と老後の生活、さらには死後の祀りを保障してくれるのである（山本 2002 : 51）。

このような男性優位の社会規範は、家系を継ぐために女兒よりも男児の出生が期待された。妊娠中の検査で女兒と分かれば中絶が繰り返されてきた。1970 年生まれの男女の人数は、男児 1,605 万 7,000 人、女兒 1,586 万 5,000 人、1980 年生まれでは、男児 1,925 万 9,000 人、女兒 1,886 万 5,000 人というように、男女の人数差がみられる（国際連合経済社会情報・政策分析局人口部編 1996 : 792）。

家父長制は女性の生き方を規定しているといえる。しかし、その女性たちもまた期待される役割を遂行し、理想とされる女性像を現実のものとした時、家庭内の地位を獲得し、韓国の嫁、妻、母としての評価も得られるのである。極端に言えば、女性としての名誉を得なければ生存価値が認められないような差別意識が家父長制には含まれている。女性たちは家族という個人的な関係において、心から湧き出る気持ちで相手に接するというよりも、従順になることを選んでしまう。これが結果として、女性たち自らが、女性たちを束縛する規範をのこしていくことにつながったといえよう。

趙（2002）は、「大多数の女性は懸命に働きながら耐えてさえいれば、いつかは母として報償を受けることができ、夫の家系の堂々たる祖先になるという確信を持っており、そのことによって家父長制的体系に自発的に忠誠を尽くしてきたのである」（p.34）と述べている。

しかし、1970 年代から各種女性団体が、女性蔑視に対抗する運動を展開してきたことにより、徐々に父系血縁を重視する価値観は変容しつつある。

社会も大きく変動し、重要視されてきた結婚についても、晩婚化がみられる。1998 年の統計によれば、25 歳～29 歳の年齢の婚姻率が男女共に最も多いが、30 歳～39 歳の間に婚姻する率も上昇している。離婚率も、1995 年 1.46%だったのが、1998 年には 2.12%と増えている（国際連合経済社会総局編 2001 : 505、521）。

女性の役割を固定し、地位を最下層においていた戸主制度は、2008 年 1 月以降、新しく身分登録制度に変更される。男性を「戸主」とする「家」単位の制度ではなく、現実に

見合った家族関係を記録し管理する形態となる。主な内容は、戸主の概念自体をなくすることである。また、再婚家庭の場合、子女は姓を変えることができること。そして、婚姻申告時、夫婦の合意の下で、子どもは母方の姓を名乗ることができる。また、女性が離婚する場合、離婚後 6 ヶ月以内の再婚が禁止されていた規定も廃止された（金 2006 : 184）。

本研究で対象とする、フィリピン社会は韓国と比べると、はるかに女性の就業率が高い。その背景には、働くフィリピン人女性を下から支えるフィリピン人メイドがいるからである。住み込みで、家事および育児までも任される。そのような労働力が豊富に存在しているため、女性たちは結婚後、出産後も働き続けることが可能となっている。このような社会的背景があるため、フィリピンでは女性が妻であり母であるということにかかわらず、働き続けることはごく自然なこととしてとらえられている。

たしかに韓国における家族制度はかわりつつある。しかしながら、フィリピンで暮らすコリアンは、渡航までに韓国社会で身につけた社会規範によってフィリピン生活が始まった。婚姻後、妻は家庭に入り、家事、育児に専念することが求められる社会で生きてきたのである。経済的に自立している女性が働き続けようとしても、夫や義父母の意向に合わせて断念することもあった。韓国の伝統的な儒教の価値観から、妻役割、夫役割が固定的であったのである。

第 4 節 本論文の構成

本論文の構成は次のようである。以下、第 2 章では、先行研究の整理と分析枠組を提示した。第 3 章では、韓国側の統計資料をもとに、フィリピンへのコリアンの出国者数について考察する。ここでは、ジェンダー化された人の動きを確認する。第 4 章では、韓国資本のグローバル化現象についてである。コリアン男性ビジネスマンの置かれた状況とフィリピン人従業員に対する意識の変容について考察する。第 5 章では、社会組織活動によって、コリアンがフィリピン社会であらゆる人々と共存する道を模索している姿を示した。第 6 章では、コリアン夫婦におけるジェンダー関係の変容について、ライフ・ストーリーから分析した。第 7 章では、ジェンダー関係の考察と今後の課題を述べる。

本研究では、ジェンダーによる格差を前提とした人間関係から、ひとりの人間としての存在が認められる実質的な関係へと変容していく過程を明らかにする。

① 朝鮮半島の総人口は約 7195 万人（2006 年現在）である。そのうち、朝鮮民主主義人民共和国は約 2,311 万人（2006 年現在）、大韓民国は約 4,884 万人（2006 年 6 月現在）である〔日本 外務省 <http://www.mofa.go.jp> 2007 年 11 月 29 日検索〕。

コリアンが居住している国別人口を比較してみると、最も多いのが中国で 276 万 2160 人、次にアメリカが 201 万 6911 人、日本に 89 万 3740 人、独立国家共同体に 53 万 3976 人が住んでいる。コリアンが在住する上位 4 カ国が、全体人数の 91.5%を占めている。

アジア太平洋地域に限定してみると、404 万 0376 人が暮らしている。中国、日本の次にオーストラリア 10 万 5558 人、フィリピン 8 万 6800 人、ベトナム 5 万 3800 人と続く〔在外同胞財団 Oversea Koreans Foundation <http://www.korean/net/morgu/status> 2007 年 11 月 28 日検索〕。

② 1945 年 8 月 15 日、第二次世界大戦終了後のアメリカ軍政時期において、コリアンの海外渡航に関しては、米軍政府当局において管理されていた。1948 年、大韓民国樹立後、全ての行政機関が移管され、海外渡航に関する諸制度が策定されるようになった。1948 年 7 月 17 日に制定公布された政府組織法第 16 条によって、在外コリアンに関する業務は外務部長官が管掌することになった。外務部は 1949 年 2 月 17 日に、海外旅券規則として外務部令第 2 号を制定し、旅券発給および出入国に関する諸般手続きを規定した。

当時、コリアンの海外渡航は、おおよそ留学、一般商用、移民（国際結婚、養子など）、一般民間団体会議出席、国際機関技術訓練計画による視察、研究、国際機構会議など、公務遂行のための派遣が主なものであった。

③ 1961 年 12 月 31 日、法律第 40 号によって新しい旅券法が制定された。それに続いて、1962 年には、法律第 1030 号「海外移民法」を公布した。次いで、1967 年 3 月 30 日、法律第 1952 号「海外就業に関する法規」を制定公布した。政府は、国内の遊休労働力を海外へ送り出すことによって、失業率を緩和させ、外貨獲得および先進技術の習得に繋がり、経済発展の基礎固めになるとした。

第2章 先行研究のレビューと分析枠組

第1節 コリアン・ディアスポラ研究

世界各国で生活するコリアンについて、すでにかなり多くのことが明らかにされている。在米コリアンをはじめとして、中国の朝鮮族、旧ソ連の中央アジアに定住した高麗人（韓国語ではコリョサラム、ロシア語ではカレISKI）、在日韓国・朝鮮人、その他、東南アジア、オーストラリアに住むコリアンの研究など、各地におけるコリアンの諸相が明らかにされている。研究論文からルポルタージュまで、世界各国で暮らすコリアンについてまとめられたものがある（高 1993、仁科・舘野 1996、野村 1997、吉・片山 2000、朴 2002、姜 2002、国際日本文化研究センター 海外研究交流室 2006、高全 2007）。

米国における研究では、主に移住したコリアンの研究者、留学生らによって文化人類学、社会学、神学、心理学など、多分野に渡って豊富に蓄積されてきた。コリアン研究者のみならず、アメリカ人や日本人の研究者など、多国籍の人々が高い関心のもと研究をおこなってきた。

それぞれがホスト社会の枠組みの中で、マイノリティとしてのコリアンに着目している。子どもたちのアイデンティティ・クライシスや語学習得について、宗教を媒介とするエスニック・ネットワークや社会組織の形成について（Kwon 1997、Yoo 1998）、中間マイノリティとしての自営業の成功過程について、コリアン・タウンの形成史（原尻 2000）等、幅広く多様なコリアンの生活について研究されてきた。ジェンダーの視点からは、コリアン女性の職業獲得過程や家庭内暴力、離婚に関する研究がある（チャン 2007）。在米コリアンについては、ジェンダーの視点からの研究も精力的になされてきた。

しかし、研究の傾向として、大半が男性を主体とする移民社会についての研究である。海外移住に関しては、男性が主たる移動者であって、女性や子どもたちは同伴する家族として描かれがちである。一方で、東南アジアにおけるコリアン・ディアスポラについて、ジェンダーの視点からの研究は関心がもたれることはほとんどなかった。

夫婦関係に関する研究においては、やはり米国在住のコリアンについて蓄積があるため、本章では在米コリアンの先行研究を検討する。

第2節 米国におけるコリアン・ディアスポラの先行研究

在米コリアン研究において、女性たちがどのように描かれてきたのかを主に取り上げな

がら以下に説明する。

その歴史は、1900年代に砂糖きび畑で働くためにハワイへ渡った人々から始まった。大半が独身男性たちであった。彼らにとって、写真だけをみて結婚相手を決める写真結婚は、ハワイに定住することを希望に変えるのに十分な出来事であった。渡米を決意した女性たちは、韓国にいるアメリカ人宣教師から、キリスト教や西洋文化の影響を受けていたこともあり、冒険的でフェミニスト精神を持つパイオニア的な人々であったという。そのような女性たちの中には、韓国の伝統的な儒教の習慣に縛られ、抑圧されていた自身の状況に気がつき、儒教からの解放を求めてハワイに移住することを望んだ人たちもいた。

実際に移住してみると、彼女たちの役割は、家族の世話をすることであった。これは決して驚くべき現象ではなく、この時代、性差別の傾向から、女性にとって家事労働以外は考えられなかった。彼女たちはハワイにおいても、家長が決めたことに従う儒教の価値観から抜け出すことはなかった。写真結婚の女性たちは伝統的な儒教社会からの解放を望んで移住したものの、男性に従属的なジェンダー役割は変わらなかった (Lee 1996 : 136-143)。コリアン女性は、十分な技術、言語能力を持ち合わせておらず、アップパークラスの仕事は不可能であった。夫が経営する自営業の補助作業やハウスキーピング、ベビーシッターなど、低収入のブルーカラークラスの仕事のみであった (Ibid., 207-210)。

このようなコリアン女性の状況は、オーストラリアにおいても同じであった。オーストラリアへのコリアン移民は、1885年にコリアン宣教師が入国したことから始まる。その後、宣教師を頼って、短期の留学生が入国するようになった。しかし、女性の場合は、やはり家事労働に集中しており、1921年から1941年の間には、オーストラリア人家庭でハウスキーパーとして働く人々が入国し、定住するようになったのである (Han 1994: 67)。

しかし、高 (1993 : 144-145) によれば、ハワイにおける写真結婚のコリアン新婦たちは、韓人社会発展に大きく貢献したことを指摘している。彼女たちは、どのような逆境をも克服し、新郎を支え懸命に働いてきた。また、社会組織を結成し、同胞の地位向上や祖国の独立のために貢献したという。

アメリカへコリアン女性の移住が再び増加し始めたのは1950年6月に勃発した朝鮮戦争に起因する。朝鮮戦争に参戦した米軍人と国際結婚をしたコリアン女性の中には幸福な家庭生活を送った人もいた。しかし、大半は英語を満足に話すことができず、時がたつにつれて文化的葛藤、貧困、家庭破綻、社会的孤立といった諸問題に直面することになった (高 1993 : 152-154, Yuh 2002)。

さらに、1965 年のアメリカにおける移民法改正以降、米軍人と結婚したコリアン女性たちを頼って、親族、友人たちが大挙して流入するチェーン・マイグレーションの現象があらわれるようになった。当時の韓国は軍事独裁政権のため政治、経済状況が不安定な時期であり新天地を求める傾向が強まっていた時代でもある。基本的に変わらないことは、女性、子どもたちは自らの意志で移住したのではなく、移住は家長である父の意思決定によって決断されたものであり、それに従うものであった。

アメリカへの移住者は家族単位であったため、定住化が進むことになった。アメリカで生き残るために、家族、身内を労働力として活用しながら利益を上げていくスモール・ビジネスと呼ばれる自営業を始めるコリアンが急増した (Light and Bonacich 1988、Min 1996、Park 1997)。コリアンはアメリカ社会への同化の影響が少ない小売業に集中していた。そのような職種は高度な英語力を必要としなかったからである。

渡米前は非就業者であった女性たちが、移住後から家族経営の自営業を始めたため、女性の就業率が上昇した (Asis 1989)。しかし、女性たちの役割は家長の父もしくは夫の仕事を補助するものであった。また、当時のコリアン女性たちは、男性よりも最終学歴が低く、語学力が不十分で、女性であるという立場から、高収入の職に就くことはできなかった。就業可能な場合でもコリアンが集住する地域で、コリアン相手の販売業などであった。子どもが生まれれば、仕事よりも家事、育児に専念することが重要な役割とされていた (Lee 1988)。

スモール・ビジネスが順調に展開しているように見えたものの、1992 年、カリフォルニアで黒人とコリアンの間で起きた暴動をきっかけに、エスニック・グループの狭間にいるミドルマン・マイノリティの立場が浮き彫りになった (Shim 1992)。ミドルマン・マイノリティは、従属集団からは搾取者とみなされ、支配集団からは実際に搾取される構図に置かれているため、民族間あるいは人種間対立をこうむりやすい。このようなミドルマン・マイノリティとしての在米コリアン研究の他に、コリアンによるスモール・ビジネスの成功はエスニックリソース (同じ民族の人的ネットワーク) にあると分析した研究もある (原尻 2000 : 313-340)。

また、子どもに関することで言えば、虐待も問題になっている。アメリカ文化になじんだ子どもと、儒教の教えを重んじる親との間に価値観のずれが生じるようになることが 1 つの原因である。儒教の伝統的な規範を子どもに強制することによって、それに従わない子どもを虐待する現象が生じるようになった。母親は精神面での支援者が得られず、家庭

内で孤立してしまう状況になっている (Lee 1991)。アメリカに長期滞在することによって、精神的なケアの必要性が出ている (Kim et al 1994)。

独り暮らしの高齢者の問題も表面化するようになった (Hurh 1998)。カナダに住むコリアンの場合、社会への適応過程と精神衛生 (メンタルヘルス) についての研究成果も報告されている。カナダに到着した時点から、エスニック・ネットワークが手助けするため、精神的な面でのサポート体制ができていると述べている (Noh, et al. 1992、Noh, et al. 1994)。

コリアンを取り巻く諸問題について、多方面の分野から研究が積み重ねられてきた。一般的に、コリアンの特徴として次のようなことが指摘されている。まず、コリアン移民は、日常生活において英語よりも韓国語をより多く使い、韓国食を食べ、韓国の習慣を実践していることである。また、コリアンとしての民族性を維持するために、韓国独自の文化が米国で風化することのないよう次世代へ受け継がれている。受け継ぐ場として機能しているのが、家庭をはじめとして、家族が所属するキリスト教会や様々な社会組織である。

職業においては、コリアンが集住する地域には、コリアンを対象とする各種自営業が軒を連ねており、コリアン同士のつながりで、経済的基盤を維持していることである。在米コリアンは、文化的にも経済的にも同民族のネットワークを活用しているのである。

第3節 在米コリアンにみる男性及び女性の地位と役割変化

1. 家族関係の変容に関する研究

ムン (Moon 1999) は、コリアンのアメリカ社会への適応過程について研究をおこなった。ムンは、ワシントン D.C、ニューヨーク、シカゴなどにおいて、質問表による調査とインタビューをおこない、50 人の事例を収集した。

コリアンのハワイへの移住者は主に男性であったが、米国本土の場合は、家族型の移住であった。西欧諸国による植民地の影響を受けている香港、フィリピン、インドなどの移住者と違い、コリアンの場合は、英語力が不足しており、西欧文化には不慣れであった。そのため、米国社会に適応するには多くの困難が伴っていた。

米国におけるコリアンの家族像は、勤勉で緊密な家族観を持ち、それゆえ子どもたちは高学歴となり、低い離婚率、また低い犯罪率があげられる。しかし、実際にはどうであろうか。

ムンの問いは、コリアンは米国においても伝統的なジェンダー関係を維持した家族観を

持ち続けるのだろうか、ということである。コリアンにとって、最も重要なことは、目上を敬い、家族、親戚といった血縁関係を大切にすることである。外国生活に困ったことがあれば、まずは親族のネットワークを生かして解決を試みる。もしも家族の絆が希薄な場合、その代わりとなるのが、コリアン・コミュニティである。教会や様々な社会組織、知人などがそれにあたる (Ibid., 102)。

米国に暮らしているといえども、家庭内で韓国式の習慣、価値観を持つ人々と共に暮らし、家の外においても社会組織活動でそのような人々に接していれば、儒教の伝統を重んじる思考方式を批判することは難しい。批判する以前に、幼い頃から身につけた価値観であるだけに、長年に渡って内面化したものの正否がつかない。男性を家長とする男性優位の性別役割分業をこなすことが家族や社会の安寧につながると考える。

ムンによれば、コリアンは移住先においても、両親、親子、親戚関係がそのまま延長した家族形態を持ち込もうとすることである (Ibid., 99)。しかし、居住している国は米国である。圧倒的多数のアメリカ人や多国籍の人々に接触する暮らしは、コリアンの思考に影響を与え、家庭内における性別役割分業にも変化を及ぼしているのである。

実際に、在米コリアンたちは家族観について再定義をしているという調査結果が出ている。まず、重要な要因の一つは、夫婦が共稼ぎをするようになり、経済力をつけた妻の家庭内における地位が変化することである。

家族で経営する小規模な自営業の場合、夫一人で切り盛りできないため、妻も一緒に仕事をすることになる。夫婦が共に経営するということは、自然とそこには経営をめぐる夫婦対立が生じることになる。経営のみならず、家事、育児は女性の責任とされていたのが、妻の就労に伴って韓国的な性別役割分業の変更が迫られることになる。

ムンは、コリアン家庭における緊張と対立について次のように指摘する。コリアン移民家庭における緊張や対立というのは、家族観からくる。それは、伝統的な儒教思想からもたらされている。仕事や子どもを通じてアメリカ文化に接触する妻は、韓国とは違う平等主義に触れる。子どもたちも幼稚園や学校に通いながら韓国とは異なった教育システムの中で育つことになる。そうすると、韓国独特の伝統的な価値観に違和感をもち、受け入れがたくなる。その結果、家庭生活における男性優位の関係を拒否するようになり、家庭で安心感や満足感よりも夫との緊張感が高まることになる (Ibid., 100)。

経済力をつけた妻は家庭内での自己主張も強くなる。妻も働いているのだから、家庭においても、自営業においては職場においても夫と対等な関係を築くことを望むようになる。

女性が経済的に自立すると、男性は家庭での権威、権力、家族からの尊敬を保つことができなくなっていく (Ibid., 127-128)。妻は、家計を支えるために外で働くようになると、家事を夫もするものだと期待するようになる。しかし、実際のところ夫は家父長制度の維持に固執し、家事、育児は拒否する傾向にある。

コリアンの妻たちは、伝統的な役割から離れようとする。韓国にいた時のように、やみくもに義父母に仕えることもしなくなった。義父母は孫の世話をし、若夫婦が仕事をしやすいように手伝っている (Ibid., 131)。

もう一つの要因は、夫の社会的な地位の低下である。夫が韓国では会社員や公務員などホワイト・カラーで高収入の職に就いていても、アメリカではキャリアを活かす職にはなかなか就けない。韓国で妻は夫に従い尊敬する気持ちもあったが、アメリカで夫の社会的地位が下がることによって、夫に対する評価が低くなる。夫の収入だけでは家計を維持できないため、妻も働くようになり、場合によっては、不完全雇用の状態にいる夫よりも高収入を得ている。そうすると、家庭内における決定権に変動が出てくる。妻はアメリカの平等主義的な影響を受け、夫をパートナーあるいは親友として考える傾向が強まるが、反対に夫は、男性としての権威を失うことになる。そのため、家庭内で夫は、より強固に家父長的な暮らしを継続させようとする (Ibid., 106)。

夫は妻に対するコントロールを失うことに敏感になる。自立心を持つようになった妻を押さえつけるために、男性の中にたまったフラストレーションが暴力となってあらわれることもある。夫は思い描いていたとおりの生活を送ることができないことから、アルコール依存症になるものもいれば、妻を虐待することでストレスを発散しようとしている人もいる (Ibid., 105)。夫の暴力が原因で、在米コリアンの離婚率も上昇している (チャン 2007)。

コリアンたちは、米国に移住することによって核家族へと移行していく過程で、様々な緊張と対立を経験することになった。儒教によるヒエラルキーシステムに基づいたジェンダー役割が、米国の生活様式に触れることによって、新たな意味付けをはじめようになる。それは、個人主義、平等主義、小規模な家族の利点を強調する価値観である。本国へ帰り、再び、韓国の嫁としての暮らしをしたくないという女性たちが増えるという。妻は夫と共同で収入を得ているという意識に加え、家庭内のことは夫婦で決めるものであるという性役割観が芽生え始める。夫は逆に、自分の権威を失う恐れを抱くようになる。裏返せば、家族内における不均衡なジェンダー・バランスを生み出し、夫の暴力がはじまるな

ど、ジェンダー関係の変容には表裏一体の問題がはらんでいることも示唆している (Ibid., 132)。

パク (Park, 1995) は、米国在住の 304 人のコリアン夫婦を対象に婚姻満足度について研究をおこなった。文化変容度、居住年数、矛盾した社会的な地位、年収、教育レベル、決定過程、家事、コミュニケーションの問題等において婚姻の満足度がいかにみられるかを考察した。夫のほうが妻よりも婚姻満足度が高いという結果が表れた。妻は、米国の異文化に接触することで、新たな価値観を取り入れ、夫の愛情表現の乏しさに気づき、韓国にいた時のような従順な妻ではなくなっているからだ。

このような様々な要因によって、家族におけるジェンダー関係は再定義がなされているのである。

2. 働く既婚女性の意識変容に関する研究

上記のように、夫が男性優位な立場に固執することで夫婦関係に対立と緊張が生じる一方で、夫婦の関係がより平等に変容している過程を研究したものもある。

パク (Park 1997) によれば、コリアン妻が縫製業などの職に就いて収入を得た結果、家庭内のジェンダー関係がより平等に変容していることを明らかにしている一旦、社会に出ると、女性も男性と同等の給料を得ており、同様に家計に貢献していることから、女性たちは自尊心が芽生えることになる。この自尊心は、新しいジェンダー意識を生み出している。

家庭内においては、依然として男性優位であっても、社会に出れば女性も男性と対等に働き、生きることができると気がつく。家庭内でのジェンダー関係を変えることができない場合には、妻のほうから離婚を申し立てるとか、別居を選択することになる。女性たちも、自分自身の力で社会に出ていくことを学んでいる。

夫たちは妻が自分に従わなくなったことに気がつく。コリアンではなく、よりアメリカ人に近似しているようにみえる。韓国にいた時に、アメリカン・ドリームの実現を夢みて移住したものの、妻の意識変容によって、家族関係に変化がもたらされているという。

夫婦の関係が逆転したケースでは、妻が経済的に自立したことにより、夫が妻に頼るようになった。家、車を買うこと、子どもたちの教育、旅行の計画、両親の面倒や家計に関すること一切を妻が見るようになった例もある。

ウム (Um 1996) は、米国で働いているコリアン女性たちは仕事をしているゆえに、

家庭内での役割、すなわちジェンダー役割が変化しているのではないかと仮説をたてた。

米国ダラスにおいてコリアンが経営している繊維工場で働くコリアン女性を対象に、家族、仕事、社会的役割、健康、福利の諸側面について考察した。調査は 1991 年に実施された。74 人の女性に質問表を配布し、13 人の女性には直接インタビューをした。

職場では、男女によって賃金差がある。女性たちは、男性と同様の仕事をしている場合、男性と同額の賃金を受け取るべきだと考えている。しかし、強く主張できない。女性たちは、一家の稼ぎ手は男性であり、女性の収入は補助的なものであると考えている。また、女性の役割は外で働くことよりも、家庭の主婦であることを優先すべきだとする。職場における男女平等を望みながら、男性の意向に従うことを選ぶという矛盾を抱えている。韓国の伝統的な家父長制の構造が職場にも、家庭においても続いている。低賃金の労働市場に移民のコリアン女性が流入するという現実、アメリカ社会における弱者であることを示している。それは、エスニックの地位とジェンダーという二重の重荷に直面している。

3. 性別役割分業の変化に関する研究

米国在住のコリアン夫婦の役割と力関係の再構築に焦点をあてたリム (Lim 1995) の研究がある。リムは、ダラス在住の 18 組の共働きをしているコリアン夫婦を対象に聞き取り調査をおこなった。その内容は、夫が稼ぎ手で妻は主婦であるべきという韓国の伝統的な性別役割がどのような過程で変容しているのかということである。家庭内における不平等な性別役割分業をいかに変容させているのかについて焦点をあてている。

米国社会でコリアン家族が生き残るには、夫のみが働くのではなく妻も働かざるを得ない。伝統的な韓国の規範から考えると、男性は外で働き、女性は家のことをするということであるが、米国ではその前提を失うことになる。米国では、米国の文化とも混ざりあって、働く女性というものが、新たな女性らしさとして意味付けされることになる。

そのようになると、家事を一切したことのなかった夫が、家の中の雑用を引き受けることがごく自然のことになっていくという。意識の上で、妻は共に働くパートナーとして夫をみるが、夫のほうは、妻に対して家事を分担するパートナーとみる (Ibid.,175-176)。

しかし、このような関係は、ブルーカラーの職種にみられることだという。クリーニング店やレンタルビデオ店といった家族経営の仕事をしている家庭である。学歴がそう高くはなく、低収入の夫婦の場合にみられることであった。高学歴で、専門職で、高収入の家庭の場合は、夫が妻に対して、韓国と同じように伝統的な性別役割を求めるという (Ibid.,

71)。

しかしながら、米国で家族が生き残るために、夫のみが働くということはすでに古い考え方であるという、労働に対する新しい概念が生まれる。実際に、特別な技術や専門職でない限り、米国で夫の収入のみで暮らしていくことは難しい。妻たちは、働くことを、夫が主たる稼ぎ手という考え方から、共に働き同じく責任をおうものである、と定義しなおしている (Ibid., 73)。彼女たちにとって、働くことは、衣食住の意味のみではなく、子どもに高等教育を受けさせたいという気持ちもはたらいている。妻たちにとって、働くことは、もはや選ぶことではなく、自分の責任として捉えている。

一方では、社会で働く喜びを得ると同時に、女性が働くことが当然視されるという新たな社会規範に直面して、困惑している姿もある。義母から働くよう強要されることもある (Ibid., 76)。ここに、女性は家庭内のみにいるべきということから、家庭の外へ出なければならないという女性に対する社会的な文脈が再定義されることになる。男性は外で、女性は家でという韓国の伝統的な価値観が曖昧になるのである。そうすると、主婦であることに罪悪感を抱くようになる (Ibid., 77)。家事で精一杯であるのに、義母は働くように命じるため、外へ出なければならない。帰宅後は家事が残っているため休む暇がない (Ibid., 78)。しかし、働いて貯蓄をしなければ、米国社会で暮らしていけないという現状から、妻たちは働くことを選択している。なぜならば、家事労働は不払い労働であり、外で働くことは賃金労働とう別の価値観もともなってくるからだ。

また、夫だけでなく妻たちも社会的地位の下降も経験することになった。韓国では、国家公務員として働いていたが、米国ではクリーニング店のレジや織物工場で働いているという妻は、自身の職業を恥ずかしく思っている。精神的にどうにかかなりそうなほどであった (Ibid., 81) という。夫たちは、米国では自分の収入のみでは暮らしていくことができないため、妻も働くことを望むようになる。韓国では夫が働いて、家族を養わなければならないと思っていたが、もう、その考えは持たなくてもいいと考えるようになる。18組のうち10人の男性は、妻は同等の稼ぎ手であると答えている (Ibid., 83)。外で働くことが男らしさだとは考えなくなったという (Ibid., 84)。

しかしながら、夫婦共働きになっても、夫の側は、家事は妻がすべきものだという、強固な役割分担を消し去ることができないでいる。妻の就労は二次的なものであり、主たる稼ぎ手は夫である。そのため補助的な労働をしている妻が、家事もすべきであるという考えからはなかなか抜け出せない (Ibid., 130) 現実もある。

米国では、働くようになった既婚の女性たちが、夫に対して家庭内の家事の分担を要求し、家父長制による夫の権威的な態度に対して、抵抗していくという姿がある。女性たちは、韓国では家庭内にとどまり、外部との接触は、子どもを通じた親同士の繋がりなどであった。それが米国では、就労という過程を通じて、外部との接触が拡大されていく。すると、経済的な面でも家計を支えているという意識の芽生えとともに、家庭内での発言権も高まり、自立的な意識が養われていく。しかし、その反面、なかなか夫に仕えなければならないという家父長的な意識から離れることができずいる。

夫婦の間に主従関係から、協力関係という意識が生まれるのと同時に、依然として、上下の関係を保つほうが安定した家庭につながるという二面性を保持している。

4. 社会組織活動におけるジェンダー関係の変容

コリアン家族が米国社会に適応するための戦略の一つとして、社会ネットワーク (social networks) に着目したオ (Oh.,1988) の研究がある。コリアンは社会ネットワークに新たな意味付けと機能を与えているという。この研究は、1987 年に 34 家族から聞き取り調査をおこなった。

コリアンにとって重要なネットワークは、親戚、教会、同窓会である。家族はアメリカ人とのネットワークよりもコリアンによるネットワークに関わっている。隣人やアメリカ人の友人と親しくしているというのはほんの数例にすぎない。

米国におけるコリアンの社会的なネットワークは、韓国とは別の意味合いを持っている。まず、夫側よりも妻側の親族との繋がりが深まりはじめる。妻は相互に助け合う関係を自身の親族とより深め、感情的な絆も深まっていくが、夫の親族とは義務的な関係にとどまる。これは韓国とは正反対の関係性である。韓国における家族の文化規範は家父長制が基礎となっている。そのため夫の親族を最優先することになり、夫の両親は絶大な権威を及ぼすことになる。妻は自身の親族との交流を深めることが困難である (Ibid., 126-127)。

しかし、これは移住という過程で変容する。米国では、義父母と離れて暮らしているため、義父母の権威が及ばない暮らしになった。もしも義父母と同居の場合でも、年老いており、言語の障壁があること、また、嫁が外で働くようになると、力関係が変わってくる (Ibid., 130)。

もう一つ重要なことは、コリアン移民家族にとって、より優先的な社会的ネットワークが、妻の親族のほかに教会、同窓会といったものである。夫の親族は最後に位置づけられ

ていることである。教会は宗教的な意味合いのみではなく、コリアンという民族性、文化を集結させる場であり、日常生活における家族間の相互扶助を受けることのできる拠点となっている。また、同窓会は個々人を主体とする感情的な支えとなり、米国生活をスムーズに送ることができる (Ibid., 131-132)。さらに、米国移住後は、家族が共に外出する機会が増え、友人とも家族ぐるみの付き合いをするように変化した (Ibid., 182)。

5. ジェンダー関係の変容に伴う暴力の問題

キム (1995) によれば、ロサンゼルス在住のコリアン女性について次のように説明している。女性の場合、夫よりも英会話ができるようになり、アメリカ文化にも適応し、収入面においても家計に貢献するようになる。すると、夫としては、社会的な立場の下降によって、妻に対する劣等意識を持つようになるケースが多い。そうすると、暴力が生じやすくなるという。

ロサンゼルスに韓人家庭相談所というのがあり、1995 年上半期の統計では 100 人に達し、前年の 1.5 倍であった。コリアン弁護士への暴力に関する相談件数も年々増加している。被害を受けた女性たちは、外国人女性対称のシェルターへ助けを求めて逃げ込むが、言語の問題、提供される食事の問題に加えて、米国政府の補助金によって運営されており、40 日を超えて滞在することができない。年々、増え続ける暴力の被害を受けたコリアン女性を救済するために、コリアンのキリスト教会によって、1993 年 7 月に一時保護所が設立された。そこでは、被害を受けたコリアン女性と子どもたちを保護している。個人相談のほか、子どもや父母のための教室なども設置し、暴力に基づく関係性を再考する場としての機能を持っている (キム 1995 : 3-4)。

第4節 移民家族における伝統的なジェンダー関係の変容に関する実証的研究

では、米国以外の国に住むコリアン女性たちはどのような状況だろうか。在中国の朝鮮族のジェンダーは興味深い変容がみられる。「結婚を通じて外の村に女性が出ていくという観念は強いとはいえ、結婚式を挙げる際には男女の家で折半する習慣がある。(中略) 女性は男性が忌避しがちな商業に従事するなど職業選択に性別が関わっているとはいえ、女性が外で働き家計を支えるという意識は一般的で、『男は外、女は内』という性別分業意識は強くない」(園田 2001 : 81)。さらに、そこでは、男系を重んじる直系的な家族構造が変容していることが明らかにされている。「祖先の祭祀はせいぜい祖父までで、親の

扶養、同居は長男のみに偏っていない。日常生活において母方、妻方と頻繁に行き来する関係がつくられている」(佐々木 2001 : 105)。

日本においては、在日韓国人・朝鮮人女性についての生活史の記録が積み重ねられている。結婚観について男女の語りから分析した研究では、民族文化の継承を女性が担い、そこに含まれる儒教思想も世代を超えて伝えていくため、さらなる抑圧を生んでいるという(大東 2002 : 619)。

中央アジアで生活しているコリアンは、言語、文化的にも現地に同化しているが、民族としてのアイデンティティは強固に維持しているという(Yoon 2000)。

他に、コリアン以外の家族同伴型の移住の場合、どのようにジェンダー関係の変容がみられるのか考察してみる。伝統的な家族形態における女性の役割が変容していることについて、次のような研究がある。

たとえば、米国における日本人既婚女性の研究については山田(2004)がある。山田の研究では、駐在員夫人が対象である。日本人妻たちは異なる文化に接触することで日本人女性としての価値観が変容し、より自己実現型の生き方をするようになったという。

伊佐(2000、2002)の研究でも、米国の日本人駐在員夫人が対象である。夫人たちが帰国後に日本社会に適応できるかどうかについて検討している。日本よりも、より女性に対して開かれた米国社会での生活経験がある妻たちは、帰国後、安定した夫婦関係を維持できなくなり、離婚に至るケースが多い。

また、キブリア(Kibria 1990)は、アメリカ在住のベトナム人女性の例をあげている。彼女たちがフェミニズム思想の影響を受けることによって、自分たちの置かれている状況を認識し、男性優位の関係性を批判的に見る勇気を得ることになる。母国で身につけた儒教思想が希薄化しているという(Kibria 1990 : 9-24)。

ラヤプロル(Rayaprol 1997)は、アメリカのピッツバーグ在住インド人ディアスポラによる一つの宗教組織に着目している。ある寺院に集うインド人女性たちが、寺院における様々な活動を通じて、伝統的な家父長制の考え方から解放され、主体的により対等な夫婦関係、男女関係をコミュニティ内部で作り出しているという。ラヤプロルはまた移民研究の多くは、女性を個人として捉えず、妻として捉え、女性自身が体験している出来事を、男性の体験に組み込む形で分析されてきたことを指摘している。

実際のところ、女性たちは移動した国において、従来の性別役割分業に疑問を抱くようになり、出身国の伝統的考えから解放される体験をしている。これは、家庭内やエスニック

ク・コミュニティにおける伝統的な男性優位の構造を少しずつでも掘り崩しつつあるといえよう。これらの女性たちの状況から、男性支配に耐えるだけではない自らの生きる方向を探していることが理解できよう。

他に、フィリピン人女性と日本人男性の国際結婚の場合であるが、男性の意識は大きく変わらないが、フィリピン人女性が社会参加することによって、自身の誇りを取り戻す過程に着目している研究がある。邱（2003）の研究は、日本の川崎市在住フィリピン人妻の社会参加を事例に、移住女性の主体性構築の可能性について考察したものである。フィリピン人女性たちは、仕事からの相対的剥奪感と周辺化される地位からの相対的剥奪感があるという。日本で望む仕事を十分にできないこと、アジア女性に対するステレオタイプや偏見のため、日本社会の周辺においこまれてしまうという。そのような状況において、フィリピン人女性たちは、日本人夫の容認のもと、地域の公的団体に参加し、日本人との関わりの中で、自己の存在を肯定し、社会的に低い立場に置かれた地位を高めていったという。夫の多くが、妻の役目としてフルタイムの仕事に就くことを好まないが、その代わり家庭生活への影響が比較的少ない社会参加に対しては寛容な態度を示す傾向にある。しかし、夫の態度が冷淡である場合、夫に精神的に依存するのではなく、社会参加という行為を通して、自立的精神を養うことにもつながっているという（邱 2003：81-96）。

しかし、佐竹（2006）の研究によれば、フィリピン人女性と結婚した男性は、フィリピンの異文化に触れることで男らしさという縛りから解放されて、男性解放を体験していることを示している。結果として、日本固有のジェンダー関係ではなく、フィリピン人妻との間に新たなジェンダー関係を作り出しているという。

文化人類学の視点から、カメルーンに移住したマファ族におけるジェンダー関係の変容について次のような研究がある。マファ族とは、ナイジェリアの国境に近いカメルーン北部にあるマンダラ山に住んでいる人々である。伝統的なマファ族の生活は、高地に住み、穀物、雑穀などを耕し、その土地は父親から息子へと先祖代々受け継がれてきた。男性の権威は土地の保有システムに関連していたが、農作業において、男女は平等な関係を作ってきた。

ところが、1900 年（ドイツ領の時代）にマファ族の社会がイスラム勢力のフルベ族の支配を受け、ナイジェリアへ奴隷として送りこまれることになり、部族固有の宗教からイスラム教に改宗させられ、伝統的な生活様式が大きく変容することになった。1960 年、フランス領からの独立後、イスラム教徒のアヒジョ大統領時代はさらにイスラム教徒への

改宗が続いたが、1982年、キリスト教徒のポール・ビヤ大統領の時代からは減少した。

この時代、イスラム教に改宗したマファ族女性のアイデンティティが大きく変容することになった。まず、宗教が変わることによって、女性たちはそれまで維持してきた伝統的な儀式、結婚システムを放棄するようになった。マファ族の伝統社会では基本的に均質的で相互依存的である。父親を家長とする家庭内では、父と娘の関係、母と息子の関係が配偶者との関係よりも重要視されていた。部族の宗教儀式の場合は、娘が重要な役割を担うことになっていたが、娘たちがイスラム教に改宗することにより、それは維持できなくなってしまった。また、現代では、夫が季節労働者として都市へ出稼ぎにいくと、家庭に残された妻が夫の権威を受け継ぐようになるなど、ジェンダー関係が多様に変容していることを示している(Van Santen José & Schaafsma Juliette 2000)。

これらの一連の研究から、本研究の課題を解明するために、次のような示唆を得ることができる。上記の先行研究でとりあげた、アフリカのマファ族の事例からもわかるように、物事を考える根本となる宗教や思想を改宗させられることによって、男女の役割が根底から変容せざるをえない条件が社会につくられることになる。さらに、居住する国が変わることによっても、その国におけるジェンダーの影響を受けると、男女の役割が変容することも示唆される。

第5節 本研究で採用する分析枠組

夫婦間のジェンダー関係の変容について、どのような分析概念を用いるか説明する。本研究では、ジェンダー関係の変容という場合、夫婦の性別役割分業の変化に着目している。

在米コリアンの夫婦に関する研究をみると、結婚による男女の関係を、家父長制という概念から説明している。家父長制に抵抗し、夫婦の関係が変容していく様相を、機能理論及び役割理論によって分析されてきた。

女性たちが家父長制に対抗していくのは、西欧文化の影響を受け、文化的な変容があらわれるからだという。そして、家庭内に不和が生じることとなる。これらの様相は、文化変容論によって、分析されている。

役割理論とは、社会学における構造機能論 (structural-functional theory) の一部である。構造機能論は、家族に関する研究に大きな影響を及ぼしてきた。産業社会の家族を構造機能の立場から分析したのがタルコット・パーソンズであった。

パーソンズの研究を発展させて、M・ゼルディッチ2世は、核家族の男女の役割を道具

的リーダーシップと表出的リーダーシップに区分した。男性は夫、父として、家庭と外の世界をつないで経済的責任を果たす道具的リーダーシップを担い、女性は妻、母として、家庭内を情緒的に統合する役割を担うという、性別役割分化から家族は成り立っているとした (T・パーソンズ、R・F・ベールズ 1981 : 412-172)。

役割理論には、役割に基づく振るまい (role behavior) と、役割に基づく期待 (role expectations)があり、一個人において、これらが相互にバランスを保った場合、婚姻関係を持続する上で問題が生じないが、そうでない場合は、ストレスとなり、婚姻上の問題が発生することとなる。

韓国の伝統的な家族関係は、夫婦間において、夫のほうにより立場を占有するアンバランスな関係である。役割理論にもとづいて、コリアン夫婦の関係の変容を分析するのは有効な手段の一つとなっている。

本研究においても、役割理論を援用してみたい。日本内外における一連の家族研究を踏まえて、家族社会学者の石川は、次のような家族内部の構造を分析する枠組みを提示している (石川 2007 : 80-86)。石川による分析枠組みを以下に要約する。

役割理論には、「地位セットと地位葛藤の概念」と「役割セットと役割葛藤の概念」がある。まず、「地位セットと地位葛藤の概念」について説明する。

日常生活において私たちは、通常たった一つの社会的地位を占めて生きているわけではない。男性、女性という地位のほかに、生まれ育った家族内 (定位家族) の中での長男や長女、また結婚すれば、生殖家族内の中での夫や妻という地位がある。また会社員、主婦、学生といった地位も付随する (p.80-81)。

これらの地位には役割もともなう。地位に付着した役割を果たすと、他の地位の役割をうまく果たすことができなくなることがある。例えば、女性が、妻、母、会社員、PTAの役員という地位セットをもつとすると、1人で何役もの役割を果たさなければならなくなる。どれもが中途半端で順調にこなすことができないとき、地位葛藤が生じることになる (p.82-83)。

では次に、「役割セットと役割葛藤の概念」について説明する。個人の持つ地位の中には、役割セットを持つ地位と役割セットを持たない地位があるという。例えば、「妻」という地位は「夫」という地位とだけに関わるため、これは役割セットをもたないと理解するという。

それとは反対に、石川は、大学教授を例に役割セットを持つ地位について説明している。しかし、ここでは、より人数が多く当てはまりやすい会社員を例にして説明する。

例えば、会社員という地位で考えると、上司、同僚、部下、会社外での営業など、あらゆる地位の人々と関わるのが義務づけられ、それぞれ異なった役割を果たすことになる。会社員という地位を持つかぎり、何かしらの役割を切り捨てることはできない。しかし、こなすべき役割が多すぎて空回りして順調に事が運ばないときに、「役割葛藤」が生じることになる (p.84-85)。

地位葛藤は、地位セットのなかに含まれる「地位と地位とのあいだに生まれる葛藤」である。しかし、役割葛藤は、役割セットのなかに含まれる「役割と役割のあいだに生まれる葛藤」である。この2種類の葛藤は、ある役割と別の役割との葛藤として表面化する点では、いずれも同じであるがゆえに、しばしば混同される。その原因に注目してみれば、全く違う種類の葛藤であることがわかる (p.85)。

会社員、妻、母という地位を占めたことによる葛藤は、1つないし2つの地位を自分の地位セットのなかから外すことによって、解消することができる。しかし、会社員という地位による上司との関係や会社外での営業の役割との間に生じた葛藤は、自分の役割セットのなかからいずれか1つだけの役割を取り除いて解消するというわけにはいかない。地位セットと違って、役割セットの内部は分割不可能であり、具体的作業の1つ1つを手抜きすることはできても、どれか1つの役割をまるごと取り除くことはできないからである。もしも、この葛藤を解消しようとするれば、地位そのものを捨てるほかなくなるのである。同じ地位を占めても、人によって役割遂行の仕方に差が出るのは、単に能力や性格上のことだけでなく、各人の地位セットの構成の仕方にもよるわけである (p.85-86)。

現代社会では、女性の社会進出の向上により、男性は仕事、女性は家事という性別役割分業自体が実質的に機能しにくくなっているが、それでもなお、家族の中のジェンダー役割が遂行されるところに、現実との矛盾が生じているのである。

韓国の家族関係をみると、その役割関係において、男性優位のヒエラルキーがみられる。男系の先祖、高齢者、父親への尊敬の念を示すことが重要視され、家庭内で男性は最優先される。

米国在住のコリアン夫婦についても、役割理論は援用されてきた。本研究においても、

この役割理論を用いる。これは家族内の地位や役割についての葛藤、生じている諸問題を検証するのに有効性を発揮する1つの方法であると考ええる。

第6節 本研究における仮説

では、もう一度、本研究におけるジェンダーの位置づけについて振り返ってみたい。ジェンダーとは、「元来個人の中ではなく、社会の側にあるもので、外側から個人に影響を与えて女性的ないしは男性的に（ジェンダー化）していくのである。個人の中から自然発生的にジェンダーが生まれてくるのではない」（土肥 2004：14）。

つまり、社会が求める女性らしさ、男性らしさを、人々が「個人の特性を超えたところでジェンダーを演じているのである」（前掲14）。

土肥（2004）の研究によれば、このようなジェンダーを演じる行動を、ジェンダー・ステレオタイプという。そして、ジェンダー化が助長される単位として、婚姻関係にあるものやカップル単位に着目している。

『単位』の中では個人間でどんなに経済力が偏っていようが、どんなに権力が偏っていようが、問題にならない。夫婦生活を営む本人たちでさえ、夫婦間暴力や離婚、死別などの問題にでくわさない限り、何が問題なのか、気づかないのが現状である」（p.61）。

このジェンダー・ステレオタイプが最も顕著にあらわれているのが、親密な関係を結んでいる男女関係にみられるというのである。それは、

「大勢の男女より、ひとりずつしかない男女での役割分担の方が、相手の性に対する期待が高まることが考えられる。女性が大勢いれば、女性に期待された行動をとらない女性何人が混じっていても許されるかもしれないが、女性が1人だけだと、すべての女性的役割を期待されてしまう。しかも、カップルの男女本人たちが、社会通念としてのジェンダー・ステレオタイプに従っているのを自覚するのは、意外に難しい」（p.62-63）と示している。

もちろん、個人によって意識の差があるため、必ずしもどのカップルにも、男らしさ、女らしさの規範に合う行為、行動がみられるわけではない。しかし、より親密な関係があり、家という密室においては、男女の役割が固定化され、期待されると同時に、自分の意志だけで決めることができない状況がある。

そこで、本研究の仮説であるが、上記の先行研究から示唆を得ることによって、次のよ

うに考える。

社会、文化の異なる国において、コリアンの男性と女性がどのようなジェンダー関係を築くようになるのだろうか。ジェンダーに基づく役割は、個人の個性にあわせたものではないため、社会生活を営む上で、また家庭内において自己実現を阻むものとなる。コリアンの場合は、儒教規範がそれにあたる。コリアン男性も女性も、韓国社会から別の国へ居住先を移し、フィリピンという異文化に接触することになる。それは、家父長的な儒教規範が自己の思考パターンに取り入れていたことに気がつく一つの契機となる。

ジェンダーによって決定づけられている自身の地位と役割を再考し、自身の気持ちとは表裏一体にある矛盾にも気がつくことになる。自国を離れ、国境を超えるという体験を伴うディアスポラは、ジェンダーを演じなくてもよい生き方を選び取ることが可能になっているのではないか。価値観の転換は、男女がより対等な関係性を作ることへとつながり、韓国にはなかった新たなジェンダー関係を創出しているのではないか、ということである。

フィリピンにおけるコリアンの場合はメイドがいることから、アメリカ在住者とはかなり違う。夫のほうも、韓国にいた時のような性役割の要求が低下する。工場経営、会社経営、国際機関に勤めているコリアン男性の場合は、社会的地位が低下することはない。韓国での職業とほぼ同業種を継続している。

また、先行研究では、途上国から先進工業国へ移動した女性たちの生活実態を対象にジェンダー関係を分析しているものが主流となっており、先進工業国から、もしくはNIES諸国などの中進国から途上国へ移動した女性たち、また男性たちの状況について、実証研究は少ない。

このような仮説のもと、経済のグローバル化におけるジェンダー関係の変容について検証を試みる。

第3章 男性が主体の移動形態——韓国からフィリピンへの出国者数

フィリピンへのコリアンの出国者数について、韓国法務部出入国管理局の『出入国管理統計年報』でみると、ジェンダー化された現象がみられる。そこには、ビジネスを目的とする男性主体の移動形態があらわれている。以下に、年度別、職業別、目的別、年齢別、在留資格別に男女の出国者数を考察する。

第1節 男女別にみる出国者数

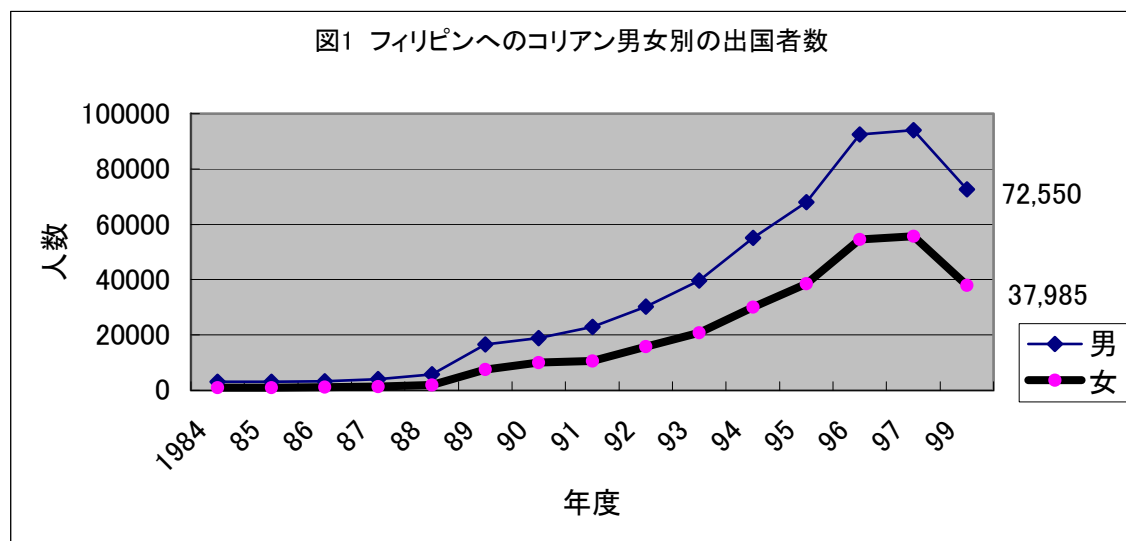
1. 年度別

コリアンのフィリピンへの出国者数は、1985年の時点では、わずか4,036人（男性3,113人〔77.1%〕、女性923人〔22.9%〕）に過ぎなかった。

1995年には、106,519人（男性67,962〔63.8%〕、女性38,557〔36.2%〕）となり、アジア通貨危機が生じた1997年には149,722人（男性94,005人〔62.8%〕、女性55,717人〔37.2%〕）と急増した。

この時期、アジア通貨危機の煽りを受けて、韓国では倒産する企業が相次いでいた。中途解雇され、行き場を失った多くのコリアンが、退職金を手に再スタートをかけて、フィリピンへ移動する人々が増えた時期であった。

その後、1999年には、110,535人（男性72,550人〔65.6%〕、女性37,985人〔34.4%〕）と若干、減少した。どの年代においても、男性のほうが圧倒的多数を占めており、図1（45頁に掲載）をみてもわかるように、男性と女性の出国者数は常に連動している。



出所： 韓国法務部出入国管理局『出入国管理統計年報』1988年 76-79、1989年 88-91 頁、1990年 88-89 頁、1991年 42-43 頁、1992年 72-73 頁、1993年 72-73 頁、1994年 78-79 頁、1995年 80-81 頁、1996年 78-79 頁、1997年 78-79 頁、1998年 80-81 頁、2000年 71-72 頁より作成。

2. 職業別

職業別にコリアン男性の出国者を多い順にみると、1985年は、貿易業 562 人 (18%)、鉱・工業 398 人 (13%)、商業、建設・建築がそれぞれ 279 人 (9%)、金融業 149 人 (5%) と続いている。ビジネス関連が 50%以上を占めている。

1997 年および 1999 年の統計では、それぞれ会社員が 50%以上 (1997 年は 48,470 人、1999 年は 38,848 人) を占めており、フィリピンへ出国するコリアン男性の職業は、ビジネス関連の人々が大半を占めていることがわかる。

また、もう一つの特徴としては、学生が 1985 年に 345 人 (11%) というのは、ビジネス関連に次いで多いことである。1997 年に至っては、会社員に次いで多い。語学研修生や留学を目的とする者もかなりの人数にのぼっている。

女性の特徴は、どの年代においても、無職の者が圧倒的多数を占めていることである。無職というカテゴリーには主婦業も含まれており、ビジネスマンの男性家族の一員として、フィリピンへ出国していることがわかる。

1985 年の時点では、ビジネス関連の職業に就いている人は数パーセントしかおらず、無職 544 人 (59%) に次いで、学生が 150 人 (16%) と高い数値がみられる。

1997 年および 1999 年の特徴としては、無職のカテゴリーに次いで多いのが会社員（1997 年は 10,540 人 [19%]、1999 年は 7,740 人 [20%]）である。女性の場合、職業別でみるフィリピンへの出国者は、専業主婦が多くみられるが、仕事を持つ女性も増えていることがわかる。

3. 目的別

それでは、出国目的別にみるとどうであろうか。男性の場合は、1985 年に商用 1,108 人（36%）、就業 574 人（18%）、留学 258 人（8%）が上位を占めている。

それが、1997 年になると、大きな変化がみられるようになる。観光・視察が 42,834 人（47%）、商用 30,524 人（33%）というように、ビジネス目的の人を上回るようになり、短期滞在者の入国が顕著に見られるようになったことである。

これは、1999 年の統計でも同様の傾向がみられ、観光・視察 28,349 人（39%）、商用 27,131 人（37%）である。また、宗教・福祉関係者の入国も一定の割合が続いている。

女性の場合はどうであろうか。1985 年の時点では、男性と明らかに違う目的で出国していることがわかる。それは、同居 242 人（26%）、訪問 191 人（21%）というように、仕事のためにフィリピンへ行くのではない。ビジネスマン男性の家族の一員として、出国している者が多数いることがわかる。

また、女性の場合は、移民という目的においても、男性よりも多く、明らかに別の目的がみられる。移民の場合、1984 年（男性 6 人、女性 28 人）、1985 年（男性 6 人、女性 37 人）、1986 年（男性 18 人、女性 36 人）、1987 年（男性 13 人、女性 56 人）、1988 年（男性 9 人、女性 23 人）、1989 年（男性 7 人、女性 13 人）というように、男女差が歴然としている。

1997 年および 1999 年になると、女性の場合は、男性と同様に観光・視察は半数を超えた（1997 年 38,405 人 [69%]、1999 年 23,834 人 [63%]）。次いで、訪問、商用、宗教・福祉、同居、留学と続いている。

男女数を合計してみると、さらに特徴が浮かび上がる。それは、1997 年では、観光・視察 81,239 人（54.3%）、商用 33,138 人（22.1%）、訪問 15,117 人（10%）である。

1999 年では、観光・視察 52,183 人（47.2%）、宗教・福祉 3,117 人（2.8%）、研修 2,238 人（2%）、留学 1,634 人（1.5%）である。

ここからわかることは、男性の場合はビジネスを目的として、女性の場合は家族同伴

型ということである。1990 年代後半の特徴として、宣教活動を目的とする男女数が急増し、単身者としては留学生が多いことがわかる。

4. 年齢別

全般的にどの年齢層も増加傾向にあるが、特に 20 代から 45 歳の年齢層が多い。また、未就学および就学年齢層の子どもたちを同伴して出国していることがわかる。

男女別にみると、1985 年時点で、男性は 26 歳以降 50 代までの年齢層が目立っている。女性の場合は、20 代前半から 30 代が多い。

1997 年では、男女とも 20 代後半から 30 代後半がピークである。1999 年では、男性は 30 代後半、女性は 20 代後半がピークになり、あとは下降線を描いている。

男女の全体数でみると、1985 年は、働き盛りの 30 代以降が多い。36～40 歳 706 人 (17.5%)、31～35 歳 644 人 (16%)、26～30 歳 632 人 (15.7%) であった。

1997 年になると、20 代の年齢層も増えている。26～30 歳 24,091 人 (16.1%)、36～40 歳 22,887 人 (15.3%)、41～45 歳 19,913 人 (13.3%) であった。

1999 年は、26～30 歳 19,715 人 (17.8%)、36～40 歳 16,526 人 (15%)、31～35 歳 15,457 人 (14%) であった。

5. 在留資格別

フィリピン入国後、長期滞在化している人数は次のようである。駐フィリピン大韓民国大使館に登録した人数で把握すると、1992 年は 5,038 人、1995 年は 9,708 人、1997 年は 8,000 人、1999 年は 10,137 人、2001 年 1 月現在では 24,618 人である（外交通商部在外国民移住課 2001 : 91）。

さらに、2005 年には 46,000 人に増加し、2007 年では 86,800 人に至った（Overseas Koreans Foundation（在外同胞財団）<http://www.korean.net/morgu/status> 2007 年 11 月 28 日検索）。

表 1（49 頁に掲載）で、フィリピンにおけるコリアンの在留資格を把握する。2001 年 1 月 1 日現在、男性 12,388 人、女性 12,230 人で、男女差は 158 人である。

職業別に駐在員、自営業、会社員の男女をそれぞれ合計してみると、男性は 6,177 人 (50%)、女性は 3,677 人 (30%) となり、男女差が大きい。さらに、女性の場合は専業主婦が 21.2%を占める。

この表で、カテゴリー別に多い順にみると自営業が 7,365 人、学生が 7,128 人、主婦が 2,589 人、会社員が 1,274 人、駐在員が 1,215 人となり、主婦層の厚さが際立っている。学齢期に達している子どもたちを同伴していることから、必然的に学生層は多い。サービス業に従事している人が多いのは、企業の進出に伴い、ビジネスマンら家族を顧客とする商売が増加しているといえよう。

アメリカ、カリフォルニア州のコリアン社会をみると、英語能力にハンディがありアメリカでの就業機会に乏しいと、コリアンが経営する小規模な会社に就職し生計をたてる場合がほとんどであるという。フィリピンにおけるコリアンも同様に、コリアン対象に韓国語で商売ができる自営業者の流入が進んだといえる。

また、大学生の人数が多いのも、フィリピンは韓国と飛行機でも 4 時間と近距離で英語圏でもあるため、他国と比べて学費をあまりかけずに英語を習得でき、学位取得もできるというメリットがあるからである。

以上をまとめると、(1) 年々、定住化傾向にあること、(2) 働きざかりの 20 代から 40 代が集中していること、(3) 短期滞在を含む入国者数においては、商用および観光目的の人が大半を占めており、長期滞在者においては、自営業者、学生、主婦、駐在員らが大半を占めていること、(4) 長期滞在者においては、男女差がほとんどないこと、という 4 点を整理できる。

また、1980 年代以降、男性はビジネス型、女性は家族同伴型というタイプがみられる。この人々が求心力となって親族や知人、友人を呼び寄せている一方で、1990 年代後半からは、観光を目的とする短期滞在型も増えているのである。

表 1 フィリピンにおける在留資格別コリアンの
人数（2001 年 1 月 1 日現在）

管轄公館名 駐フィリピン韓国大使館	総計		
男女別	男	女	合計
同胞総数	12,388	12,230	24,618
登録者数	1,620	1,219	2,839
* 居住資格別			
市民権	22	45	67
永住権	95	96	191
滞留者	9,735	9,578	19,313
その他	2,536	2,511	5,047
* 職業別			
● 駐在員			
民間商社	912	170	1,082
政府・公企業	98	35	133
● 自営業			
商業	685	563	1,248
サービス	3,300	2,380	5,680
製造業	325	112	437
● 会社員			
事務職	101	183	284
生産職	263	46	309
農・水産・林業	338	102	440
専門職	155	86	241
● 学生			
大学生以上	2,174	1,890	4,064
高校生以下	1,501	1,563	3,064
主婦	0	2,589	2,589
その他	2,536	2,511	5,047
合計	12,388	12,230	24,618

出所： 外交通商部在外国民移住課『在外同胞現況』2001 年 7 月、91 ページ。

第2節 コリアンの居住地域および自営業の種類と宗教施設

1. コリアンの居住地域

コリアンによって運営されている最大規模の社会組織はフィリピン韓人会である。この韓人会が毎年、会員の住所録を発行している。

フィリピン韓人会編『2001 韓人会住所録』によって、マニラ首都圏、マニラ首都圏近郊、ルソン地方、ビサヤ地方、ミンダナオ地方といった5地域に分類して、コリアンの居住地域についてまとめた。

表2（51・52頁に掲載）によれば、マニラ首都圏が858人と最も多く、次にマニラ首都圏近郊が216人、ルソン地方が155人、ビサヤ地方が39人、ミンダナオ地方には57人が生活している。合計1,325人である。

この韓人会の住所録には家族の代表者の名前が記されている。韓人会の事務局長によれば、独身者も登録しているが、各世帯4人家族と計算すると、約4,000人が韓人会の会員として登録していることになるという。

ビジネスの中心地マカティ市が257人と最も多く、次いでケソン市202人、バギオ市143人、カビテ80人、パラニャケ64人、リサール39人、アンヘレス市32人と居住者が集中している。

表2 コリアンの居住地域

居住地域	年度、人数
マニラ首都圏	2001 年
ケソン市	202
マカティ市	257
マニラ市	14
パシッグ市	121
パサイ市	48
マンダルーヨン市	23
マリキナ市	1
パラニャケ	64
サンファン	24
トンド	5
タギッグ	10
サンタ メサ	8
エルミタ	16
マラテ	23
ビノンド	1
イントラムロス	6
ムンティンルパ	16
ラスピニャス	13
カロオカン	5
マラボン	1
合計	858

居住地域	年度、人数
マニラ首都圏近郊	2001 年
アンティポロ	9
リサール	39
ブラカン	1
カビテ	80
ラグナ	15
バタンガス	6
アンヘレス市	32
マブラカット、パンパンガ	2
マサント、パンパンガ	1
クラークフィールド	1
オロンガポ	7
スービック	1
サンバレス	1
バタアン	16
パンガシナン	1
テュゲカラオ	4
合計	216

居住地域	年度、人数
ルソン地域	2001 年
ダグバン	2
パンガシナン	1
タルラック	3
ラウニオン	1
バギオ	143
ナガ	3
レガスピ	2
合計	155

居住地域	年度、人数
ビサヤ地域	2001 年
セブ	16
バコロド	2
デュマゲツティ	8
ボホール	1
レイテ	3
サマール	2
イロイロ	4
パラワン	3
合計	39

居住地域	年度、人数
ミンダナオ地域	2001 年
ダバオ	25
カガヤン・デ・オロ	3
コタバト	2
オサミス	1
サンボアンガ	3
住所不明	23
合計	57

各地域の合計	2001 年度
マニラ首都圏	858
マニラ首都圏近郊	216
ルソン	155
ビサヤ	39
ミンダナオ	57
合計	1,325

出所：在フィリピン韓人会編『2001 韓人住所録』2001 年、115-201 頁より作成。

2. 自営業の種類と宗教施設

また、自営業の種類と宗教施設について、『2001 韓人会住所録』によってまとめてみた。宗教関連の特徴としては、フィリピン人の現地住民を宣教対象とするプロテスタント系の宣教会と、コリアンを対象とするプロテスタント教会とがある。

では、地域ごとの内訳を次にみてみよう。マニラ首都圏には、ケソン市、マカティ市、パラニャケに集中しており、食堂が 42 件、キリスト教の宣教会が 29 件、プロテスタント教会が 28 件、カラオケが 18 件となっている。

マニラ首都圏近郊においては、リサール、カビテ、アンヘレス市に集中しており、その内訳は、宣教会が 17 件、教会が 10 件、食堂が 5 件となっている。

ルソン地方においては、バギオ市に集中しており、食堂 5 件、教会 4 件、宣教会、食品店、コンピューター・インターネット店が 3 件となっている。

ビサヤ地方においては、セブとリゾート地のボラカイ島に集中しており、食堂 4 件、教会 3 件、宣教会 2 件となっている。

ミンダナオ地方においては、ダバオ市に集中しており、食堂 3 件、宣教会 2 件、食品店、カラオケ店が各 1 件ずつとなっている。

上記のことから分かることは、人口集中度の高い地域には、必ず韓国料理の食堂があり、教会、宣教会、食品店、ホテル、娯楽施設が集まっていることである。

また、コリアン宣教師によって構成されている駐比韓国宣教団体協議会によれば、1999 年の時点で会員数は 371 人であった。韓国の 47 に上る宣教団体から派遣されている。会員の家族数は 561 人おり、宣教団体関係者の総数 932 人がケソン市、リサール、アンヘレス市などに集住している（チョン 1999 : XXI-XXII）。活動としては、フィリピン人対象の教会や神学校の設立、医療活動等をおこなっている。コリアン宣教師の話によれば、その人数はアメリカ人宣教師（約 100 世帯）をはるかに上回っているとのことであった。宣教師の急増もまた、韓国の自営業者をフィリピンへと流入させた要因といえる。

以上のことから、フィリピンへ向けて出国したコリアンたちは、その旅立ちの時点で既にジェンダー化された出発なのである。

第4章 コリアン男性ビジネスマンの状況とフィリピン人労働者に対する意識の変容

第1節 ジェンダー化されたグローバリゼーション

前章までみたように、フィリピンにおけるコリアンは、性差によって職種も入国目的も違いがある。男性の場合はビジネス関連、女性の場合は専業主婦層が多く、コリアンのフィリピン入国自体がジェンダー化されたものであることがわかるだろう。

では、ビジネスの主体者であるコリアン男性の仕事そのものにおいて、韓国企業を事例としながら、フィリピンにおけるジェンダー化されたグローバリゼーションを考察する。

そもそも韓国企業が海外へ進出するに至った要因として、まず、韓国国内の労働力不足と賃金上昇があげられる。また、韓国経済が米・日・韓の国際分業関係に組み込まれた三角構造の中で成長してきたという側面があるが、その構図が変化してきたことも大きな要因の一つである。韓国は日本から資本財と原材料を輸入し、国内で組立・加工した後、米国へ輸出していた。ところが、1989年に韓国は米国との貿易摩擦によって、労働集約型製品をアメリカへ輸出するための一般特惠関税が除外され、米国への輸出が急速に減少した。そのため、韓国企業は韓国よりも低賃金で、かつアメリカへの輸出割り当て量の多い東南アジア諸国へ生産拠点を移すようになった。韓国企業は労働集約型製品の生産方法の国際化に伴い、米・日・韓の三角関係の構図から抜け出し、独自の経営手段をとるようにならなくなっていったのである。それが、アジア諸国への海外企業進出である。

アジア諸国の共通点は、経済発展の戦略として輸出加工区を設立し、外国企業の進出を促進させたことである。輸出加工区の工場は労働集約型の単純労働であり、多くの非熟練労働者を必要とした。そこには高卒、独身の若年女性労働者が大量に雇用されたのである。輸出加工区はインフラストラクチャーが整備され、税の免除、輸出入の規制免除、労働組合活動の禁止、低コスト、低賃金で豊富な労働力を得られるという、外国企業にとって有利な条件がそろっている。

輸出加工区で労働組合活動ができないことは何を意味するのか。それは、労働者が外国人の上司に従順であることが求められる。経営者にとって、女性労働者は指示したとおりに仕事をするため、管理しやすく扱いやすい。女性は手先が器用で、素直に従順、長時間の単純作業にも耐えられるというジェンダー化された役割が担わされている。

外国人男性経営者を頂点に、マネージャー職の現地男性、女性労働者、技術職の男性労働者、生産現場における単純作業の大半を女性労働者が担うというように、性別によって

階層化が作られている。給料においても女性の賃金水準が男性よりも低く抑えられている。外国企業は売上額を伸ばし、本社の発展、さらに本国の経済成長へとつなげる。しかし、現地で雇用されている生産現場の多くの女性労働者たちは、企業の経営状況によっては短期間で解雇されることもあれば、昇進も約束されていない。進出先の国の政情が不安定になれば、いとも簡単に外国企業は撤退してしまう。非熟練女性労働者、また男性労働者にとって、輸出加工区で働くことは将来にわたって安定した見通しのつく職場ではないのである。資本のグローバル化は、進出企業内においてジェンダーに基づく性別役割分業をもたらし、給与体系においても明らかな階層化が作られているのである。

では以下に、コリアンの男性ビジネスマンのおかれた状況について具体的にみていこう。ここで使用するデータは、1993年8月から10月、および1996年11月から1997年4月にかけておこなったフィールド・ワークに基づいている。

1996年～1997年の調査で対象とした企業は、1995年度における売上金額の多い企業を選択した。その際、基準としたものは、フィリピン企業、外国企業の区別なく売上額に基づいて7000社が順位づけされている統計資料を使用した。これは、フィリピン・ビジネス・プロフィール&パースペクティブ社とアジア太平洋大学が編集した (Philippine Business Profiles & Perspectives, Inc., The University of Asia and the Pacific)、*The Top 7000 Corporations 1996-1997* (『上位7000社 1996～1997年』) を参考にした。フィリピン国内の各産業の主要企業は、この7000社でほぼ網羅できるとされる。

この資料によると、1995年現在、7000社のうち韓国企業は83社を抽出することができた⁽¹⁾。この他、1976年以降1995年までに進出した、商社10社、銀行1行、保険会社1社、海運会社1社の計13社も調査対象とし、合計96社の企業概要を把握することにつとめた⁽²⁾。96社中、88社は直接訪ねて、経営者にインタビューをおこなうことができた。

また、フィリピン人労働者に対する調査は、1993年9月～10月にかけて、フィリピン人マネージャー、事務職員、生産労働者を合わせて123人（男性45人、女性78人）に対しておこなった⁽³⁾。フィリピン人労働者には匿名で個人プロフィールとコリアン経営者に対する考えを筆記してもらった。インタビューで筆者が使用した言語は韓国語とフィリピン語である。本章では、これらの調査の一部を使用する。

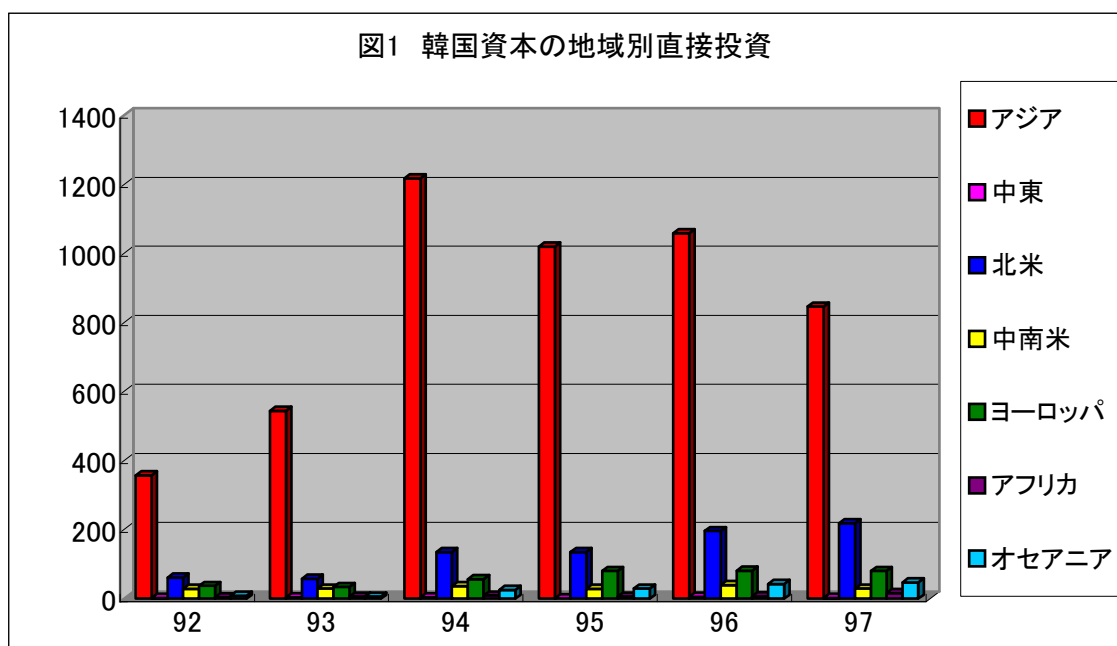
次節から、まず世界各地に進出した韓国企業の全体的な概況にふれる。次いで、96社を事例に韓国企業の経営について述べる。その上で、コリアン男性経営者とフィリピン人労働者相互の意識について考察する。

第2節 世界各地へ進出する韓国企業

韓国企業は世界各地へ進出しており、1968年から1996年までの進出企業総数は7292社で投資金額は160億ドルに上った。そのうち、対アジア進出が顕著にみられ、企業数5025社(68.9%)、投資金額では64億9000ドル(40.4%)であった(図1)。

フィリピンへの韓国企業の進出は1990年代以降、急激に伸び始めた。特に、1995年の時点では、世界120カ国における韓国進出企業数1291社のうち、1位中国729社(56.5%)、2位アメリカ126社(9.8%)に続き、3位にフィリピン70社(5.4%)が位置するようになった。

投資額でみた場合は、1位中国8億1800万ドル(26.7%)、2位アメリカ5億3400万ドル(17.4%)、3位インドネシア2億(6.5%)、4位フィリピン5700万ドル(1.9%)であった(韓国銀行外換為替管理部 1997: 28-43)。このように、韓国企業のフィリピンへの進出は、アジアの中でも上位に位置づけられる。



出所： 韓国銀行外換為替管理部『海外投資統計年報』1997年、28-43頁より作成。

第3節 フィリピンにおける韓国企業の進出

1. 投資推移

東南アジアの中でもフィリピンは、1970年代までアジアで最も成長の期待される国の一つに数えられていた。しかし、政情不安により、1980年代初頭以降、ASEAN諸国（東南アジア諸国連合）でも、例外と言われるほど経済が低迷した。ところが、1992年のフィデル・V・ラモス大統領の就任を機に、2000年までにNIES（新興工業国）入りを果たすべく「フィリピン2000年計画」が打ち出され、フィリピン経済は大きく躍動し始めた。特に、外資規制緩和などの自由化政策の進展や電力供給の改善により工業生産が拡大し、外国企業が顕著に増え始めたのであった。

表1（58頁に掲載）のフィリピン投資委員会（BOI）の直接投資認可額に見られるように、日本、米国といった先進工業国からの進出と並んで、1991年以降、韓国からの直接投資も急増するようになった。

1995年には全般的に減少するが、その一方で表2（59頁に掲載）にみるようにフィリピン経済区庁（PEZA）という輸出加工区への直接投資が急激に伸びている。特に韓国からの直接投資は前年比で約9.6倍も増加し、39億1,700万ペソで日本に次ぐ勢いである。大きな変化としては、1997年のアジア通貨危機の影響を受けて、BOI、PEZAともに一時投資が減少し、その後、輸出加工区よりもマニラ首都圏一般地域（BOI登録企業）への進出がみられるようになったことである。

表1 フィリピン投資委員会(BOI)による主要国別の直接投資認可額

(単位: 100 万ペソ)

国名	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000
米国	1,446	2,281	1,570	2,390	17,969	16,147	867,528	10,412,259	6,009,421	13,843,694	2,413,940
ドイツ	114	261	74	448	497	22	67,878	20,363	587,744	1,356,772	340,841
イギリス	478	7,809	741	64	978	3,213	3,719,259	9,215,203	2,778,568	181,199	3,442
オランダ	193	489	293	2,159	1,245	144	127,602	2,369,328	236,209	0	584,744
日本	7,437	5,773	1,847	3,043	2,798	2,603	1,515,705	3,700,507	2,784,789	1,982,484	1,818,545
韓国	516	1,223	1,084	1,109	395	57	290,067	66,129	101,339	31,599	58,202
台湾	3,419	330	232	145	7,076	349	194,673	387,380	221,387	193,856	42,815
香港	5,064	228	323	221	7,607	983	7,328,444	184,586	6,541,897	8,025	759,610
シンガポール	334	83	118	1,058	1,588	96	758,954	341,253	331,164	580,375	20,796
マレーシア	128	15	0	205	4,875	158	181,151	2,244,721	23,760	6,134	0
タイ	—	20	29	0	1,478	9,710	167,070	372,722	701,580	0	0
インドネシア	92	31			4		1,469,962	0	1,950	0	0

出所: Board of Investments, *Amount of Equity Investments Approved under Various Investment Incentives Laws by Country (1968-2000)*

表2 フィリピン経済区庁 (PEZA)による主要国別の直接投資認可額 (単位: 100 万ペソ)

国名	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000
米国	58	1,201	3,892	2,172	15,046	10,054	2,869	6,056
ドイツ	N.A.	N.A.	18	0	1,409	653	6	5,283
イギリス	N.A.	N.A.	41	1,047	8	583	13,353	5,717
日本	1,302	5,187	31,016	12,548	32,975	25,831	8,012	14,643
韓国	473	409	3,917	2,671	1,991	93	439	595
台湾	93	308	568	1,192	408	176	380	68
香港	N.A.	N.A.	36	55	0	0	0	0
シンガポール	N.A.	N.A.	378	520	6,360	8,849	1,706	3,012
マレーシア	N.A.	N.A.	4	1,966	10,559	28	38	115
タイ	N.A.	N.A.	0	0	2,110	0	0	17
インドネシア	N.A.	N.A.	41,250	0.5	0	4	0	0

出所: Philippine Economic Zone Authority, *Investments by Country New Reg'd. & Expansions/Add'l. Investment*

表3 (60 頁に掲載) の在フィリピン韓国商工会議所に登録している韓国企業をみてもわかるように、総数 266 社のうち半数がマニラ首都圏に集中している。フィリピンは韓国企業にとって引き続き重要な投資先として位置づけられていることがわかる。

韓国商工会議所に登録している韓国企業は、マニラ首都圏 131 社、カビテ輸出加工区 67 社、バタアン 17 社、リサール、カビテが 10 社ずつと続く。これらの地域には、ビジネスマンが集住しており、衣食住、宗教面から娯楽に至るまで諸施設が築かれている。

表 3 在フィリピン韓国商工会議所に

登録している韓国企業(2000 年 7 月現在)

(支店、貿易会社、駐在員事務所、製造業)

地域	企業数
マニラ首都圏	131
リサール	10
バタアン	17
カビテ輸出加工区	67
カビテ	10
ラグナ国際工業団地	7
ラグナ・テクノパーク	3
ラグナ	3
バタンガス	2
セブ	1
サンバレス	3
パンパンガ	5
バギオ	2
その他	5
合計	266

出所: Korean Chamber of Commerce Philippines, Inc.

*Korean Companies in the Philippines (Overseas branches,
Trading companies, Representatives office, Manufacturing
companies Updated as of July 2000)*

企業進出の増加に伴い、韓国・フィリピン間の貿易は、1986 年のコラソン .C. アキノ政権樹立を契機に、翌 1987 年から両国間の貿易量はほぼ継続して増加し続けている。

1992 年のフィデル V. ラモス政権成立後、その傾向はさらに顕著となっており、1994

年には対フィリピン輸出額は初めて 10 億ドルを超えるに至っている（表 4）。

1998 年には、3,640 億ドルに達し、アセアン諸国において 4 番目に貿易量の多い国になった。1997 年のアジア通貨危機の影響にも関わらず、韓国とフィリピン間の貿易額は 9.8%上昇した。韓国からフィリピンへの輸出品目のうち 54%が電器部品であった。1999 年 1 月から 8 月までは、2,650 億ドルで、前年の同時期よりも 13.3%上昇した（Korean Information Service, Seoul Korea 1999 : 1）。

表 4 韓国の対フィリピン輸出入の推移

（単位：1,000 ドル）

年度	対フィリピン輸出(増加率)	対フィリピン輸入(増加率)	貿易収支
1980	151,532	271,517	-119,985
1981	130,547 (-13.9)	265,594 (-2.2)	-135,047
1982	174,851 (33.9)	173,993 (-34.5)	858
1983	180,099 (3.0)	178,237 (2.4)	1,862
1984	165,371 (-8.2)	113,825 (-36.1)	51,546
1985	240,359 (45.3)	150,555 (32.3)	89,804
1986	186,137 (-22.6)	121,877 (-19.1)	64,260
1987	220,176 (18.3)	123,688 (1.5)	96,468
1988	338,001 (53.5)	180,783 (46.2)	157,218
1989	476,080 (40.9)	204,809 (13.3)	271,271
1990	500,238 (5.1)	269,785 (31.7)	230,453
1991	674,808 (34.9)	322,662 (19.6)	352,146
1992	745,871 (10.5)	264,929 (-17.9)	480,942
1993	934,891 (25.3)	317,509 (19.8)	617,382
1994	1,212,373 (29.7)	411,831 (29.7)	800,542
1995	1,493,058 (23.2)	610,791 (48.3)	882,267
1996.1-5	765,771 (28.4)	265,389 (2.3)	500,382

出所： 在フィリピン大韓振興貿易協会編『フィリピン』1996 年、47 頁。

2. ジェンダー化された韓国企業の雇用関係

1993 年の筆者の調査によると、家電をあつかう企業では男性労働者も多いが、セーター、スニーカー、女性服など衣類関連の場合は未婚の女性労働者が圧倒的多数を占めている。また、男女によって賃金の差が歴然とある（表 5、63 頁に掲載）。

韓国にいた時と同様に、フィリピンでもコリアンの男性経営者は女性労働者を指導し、監督している。しかしながら、筆者の 1996 年～1997 年調査によれば、コリアン男性経営者たちは、本国にいた時と同じ管理方法では円滑な生産サイクルになりえないことを気がついていた。

だが、進出当初は権威的な態度でフィリピン人労働者に接するため、諸々の摩擦がたえなかったとのことであった。日々のノルマを達成し、世界各国へ製品を輸出することによって年間売上額を伸ばしていくには、従来の経営方式ではなく、フィリピン人を理解する経営者へと意識の変容がせまられたのであった。詳細については、次節で事例をあげる。

労働集約型は女性向きの仕事とするジェンダー化された生産現場はそのまま維持しつつも、コリアン男性経営者のフィリピン人労働者に対する意識の転換がみられるようになったのである。そして、安定的に生産力を向上していったのである。

表5 韓国企業で働くフィリピン人労働者

会社名	進出年	業種	コリアン		フィリピン人		平均月給(ペソ)			
			人数		人数		生産労働者		幹部職	
			男	女	男	女	男	女	男	女
人数・職位										
性別										
Filkor Business Integrated, Inc.	1987		2	1	50	350		3,000	4,000	4,000
Easter Export Ventures Corporation.	1989	セーター	3	0	87	171		5,000	6,000	7,000
Philbs Export Industries., Inc.	1990	スニーカー	4	0	1,010	3,290		4,200	10,000	8,000
Chong Won Fashion., Inc.	1990	セーター、Tシャツ	6	0	176	496		2,825		20,000
Chunji International Phils., Inc.	1990	セーター	6	0	50	700		2,800	3,400	3,500
Philis-Jeon Garments, Inc.	1990	下着	3	0	30	420		2,096	4,000	4,000
Selma Apparel Corporation.	1990	セーター	6	0	150	550		4,000	5~6,000	
Maxson Packaging Components, Inc.	1991	家電部品	2	0	83	35		4,000	16,000	6,000
Young Shin Electronics.	1991	電子部品	4	0				4,000	7,000	7,000
Woo Chang Co., Inc.	1991	皮製財布	3	0	20	280		3,000	4,500	4,500
Dae Ryung Industry Inc.	1991	衛星放送受信機 車両速度探知機 カーステレオ	40	0	300	640		3,500	7,000	6,000
Dae Eun Electronics, Inc.	1992	電機機器	2	0	41	40		3,000	7,000	5,000
Challenge Socks Corp.	1993	靴下	6	0	70	180		3,000	4,000	4,000
Mountain View Ware, Inc.	1992	登山用リュック、靴	2	0	30	120		4,000	6,000	6,000
Union Plastic Corporation.	1992	ビニール	4	0	22	52		113	10,000	7,000
Dong Myong Motors Laguna, Inc.	1992	トラック	3	0	17	3		5,000	13,000	N.A.
Sang Woo of Philippines., Inc.	1992	女性服	8	0	50	950		5,000	N.A.	N.A.
Laguna International Industrial Park., Inc.	1991	不動産開発	1	0	6	4		6,000	4,000	7,000

出所：筆者の1993年の調査による。

第4節 韓国企業の経営

ここでは、1995 年度に年間売上額上位 7,000 社ランキングに入った韓国企業の現地法人 83 社、および商社、保険会社、銀行、海運会社 13 社も含めた計 96 社を事例とする。

96 社の経営状況を、(1)進出地域、(2)年間売上額からみる企業利益、(3) 原材料・部品の調達、(4) 製品の販売先という 4 つの項目から、韓国企業の実態について説明する。

1. 進出地域

製造業は輸出加工区に集中して進出している。フィリピン国営の輸出加工区は 4 ヲ所あり、現地法人 83 社の多くもこれらの地域を拠点にしている。

最も集中しているのはマニラ湾南西約 30 キロの地点にあるカビテ輸出加工区(面積 276 ヘクタール)で、組立金属が 15 社、繊維・衣服が 9 社など計 32 社の進出である。この地域に企業の集中が見られる理由は、大手家電メーカーの場合、部品協力企業を、セーターや靴下製造会社の場合、染色業者と集団で進出しているからである。このような進出の形態をコリアン経営者は「同伴進出」と呼んでいる。

全般にカビテ、ラグナ、リサール、バタアンといった州および地域への進出が集中していることがわかる。この地域は、フィリピン工業化の最重要事業であるカラバルソン地域総合開発計画を推進する上で、外国資本を積極的に呼び寄せている所である。この地域の輸出加工区に進出している韓国企業は、1995 年の時点で 40 社 (41.6%) が占めている。

2. 年間売上額からみる企業利益

1995 年度の韓国企業 83 社の総年間売上額は、242 億 8175 万 9000 ドルであった。1995 年度の 7000 社の総年間売上額は、2 兆 1713 億 143 万 2000 ドルで、韓国企業の売上額は全体の 1.1%であった。

業種別に売上額を見たところ、多い順に組立金属 22 社 (51.8%)、履物・皮革 6 社 (17.3%)、繊維・衣服 20 社 (7.6%)、一般貿易 2 社 (6.1%)、建設 10 社 (5.6%)、石油・化学 7 社 (4.4%)、その他製造 7 社 (2.8%)、その他サービス 2 社 (0.5%)、金融リース 1 社 (0.4%)、電話通信網設備 1 社 (0.3%)、食料・飲料 1 社 (0.09%) であった。

履物・皮革はわずか 6 社にもかかわらず、売上額としては 2 番目に多い。6 社のうち 5 社は靴製造業で米国のメーカー製品をほぼ 100%海外へ輸出している。1995 年度に 7000 社にランキングされた靴製造業の全体数は 23 社であった。このうち 1 位、2 位、3 位、5

位、22 位に韓国企業が位置し、この分野における韓国企業の比重は大きいことがわかる。

また、組立金属 22 社のうち、21 社は家電関連の企業である。このうち 18 社は部品の発注・受注関係があり、会社間の協力関係を基に利益をあげている。

3. 原材料・部品の調達先——会社間の協力関係

韓国から原材料・部品を調達している企業は全体のおよそ 7 割の企業で、フィリピンから調達しているのはおよそ 2 割の企業であった。調達先はこの 2 国に集中しており、そのほかはフィリピンを除く ASEAN 諸国、日本、台湾、香港、北米、ヨーロッパ諸国などからである。ただし、フィリピン国内での調達といっても、例えば業種別で最も進出企業数が多い電気・電子産業の場合、その調達先の会社はごく少数の例を除き、ほとんどがフィリピンで営業する韓国企業である(20 社中 18 社)。この傾向は、染色業者を引連れて進出したセーター、靴下、アルバムを製造する企業も同様である。

これらの企業は個別にフィリピンで経営しているのではなく、業種ごとに部品や資材の発注・納品での濃密な協力関係を構成していることである。この関係によって、フィリピンから主に欧米への輸出を伸ばし、年間売上額を倍増してきた。

原材料を現地で全く調達していないのはセーター製造の 4 社および組立金属、石油・化学、建設、靴下、玩具、カバンの各 1 社ずつである。バス製造業者の場合、エンジン、シャシー等の主要な部品は韓国から 95% (残り 5%をフィリピン製のシャシーを使用)調達し、座椅子のシート、ガラス、ボディはフィリピンから 100%調達していた。

4. 製品の輸出先と販売先

販売先はアメリカ、ヨーロッパ向けが中心で特に家電、セーター、靴下、靴はほぼ 100%をこれらの国々に輸出している。製品は、OEM (相手先ブランドの委託品) である。靴の場合は、アメリカのメーカーであるリーボック (REEBOK)、ナイキ (NIKE) や、セーターの場合はドイツ、スウェーデン、下着は日本のグンゼといったものがあげられる。このような製品の場合、韓国向けに輸出しているのは 1 割余りの企業に過ぎない。

また、フィリピン国内で実際に製品を販売している企業は 1 割にも満たない。その品目は、顔料、フィルム、過酸化水素水といった化学産業とバス製造業である。

家電、染色は名目上フィリピン向けに販売しているが、これらはいずれもフィリピンに進出した韓国系大手メーカーに同伴進出した韓国系の中小企業であり、そこに納品してい

る。

上記のことからいえるのは、進出初期には、靴、衣類製造業が主な業種であった。それが、1990年代中盤以降は、大手家電メーカーの電気・電子産業が下請け企業を引き連れて集団で輸出加工区へ進出し、同輸出加工区内を部品供給基地としての役割に位置づけていることである。これは、フィリピンを欧米市場への輸出拠点としていることを意味する。その推進力として、多くの女性の若年労働者が雇用され、企業内における性別役割分業が遂行されてきたのである。

第5節 コリアン男性経営者のフィリピン人労働者に対する意識変容

調査対象とした韓国企業96社は、1975年からフィリピンに進出している。各企業の進出理由をみると、電子・電気、繊維・衣類といった労働集約型産業の場合は一様に、①英語を公用語にしているため意志の疎通に困らず、②人件費と生産コストを削減できる、③労働力が豊富であり、④韓国との距離が近いこと、⑤アメリカやヨーロッパ諸国への輸出拠点として有利である、ということであった。ただ、1990年代中盤以降、賃金高騰のため輸出を主とする企業にとっては不利な状況になっているとの認識も出始めていた。

商社の場合、フィリピンは鉄鋼、石油化学、エネルギーといった基幹産業が不十分のため輸入する必要がある、商社にとってビジネスチャンスの機会が多い、ということも進出理由の一つとして述べられている。

では、フィリピン人労働者は、コリアン経営者に対してどのように評価しているのかという点についても明らかにしつつ、それに対するコリアン男性の意識を考察する。

1. 高学歴のフィリピン人労働者

コリアンの意識を論じる前に、フィリピン人労働者の最終学歴をみると（表6、67頁に掲載）、特徴的なことがある。マネージャーと事務職員の学歴が大学卒業に集中していることと、生産労働者が高校卒業ないしそれ以上の大学卒業者である。

全般的に韓国企業内のフィリピン人労働者は高学歴者で占められている。では、コリアン経営者らは、高学歴のフィリピン労働者に対し、どのように考えているのであろうか。

表 6 フィリピン人労働者の最終学歴

学歴	マネージャー	事務職員	生産労働者
小学校	0	0	1
高校	0	1	25
短大	0	4	5
大学	17	22	22
大学院	2	1	9
職業訓練学校	2	1	4
無回答	1	3	3
合計	22	32	69

出所：1993 年に実施した筆者の調査による。

注 1：フィリピンは小学校を卒業すると、次は高校（ハイスクール）へ進学することになる。日本や韓国のように中学校卒業後、高校へ進学するというシステムではない。

〔事例 1: 高学歴が経営にプラスになると評価〕

LG グループの系列会社であるエルジー・コリンズ・エレクトロニクス・マニラ社（LG Collins Electronics Manila, Inc.）は、1988 年に進出して以来、フィリピン国内の家電販売率で日本製品のシャープ、ソニーと並ぶ売上額上位の企業である。

A 支社長は、「フィリピンに進出したメリットは英語が通じることで、コミュニケーションには不自由していません。フィリピンは発展途上国の中では学歴が高く、労働力の質が良いです。」と答えている。

1992 年、フィリピンの総就学率は 99%、95 年の非識字率は 5.4%である（日本ユネスコ協会連盟編 1996：132）。東南アジアの中で読み書きが自由にできる人口が最も多く、A 氏の話を裏付ける。

同様の答えを示した企業は組立金属と繊維・衣服が 6 社ずつ、商社 4 社、履物・皮革、石油・化学は 2 社ずつ、自動車販売、建設、染色が 1 社ずつの合計 23 社であった。また、

「高学歴のため技術を早く覚えることができ、労働力の質が高い」と答えた企業は、組立金属 7 社、繊維・衣服と履物・皮革が 4 社ずつ、商社 2 社、玩具、アルバム、金融、自動車販売が 1 社ずつの合計 21 社であった。

2. フィリピン人労働者とコリアン経営者相互の評価

表 7 (69 頁に掲載) と表 8 (70 頁に掲載) で、フィリピン人労働者のコリアン経営者に対する評価をまとめた。満足している点として、マネージャーは「経営方法」を上げる声が多く、「対応の仕方」が良いとする点については、マネージャー、事務職員、生産労働者のそれぞれの思いであり、更に「親切」であると考えていることが分かる。

一方、不満な点としては、マネージャーと生産労働者に共通する点として、「フィリピン人を見下す」という点であり、事務職員と生産労働者に共通する点は、仕事を失敗すると、すぐに「怒鳴る」ということを指摘している。生産労働者に特徴的なことは、「低賃金」と指摘する声が大部分を占めていることだ。

このような不満の声は、コリアン経営者の態度に原因があると思われる。なぜ、そのような態度を示すのか、コリアン経営者のフィリピン人労働者に対する意識から明らかにしたい。

表7 フィリピン人労働者のコリアン経営者に対する評価——満足している点

マネージャー	
経営方法が良い	5
協力的な面が良い	3
高給	2
対応の仕方が良い	4
文化を理解している点	1
親切	2
無回答	5
合計	22

事務職員	
経営方法が良い	4
対応の仕方が良い	6
親切	5
特にない	5
無回答	12
合計	32

生産労働者	
経営方法が良い	2
高給	1
対応の仕方が良い	8
親切	11
会話能力がある	2
習慣が良い	3
仕事内容が良い	1
怒らない時が良い	3
仲間意識がある	3
全般的に満足している	1
無回答	34
合計	69

出所：1993年の調査による。

表8 フィリピン人労働者のコリアン経営者に対する評価——不満な点

マネージャ		事務職員		生産労働者	
会話	3	会話	1	会社の規則	1
低賃金	1	見下す	2	会話	1
長時間労働	1	けち	1	低賃金	9
見下す	3	怒鳴る	7	長時間労働	1
不親切	2	気まぐれ	3	見下す	6
怒る	1	コリアンの習慣があわない	1	保険が不十分	1
怒鳴る	2	特にない	5	フィリピン人の習慣を理解不足	1
怠惰	1	無回答	12	誘惑する点	1
気まぐれ	1	合計	32	けち	1
特にない	1			不親切	1
無回答	6			怒鳴る	7
合計	22			工場内が暑い	1
				特にない	8
				無回答	30
				合計	69

出所：表7と同じ。

[事例 2: フィリピン人の高学歴がコリアン技術者に劣等感をもたらし経営に影響]

大手家電メーカーへ部品を納品する協力企業として、1994 年にカビテ輸出加工区に進出したピ&ピ エレクトロニクス社 (P & P Electronics, Inc.) の B 社長は、コリアン技術者のフィリピン人労働者に対する意識を次のように語っていた。

韓国人技術者はフィリピンへ来ると、自分の身分が昇格したと錯覚しています。韓国では上司に使われる立場だったのが、フィリピンでは逆の立場になるからです。しかし、韓国人技術者の学力は、中卒や高校を中退して技術を学んだというレベルで、英語も話せません。フィリピン人労働者は高卒以上で、英語も流暢に話します。韓国人以上に手早く仕事をこなす場合もあります。すると、韓国人技術者は劣等感を持つようになり、気に入らないことがあると、怒鳴ったり、叱りつけることがあるのです。フィリピン人労働者が、韓国人に対して良いイメージを持つことができなくなり、会社経営が成り立たなくなるのです。

コリアン技術者の中には、フィリピン人労働者のほうが高学歴で英語もできることから、劣等感意識を持つてしまうことがあるという。英語ができなくとも、権威的な態度をとろうとも、コリアン技術者は工場内における優位な立場にある限り、フィリピン人労働者よりも上位に立つことができる。このようなコリアンの態度が経営悪化を生じさせてしまうと指摘する声は他に履物・皮革 3 社から聞かれた。

[事例 3 : フィリピン人労働者の仕事に対する態度を指摘]

1995 年に進出した商社である起亜 (キア) の C 支社長によると、

フィリピン人の物の考え方は運命論的で、神様にまかせて怠けようとしします。明日を心配せず、今日に満足して仕事をいい加減にしています。教育をすることによって、この考え方を変えていこうと思っています。

これと同様の考えを 1975 年に進出した商社、双龍 (サンヨン) の D 課長も語っている。

よく言い訳をします。欠席した時、理由を聞くと、母親が体調を崩して会社に行く

など言った、というのですよ。家族中心の考え方のためそうなるのかもしれませんが。自分と直接関係のない仕事をすると行動が遅くなります。このような問題点を解決するには、なぜ働くのかという動機付けが必要だと考えています。

同様の意見として、「責任感がなく生産性が劣る」との声が、繊維・衣服 7 社、組立金属 6 社、商社 4 社、履物・皮革と石油・化学が 2 社ずつ、玩具、自動車アフターサービス、建設、金融から 1 社ずつの合計 25 社であった。

事例 2 と 3 は、韓国とフィリピンの文化、習慣の違いから労務管理の方法に戸惑うことが多いことを示している。このような問題が生じる要因として、「相互が両国の文化を十分に理解していないからだ」と指摘したのは、組立金属と繊維・衣服から 4 社ずつ、履物・皮革と石油化学から 2 社ずつ、機械・装備、金融、建設、商社から 1 社ずつの合計 16 社から聞かれた。しかし、そのような中でも、フィリピン人従業員に対して次のような積極的に対応しようとする経営者も少なくない。

[事例 4：フィリピン文化を理解することが重要]

ビジネスの中心地マニラ首都圏マカティ市から 25 キロのラグナ国際工業団地に 1992 年に進出した、セーター製造会社としてトップクラスであるサン・ウ・フィリピン社 (Sang Woo of Philippines., Inc.) の E 社長は、次のような方法で経営をしている。

雇用者と従業員の関係はお金を与え、仕事をさせるだけというのではなくて、雇用者の要求に合わせて制度を作ることが私たちの仕事です。私ができることは、従業員によい機会を与えないといけないということです。1300 人のフィリピン人従業員を雇用していますが、毎日平均して 300 名も欠勤します。お前はなぜ出勤しないのかと、子どもと家庭の事情で出勤できなかった人に対して、そのようなことは言えません。その 300 人は、早く結婚して子どもがいたり、夫婦の問題があったり、本人の問題を抱えていたり等、いろいろな事情があって出勤できない人たちです。一ヶ月、26 日間働くうち、一週間、欠勤することもしようがないこととして許しています。従業員自身が追い詰めることなく仕事できるようにしています。

そのため 300 名はエキストラと考え、生産高の統計を作り、1000 名で生産性を高める方法を計画的に考えています。生産ラインごとに 11 時間、10 時間、8 時間労働者用

をそれぞれ設け、従業員が好きなラインで仕事をできるようにしています。仕事の遅い人や欠勤の多い従業員を責めることはせず、家族を優先することが普通と考えるフィリピン人の生活習慣を理解することが重要です。その方法で会社に損害はありません。働かない人に給料は払わないのです。私は他国に来ているのですから、そのように考えなければなりません。

私は韓国にいた時よりも、フィリピンに来てからのほうが余裕を持った生き方ができるようになりました。様々なことをふりかえって考えてみるができるようになり、ここでの生活を満足しています。無理をしてはいけません。無理しすぎるとかえって悪いことばかり起こるものです。

と E 社長は話す。

バタアン韓国人投資協議会の会頭をしていた靴製造会社パラマウント・フットウェア社 (Paramount Footwear Co., Inc.) の F 社長は、フィリピン人従業員の管理方法についてこう語っている。

フィリピンの人件費は他国と比べると高いですよ。しかし、労働力の質をみると、高学歴のため良いです。社会、政治の状況も良いです。国民性も良いです。総合的に良質な労働力があるということです。賃金は高いですが、生産性、品質に関しては他国よりも勝っていますよ。フィリピンにはメリットが多いですよ。

フィリピン人の国民性は楽観的で、生活態度をみても、とても適応能力があると思いますよ。手先も器用です。靴の製造は手先を使うものなので器用でなければなりません。

韓国、日本、アメリカ企業がフィリピンで成功するための秘訣は、フィリピンの歴史、文化、習慣、制度、法律を理解することです。企業経営の必須条件は良好な人間関係です。フィリピン人労働者が進出企業のマネジメントを信頼しないとか、反感を持つといった問題が生じる場合、進出側がフィリピン人の思考方式を理解していないことが問題です。現地の文化、習慣にあわせ、コミュニケーションを大事にし、理解することです。

理解ができないと従うことはできません。だから対話するのです。現地の人々は、韓国人管理者が自分たちを理解していると分かった時に従うようになります。フィリ

ピン人は韓国人や日本人よりも西欧化されています。だから、日本人や韓国人よりも合理的です。経済的に進んでいる人々が文化的にも進んでいるということはできません。

事例 4 から、コリアン経営者はフィリピン人労働者に対し、自発的に作業をしてほしいと望んでいるが、一方でフィリピンの歴史や文化を理解しなければ、フィリピン人労働者は、コリアン経営者の要望に応えることができないこともまた示している。

このように、フィリピンにおけるコリアン男性経営者は、韓国式をそのままフィリピンへ持ち込んで経営がなりたたないことを経験し、改めてフィリピン文化を理解するようになっている。

フィリピンの歴史、文化、習慣などを理解したうえで、フィリピン人労働者に接することが重要であると気がつくことになる。この経験が、進出当初はフィリピン人に対して命令口調の対応であったのが、フィリピン人の視点に立って、物事を考え、経営するという意識の転換がみられるのである。

3. 女性に対する意識の変化

[事例 5：女性が強いと考えようになった]

1991 年にカビテ輸出加工区に進出した、サンマ (Samma Corporation.) というボールやグローブを生産している G 社長は、女性に対する意識の変化について話していた。フィリピン人労働者をどう管理するかということではなく、毎日、フィリピン人女性労働者と仕事をしながら女性に対する認識が変わったのである。

フィリピンの女性は生活力があります。韓国では女性は男性よりも弱いという考えがありますが、こちらは女性も男性と人として同じという考え方があります。韓国では女性は結婚すると家に入るのが普通に考えられています。私はこちらでフィリピン人女性の仕事ぶりを見て、女性に対する考え方が変わりました。女性もなんでもできるということがわかったからです。フィリピン人は性格が明るく、強く、適応力があります。その力を工場内にいかすもののすごい力になります。

このような女性に対する認識の変化は、他のコリアン経営者へのインタビューでも聞かれたことであった。

〔事例6：女性が働きやすい職場にしている〕

貿易業務のユニシップ社（UNI-Ship, Incorporated.）を経営するH社長は、韓国にいた時から船舶関連の会社で長年働いてきた。結婚後の1981年にはシンガポールに派遣され、妻も同伴した。1984年には、フィリピンに進出していたフランス系の海運会社にスカウトされ、同年7月からフィリピンで暮らし始めた。しかし、1986年2月に起きたピープルズパワーの影響で、フランス系企業は撤退することになった。H社長は、同年3月、貿易関連の会社を興し、2003年2月時点では、フィリピン人船員を海外へ送り出す事業や、排水処理業務など、系列会社8社を運営するまでに至った。

彼は、熱心なキリスト教徒（プロテスタント）で、会社では、毎朝フィリピン人職員と共に祈りの会を開いている。会社内の祈祷室には、縦1メートルほどの大きな十字架がかけられている。

フィリピン人職員のうち70%が女性である。そのうち60%が既婚者である。結婚し、出産後も仕事を続けることができるよう配慮している。フィリピン人との相互理解のために次のようなことを大切にしてきた。

聖書には収入の10分の1を捧げるようにと記されていますね。それはお金だけでなく、自分の時間も10分の1くらいは神様へ捧げることであり、私は解釈しています。私はフィリピンでビジネスをしていて、会社を率いていく立場にいますが、まず、何を持って職員をガイドしていくことができるのか考えてみました。私の知識、学校で学んだこと、本で読んだこと。そういうことはリミット（限界）があります。うまくいかなければ、私の個人的な意見や知識でしかありません。いったいそのことに職員はついてきてくれるのだろうか。おそらく、それはあなたの考えにすぎないと言われるでしょう。じっくり考えてみました。そうすると聖書というのは否認されないでしょう。ガイドになるのですよ。聖書の御言葉が真理です。その真理をフィリピンの人たちは、拒否する人はいなくて。だから、真理を、私たちの聖書の御言葉を、会社の柱にして、一緒に御言葉を読みはじめたのです。私が新入社員に最初にプレゼントするのは聖書です。

同じ聖書で同じ御言葉を読んで、各自が祈祷して、一緒に一日を始めることにしたの

です。会社での朝の礼拝は 1996 年から始めました。朝 8 時半から 9 時 10 分までをその時間にあてています。フィリピン人の牧師数人が交代で会社に来てくれます。社員は十分に力を発揮するようになりました。会社の収入も以前よりもよくなりました。事業も拡大しています。20 年間、労働組合ありません。信頼関係を築いてきました。

進出当初、コリアン男性経営者の多くが、フィリピン人女性は従順で管理しやすいものと思っていた。ところが、実際に経営してみると、順調には進まなかった。輸出加工区は労働組合を結成することができないが、低賃金で長時間の労働環境に不満を持つフィリピン人労働者たちは工場の操業を阻止し、ストライキをすることもあった。経営が成り立たなければ撤退も考えられるが、コリアン経営者らの共通認識として、高学歴でかつ英語で意思疎通が可能なフィリピン人労働者を手放し、即撤退して他国で一からやり直すというのはなかなかできないことであった。

フィリピンの経済成長とともに人件費が高騰していたこともあり、より人件費の安い他国へ移動したほうが生産コストを抑えることができる。しかし、地理的にも好条件のフィリピンを離れるよりも、輸出向け製品の製造を減らし、フィリピン国内市場向けの拡大に取り組むことで企業の存続を図る経営者もいた。それだけコリアン男性経営者にとって、フィリピンでの企業活動は断念し難いものであった。企業経営を円滑に進めるためには、威圧的な態度でフィリピン人労働者に接するのではなく、フィリピン社会をよく理解し、フィリピン人労働者を尊重する関係作りから始めることであった。

コリアン経営者はクリスチャンも多く、フィリピン人労働者とはキリスト教の信者という共通点もあった。共に祈る時間をもうけて、フィリピン人の労働意欲を引き出せるような関係作りをしている経営者もいた。

コリアン男性経営者は、ジェンダー化された韓国企業の経営を維持しながらも、日々、職場でフィリピン人労働者に接触しながら新たなジェンダー意識を持ち始めているといえよう。それは、家父長制の意識に基づく性別による権力の序列化を少しずつでも崩しつつあるようにみられる。フィリピン人労働者を労働力としてのみ管理するのではなく、個人として尊重する関係作りを通じて、結果として、ジェンダー関係の再編成を試みるようになっているのである。

第6節 ジェンダーの差異を超えた企業活動

1990年代後半以降、もはやフィリピンは単価の安い衣服関連の企業進出は減り続け、家電製品や電子部品といった付加価値の高いものを製造する企業はまだとどまることができた。フィリピンを拠点にアメリカやヨーロッパ諸国へ輸出する労働集約型の産業から石油化学コンビナートや電話回線網など大型投資のインフラストラクチャー整備にも参入するようになっていった。

韓国企業は、従来、米・日・韓の三角関係の構造のもとで自国の経済成長を達成してきたが、フィリピンといったASEAN諸国へ進出することによって、進出先の工業化に直接関わる事業も展開するまでに至った。韓国企業の技術・資金力がASEAN諸国に提供され、独自の経営方法で韓国社会の経済発展に還元しているのである。

しかしながら、フィリピン側からすれば、早急な外資導入政策の一方で、国内産業の育成が本格的に進んでいるとは言えず、今後の経済成長の成り行きを懸念する声が聞き取り調査の中にも随所で聞かれた。生産コストの低い国へと韓国企業が撤退していくとなると、フィリピン人労働者の失業問題が生じることになり、その問題は取り残されていく。

コリアン男性経営者の個人的な意識レベルでの変容、およびそれに伴う経営方針の転換によってフィリピン人の労働環境がたとえよくなったとしても、経済のグローバル化は個人の意識レベルとは関係のないところで進んでいく。

企業進出という無機質なものを媒体として現実に生じている現象を分析しようとするとき、個人レベルの諸問題は議論せず、企業という単位に終始しがちである。しかし、ジェンダーの視点から個々人の意識レベルまで視点を下げて、経済のグローバリゼーションをみてみれば、確かにジェンダー意識には変容がみられるのである。それが相互の関係性の中で生まれているのである。同時に、本章で見てきたように、コリアン＝傲慢という図式をステレオタイプと感じ、それを打破し、ビジネス＝搾取する側だけではなく、共存する方向性を探り、実践しているのである。

では、このような企業活動をおこなっているコリアンは、コリアン・ディアスポラ社会内部で結成された社会組織活動において、どのようなことを取り組んでいるのであろうか。社会組織活動は、相互扶助の機能を持つものだが、フィリピンで暮らしながら生じる問題は、フィリピン人との関わりの中でも起きるものであり、コリアン同士だけでは解決できないものである。次章では、コリアンによる社会組織活動について考察する。

① 調査結果についての詳細は、久津美香奈子「フィリピン進出韓国企業の特徴に関する一考察」大阪外国語大学言語社会学会『EX ORIENTE』Vol. 1、1999 年、179-206 頁を参照されたい。

*The Top 7000 Corporations 1996-1997*から韓国企業 83 社を抽出したが、この資料には会社名のみ記載されており、企業の国籍を知ることはできない。そのため、どれが韓国企業なのかを判断するのに以下の資料を参考にした。

韓国銀行外換管理部『海外投資現地法人現況』1994 年版、1995 年版、1996 年版（韓国語）、大韓貿易投資振興公社編『海外進出ダイレクトリー』1994 年版、1995 年版、1996 年版（韓国語）、大韓貿易振興協会マニラ事務所編「フィリピン進出韓国企業リスト」1996 年 8 月現在（韓国語）、在フィリピン韓国人会編『Korean Directory』1993 年版、1995 年版、Korean Chamber of Commerce Philippines, Inc. “Member’s list as of October 26, 1996”、フィリピン輸出加工区庁（PEZA）およびフィリピン投資委員会（BOI）の統計資料を参考にした。

なお、83 社中 70 社を直接訪問した。残り 13 社中 8 社は聞き取り調査を拒否されたため、フィリピン証券取引委員会（SEC）で企業活動の概要について資料調査した。このほか 5 社についてはファクスで回答を得た。

② 商社、銀行、保険会社、海運会社などが、どの程度進出しているのかを把握するのに、大韓貿易投資振興協会マニラ事務所編「フィリピン進出韓国企業リスト」1996 年 8 月現在（韓国語）を参考にした。1996 年 8 月現在、商社 13 件、保険会社 1 件、海運業 1 件、航空業 2 件が進出している。

③ 1993 年の調査時、大韓貿易投資振興協会編『海外進出韓国企業リスト』1993 年版に掲載されていた、在フィリピン韓国企業 93 社に対して、調査依頼の手紙を発送したところ、13 通返答を得た。この 13 社を頼りに企業を訪問し、他社の紹介を得ながら、総計 31 社を訪問した。その際、コリアン経営者から紹介されたフィリピン人従業員 123 人（マネージャー 22 人、事務職員 32 人、生産労働者 69 人）におこなった調査に基づいている。

第5章 コリアン・ディアスポラによる社会組織の形成

第1節 フィリピン人との共生を目指すコリアン

フィリピンにおけるコリアンは、彼ら、彼女らのルーツとなる民族心を保持し発展させ、次世代へと継承するためにコリアン・コミュニティを形成している。

本章では、コミュニティから派生する社会組織の1つとして、アソシエーション（協議会）に着目したい。コリアンは諸問題に対応するため、あらゆるレベルのアソシエーションを結成し、ホスト社会におけるフィリピン人や諸外国からの人々と共存の道を探っている。

このアソシエーション活動は、立ちはだかる問題に対し、あきらめるのではなく、共同で解決に取り組む力を発生させ、フィリピンにおいてコリアンとして生きることを可能にしている。

マッキーヴァーは、アソシエーションとコミュニティを次のように説明している。一定の地域において、社会的類似性、共同の社会的観念・慣習・伝統、共属感情といった社会的特徴が認められる場合、コミュニティという。このコミュニティと対概念にあたるのが、目的の類似を基礎にして、特定の活動を営むため人為的に組織された、アソシエーションである（R.M.マッキーヴァー：1975）。

ここでは、アソシエーションをコミュニティの内部に形成された組織と捉える。アソシエーションの設立が、フィリピンで生活するコリアンにとって、どのような意味があるのかを考察する。

本章でもちいるデータは、2001年7月4日から23日にかけて、各種協議会の主要メンバー26人（男性21人、女性5人）を対象におこなった社会組織活動についての調査に基づいている。2003年1月11日～2月22日にかけては、主に女性たちの活動について調査をおこなった。

次節から、まず、彼ら、彼女らによるアソシエーションの形成過程を時系列的に提示する。それをふまえて最大規模の組織である韓人会の活動内容について考察する。特に、フィリピン社会に対するコリアンのイメージ向上にむけた活動に着目した。

最後に、コリアン・ディアスポラ社会内部におけるコリアン同士の関係の変化について述べる。ここでは、朝鮮戦争時、韓国でフィリピン人技術者と出会い結婚し、フィリピンへ移住した女性のライフ・ストーリーを事例として示す。

第2節 コリアンによる社会組織形成の歴史

1. 第1期（8世紀～第2次世界大戦終結頃まで： コリアンの移動から第一世代定住化の始まり）

フィリピンへのコリアンの移動は、遠く遡れば8世紀から始まる。張保皋（チャン・ボゴ）という将軍が中国、日本、東南アジアへと貿易を拡大し、フィリピンに足を踏み入れたのが最初と言われている⁽¹⁾。

それから約1000年の歳月を経て、キム・デゴン神父という聖職者を含む3人のコリアンがフィリピンへ渡った。1836年12月、マカオへ行く目的でソウルを発ったものの、当時、マカオに入植していたポルトガル人と中国人との間で紛争が生じていた。その騒乱から逃れるために、金デゴン神父一行はマカオ経由で1837年にフィリピンへ避難したのである。

数ヶ月滞在した後、マカオへ戻ったが、2年後にまた同様の事態が発生したため、彼らは再びフィリピンで避難生活を送ることになった。マニラ首都圏近郊マロロス・ロロンボイという地域にある修道会で暮らしたという（本堂史編集委員 1996：30）。その足跡は後に150年の歳月を経てコリアンのカトリック信者によるコミュニティ形成へと繋がっている。

やがて、1935年頃、北朝鮮に位置する平安北道（ピョンアンブクト）、義州（ウィジュ）出身のコリアン数人がフィリピンに入国した。彼らは、朝鮮人参を売るために、陸続きの中国へ渡り、ベトナムを経由してフィリピンに辿り着き、定住するようになった。この人々がフィリピンのコリアン第一世代といわれている。

第二次世界大戦中、フィリピンも韓国も日本の植民地下にあった。日本の軍属としてフィリピンに流入したコリアンも相当数にのぼっていた。日本軍の命令の下、コリアン軍属によるフィリピン人への残虐行為が繰り返されていた。そのような中で、フィリピン人はコリアンに対する排斥の感情が高まっていたという。

義州出身のコリアン男性3人は、フィリピンに永住することを望んでいたため、道端で物売りをしている貧しい家庭のフィリピン人女性と結婚することにした。その一人、パク・ユナ氏はフィリピン在住のコリアンによる最大規模の社会組織、「韓人会（The United Korean Community Association, Inc.）」を1969年に創設した初代会長である⁽²⁾。

2. 第2期（1945年～1970年代まで： 朝鮮戦争を機に国際結婚をした人々、国際機関、商社関連の人々の入国）

第2期は、フィリピン、韓国の外交関係の土台が築かれた時期である。1949年3月、フィリピンはアメリカ、台湾、イギリス、フランスに続き5番目に韓国と外交関係を結んだ。

翌年1950年6月15日、朝鮮戦争の勃発により、国連軍として参戦した約7200人のフィリピン軍人と技術者が朝鮮半島へ送り込まれた。およそ5年に渡る派兵期間の間、コリアン女性との国際結婚が増えることとなり、1960年代になると、約30世帯がフィリピンへ移住しはじめた^③。

また、1954年に両国に領事館が、1958年には大使館がそれぞれ設置され、外交官とその家族がフィリピンへ入国するようになった。さらに、1970年代以後は、韓国の大企業が駐在員をフィリピンへ派遣するようになり、また、アジア開発銀行（ADB）や世界保健機関（WHO）といった国際機関に勤める職員や、キリスト教の宣教師、留学生も入国するようになった。

この時期は、コリアン同士の親睦を深めることが基礎となり、主に5つの動きがあった。まず、第1期でも説明したように、1969年に「韓人会」が結成されたことである。

2つめは、家族単位での定住化が進むと同時に、子どもたちの教育問題が大きな関心事となった。異国の地においてもコリアンとしての民族心、愛国心を育てるために、1970年8月15日に「フィリピン韓国学校（Korean Community School）」がマニラに開校された。これは毎週土曜日のみ開講され、幼稚園児から高校生までを対象としている（ソ他2000）。

3つめは、単一民族国家であると言われる韓国では、当時はまだ国際結婚に対する意識が否定的であった。そのため、朝鮮戦争を機に国際結婚をしたコリアン妻らによって、相互扶助の役割を担う「母親会」が1975年に結成された。

4つめは、宗教を基盤とするコリアンのネットワークが形成されたことである。1974年マニラにプロテスタントの超教派教会である、マニラ韓人連合教会が設立された。1979年には、当時、留学中であったコリアン神父によって、商社の駐在員とその家族などを対象とするミサをもつようになったことである（本堂史編集委員1996：152）。

韓人会の設立およびクリスチャンの集まりの場ができたことにより、コリアン主体の行事が開催されるようになり、親睦を深めるための活動が始まった。

また、朝鮮戦争に従軍したフィリピン人兵士らによって、1959年に「625〈朝鮮戦争〉参戦勇士会 (Philippine Expeditionary Forces to Korea: PEFTOK)」が結成され、その活動は現在も続いている。

3. 第3期 (1980年代： 企業進出によるコリアンのビジネスマンとその家族の増加)

第3期の特徴としては、中小企業を経営するビジネスマンが急増したことである。1980年代になると、韓国国内の経済状況が大きく変化し、賃金上昇、労働力不足、韓国ウォンの対ドルレートの上昇といった諸問題により、主に労働集約型産業が海外へ生産拠点を移転せざるをえなくなった。ビジネスを中心とする人々とその家族が急増するようになった。

また、宗教においては、コリアンのカトリック教会において大きな動きが見られた。1986年、110名ほどの信者たちによって、「キム・デゴン神父殉教150周年」という記念式典が開催された。

コリアン枢機卿とフィリピン人司教の協力を得て、ロロンボイという地域にキム・デゴン神父の銅像を建立したのである。1989年には、マニラ教区所属の教会堂として昇格し、聖キム・デゴン・アンドリュー教区 (St. Kim Dae Gun Andrew Parish) と名づけられた (前掲 1996 : 44, 57)。2003年2月現在は、500名もの信者を数えるほどに成長した。

プロテスタントにおいても、1986年に「駐比韓国宣教団体協議会 (Korean Missions and Missionaries in the Philippines)」が結成された。宣教師が運営する神学校や大学が相次いで設立されている (チョン 1999 : XXI-XXII)。

4. 第4期 (1990年代： 大企業による大型プロジェクトの開始および各種協議会の誕生)

第4期の特徴は、各種協議会が誕生したことである。この時期になると、中小企業の進出のほかに、大型プロジェクトを担う大企業の進出もみられるようになった。

政府レベルでは、1993年に当時のフィデル V. ラモス大統領が韓国を公式訪問し、フィリピンの輸出増大に寄与している半導体工場や家電製品の韓国本社を訪ね、よりいっそうの技術支援と積極的な投資活動の拡大を依頼した⁴⁾。

1994年11月には金泳三前大統領が投資と貿易の拡大を目指して、大手企業のトップ25人を同行してフィリピンを公式訪問した。ラモス前大統領は、港湾施設および原子力発電所建設のために韓国企業の積極的な進出を要請した。さらに、韓国から中古あるいは新品の武器を購入、慢性的な対外収支赤字の解消のためにフィリピンへの観光客の積極的

招聘および韓国へのフィリピン人研修生受け入れ枠拡大などを要請した。

また、韓国政府によって政府借款の実施機関として設置された対外経済協力基金（EDCF）からは、フィリピンに対し 1990 年以降、借款事業がおこなわれている。電話網拡充事業、送電線設備拡張事業、国際空港建設などに資金が当てられている⁵⁾。

無償援助や技術協力の実施機関である、韓国国際協力団（KOICA）は、1995 年からフィリピンへの援助を開始し、養蚕業開発（50 万ドル）が実施された⁶⁾。

協議会活動としては以下のようなものである。1991 年 3 月には貿易業の経営者によって、「フィリピン貿易人協議会（Overseas Korean Traders Association in the Philippines）」が設立された。ソウルに海外同胞貿易協議会というものがあり、連携した活動をおこなっている。

1975 年に国際結婚をしたコリアン女性らによって発足した「母親会」は、その後、一時活動を停止していたが、1994 年に「在フィリピン韓国婦人会（Korean Women's Association）」として再結成された。ここは、駐在員夫人、自営業者、専業主婦らの親睦の場となっている。

その後、1995 年には、飲食業、宿泊業、食品店などを経営する人々によって、「料食業協議会（Korean Restaurant Association）」が結成された。同年、ビジネスマンでもあり、前韓人会会長を務めた人々を筆頭に、「駐フィリピン韓国商工会議所（Korean Chambers of Commerce in the Philippines）」が発足した。

1996 年には商社や航空業、銀行の支店などを含む「支商社協議会（Branch office Association）」が、1997 年には建設業者による「建設協議会（Construction Association）」が、また、年々増え続ける留学生たちによる「韓人学生協議会（Philippine Korean Student Association）」が発足した⁷⁾。

以上のような組織は、親睦を深めるということだけでなく、フィリピン人、フィリピン社会に貢献できる活動をするという共通の目的をもっている。1991 年のピナトゥボ山大噴火時には、バタアン輸出加工区やカビテ輸出加工区に進出していた韓国企業のビジネスマンらによって、被災者へ支援物資（工場で製造した靴やセーターなど）を提供するなど、具体的な活動もおこなわれた。

さらに、この期間はコリアン向けの各種マスメディアが創刊された時期でもある。週 1 回、新聞が無料で配布されている。フィリピンと韓国のニュース、国際情勢のほか、コリアン・コミュニティの情報や、各種自営業の紹介など生活情報を載せている。1993 年 9

月創刊の『コリアポスト』は、マニラ外国人記者クラブ (ManilaOverseasPressClub) の正規会員として、国内および世界 23 カ国のプレスクラブと加入提携した新聞社である。マニラ、ニノイ・アキノ国際空港、オロンガポ、スービック、アンヘレス、バギオ、イロイロ島、ボラカイ島、セブ島、ダバオ、ザンボアンガ、カガヤン・デ・オロなどに特派員を置いている。

設立当初は、中古品を譲ります、買いますといった内容だけを掲載した情報誌だった。というのは、フィリピンでビジネスをしていた人が韓国へ帰国する際、必要でなくなった家電製品などを誰か譲り受けてくれないだろうか、といった声が多くあったためである。後にフィリピンの情報や韓国のニュースを掲載するようになった。今では、コリアンがより良い生活を送ることができるよう情報を伝え続けることが目的となっている。

情報誌作成の傍ら 1995 年からは、熱心なキリスト教徒であり、歯科医の資格を持つ『コリアポスト』の会長が率先して、医療による宣教活動も行っている。治療を受けることのできない農村地域のフィリピン人を診察し、ボランティアとしてコリアンの外科医、看護師、薬剤師、美容師なども参加している⁽⁸⁾。

また、1994 年 8 月創刊の『マニラソウル』も、バギオ、セブ、アンヘレス、スービック、ボラカイに支局を設置している。新聞がコリアンの地域社会に根づき、情報交換および交流が活発化することを目的としている。約 100 社のスポンサーによって成り立っている。

『マニラソウル』は、フィリピン人写真家による写真展を開催し、収益金をユニセフに寄付するといった活動のほか、コリアンの子どもたちや学生を対象にウインドサーフィンやダイビングキャンプを企画するなど、次世代の育成にも力を入れている⁽⁹⁾。

続いて 1995 年には『ニュース・ゲート (News Gate)』(フィリピンナショナル・プレス・クラブ正式メンバー) が創刊し、2000 年以降も『コリアン・ニュース・フォーカス・ウィークリー・マガジン (Korean New Focus Weekly Magazine)』、『週刊マニラ』などが、発刊されている。コリアンにとって、これらの新聞は欠かせないものであり、主要な情報源となっている⁽¹⁰⁾。

さらに、1999 年 8 月には、コリアンたちにとって、画期的な出来事が起きることになった。それは、当時のジョセフ・エストラダ (Joseph Ejercito Estrada) 大統領は、大統領 129 号を発令し、1999 年 8 月 9 日から 15 日の期間、「フィリピン・韓国友好週間 (Philippines-Republic of Korea Friendship Week)」としたことである。

さらに、朝鮮戦争勃発から 50 年目の 2000 年、韓国、フィリピンの両国において戦没者を慰霊する記念式典が開催された。エストラダ大統領は、同年 9 月 7 日、朝鮮戦争に参戦したフィリピン軍人を称える日とし、大統領令を發布しフィリピン参戦勇士の日と定めたのであった⁽¹¹⁾。

また、新たな層のコリアンの移動もみられるようになった。1997 年 12 月のアジア通貨危機の影響は、アメリカやカナダに留学していたコリアン学生をフィリピンへ移動させることになった。通貨危機の煽りは親たちを失業させた。学費の高いアメリカやカナダには潤沢な資金を送金することができなくなった。そのため、勉学の間をフィリピンへ移したのであった。

5. 第 5 期 (2000 年以降： フィリピン人や外国人との交流開始の時期)

第 5 期は、コリアンがフィリピン人や多国籍の人々と相互に顔の見える関係をつくりはじめた時期である。善意の気持ちを、社会組織として動くことによって表すようになった。フィリピン人に対する奉仕活動を積極的におこない、コリアンのボランティア精神が目に見える形へと大きく変化しはじめた時期である。

一方で、1990 年代まではみられなかった、複雑な問題が浮上するようになった。直面した危機にどう取り組んでいるかについて、次のような 5 つがある。

1 つめに、1997 年のアジア通貨危機の影響によって失業した人々が大量してフィリピンに流れ込むようになったが、就労ビザを取得せず自営業をはじめる人々が増えたことである。

これらの問題を解決するために、2001 年 7 月に「商人協議会 (Merchant Association)」が結成され (2002 年には「経済人連合会 (Financial Expert Union Association) へと改名)、フィリピンで自営業を営むコリアン経営者のための団体として、就労ビザ、会社設立に関する諸問題に対処する活動を行っている⁽¹²⁾。

2 つめに、1990 年代後半からフィリピンへのコリアン観光客は年々増え続けており、コリアンのガイドが長期滞在するようになったが、就労ビザを持たずにガイドしていたため、フィリピン移民局によって取り締まりが強化された時期でもあった。

その問題を解決するために、2001 年 6 月、「在比旅行社協議会 (Travel Company Association in the Philippines)」が結成された。2002 年 6 月に、フィリピン観光省で、コリアンのガイドのための特別なセミナーが開催された。コリアンがガイドライセンスを

正式に取得した場合、1年間の特別労働許可ビザ（Special Working Permit Visa）を取得できるようにした⁽¹³⁾。

3つめに、「駐フィリピン韓国商工会議所」では、アメリカ、オーストラリア、日本、スペイン、台湾などと2001年に「在比外国人商工会議所（Joint Foreign Chamber）」を結成した。

インフラストラクチャー整備や大気汚染に関するビジネス面での取り組みなどについて共同で話しあう会合を開いている。これらは、ビジネス機会を幅広く得られると同時に外国人ビジネスマンと共同で事前に危機を防止する策を練っているといえる⁽¹⁴⁾。

4つめに、2002年12月12日に発布されたアロヨ大統領の大統領令156条によって、中古車および中古付属品の輸入が全面禁止され、数千名のフィリピン人従業員とコリアン経営者が危機に直面したことである。

その事態を受けて、「韓国中古自動車輸入協議会（South Korean Used Automobile Import Association）」が結成された。アロヨ大統領への法律改正に向けての直訴、また同時に1000名以上のフィリピン人従業員らによる大規模なデモも行われた（『マニラソウル』2003年2月1日）。

5つめに、短期間の語学研修を目的とするコリアンも増加するようになり、コリアン経営者による語学学校が相次いで設立されるようになった。しかし、学生ビザ（Special Study Permit: SSP）がないまま語学学校で学ぶコリアン学生の急増に伴い、フィリピン移民局によって摘発され、本国へ強制送還されるという事件も多発することになった（『韓人会報』2000年秋号：12）。

後に、語学学校を経営するコリアンは、「在フィリピン語学院協議会（Linguistic School Association in the Philippine）」を結成した。正式にフィリピン移民局から認可された語学学校の場合、入学の際、SSPの発行手続きが容易にできるよう改善されている。

上記のように、危機に直面した際、コリアンたちは協議会活動を通して、フィリピン当局との協力によって、解決に向かうよう試行錯誤の活動を続けている。

その一方で、フィリピン人に対するボランティア活動も活発に行われるようになっていった。例えば、次のような6つがある。

1つめに、「韓国貿易人協議会」や「婦人会」はフィリピン人学生への奨学金支給の実施など積極的な活動を展開している⁽¹⁵⁾。「韓国貿易人協議会」では、1989年からフィリピン人学生に奨学金を支給しているが、その資金作りとして、韓国物産展を開催し、売上金を

貯蓄した上で、その利子を奨学金にあてている。奨学委員会を設置し、2001年には、フィリピン大学のフィリピン人学生3人とコリアン留学生1人、およびフィリピン入国管理局職員の子弟2名に支給を決定した。国際結婚によって生まれた子どもたちへの奨学金支給も検討しており、フィリピン社会におけるコリアンに対する友好的なイメージ向上を目指し努力している(マニラソウル2004年4月16日付け記事<http://www.manilaseoul.com>)。

2 つめは、マニラから直線距離で55キロ、道路距離で150キロ離れた所に位置するバタアン輸出加工区では、コリアン・ビジネスマンの親睦会である、「バタアン韓国人投資家協議会(Korean Investor Association of Bataan: KIAB)」というものがある。ここでは、フィリピン総合技術大学(Polytechnic University of the Philippines: PUP)のフィリピン人学生5人に対して奨学金を支給し、卒業後は韓国企業に就職も可能とのことである。

3 つめは、カビテ輸出加工区に進出したビジネスマンらによる「カビテ投資家協議会(Korean Investors Association Cavite)」によって、2001年2月に産婦人科と小児科のある韓国・フィリピン友好病院(Korea-Philippines Friendship Hospital)が建設された。これは、韓国国際協力団(KOICA)による300万ドルの資金援助、技術援助の協力がなされた⁽¹⁶⁾。

4 つめは、ビジネスマン、聖職者らが中心となって、「愛の家(House of Sarang)」という福祉施設が設立されたことである。フィリピン・韓国間の過去の歴史に立ち返って、朝鮮戦争へのフィリピン軍の参戦に対して、感謝と恩返しをする気持ちから実現した。それは、ストリート・チルドレンとして生活している6歳から13歳までの男子のみが入所できる施設である。1995年にコリアンの建設業者によって建物が完成した。証券取引委員会(SEC)に登録し、保健福祉部(DSWD)から社会福祉施設運営許可を1998年にうけ、2000年に公認された⁽¹⁷⁾。

5 つめは、キリスト教(プロテスタント)信者による奉仕活動であり、それは目に見える形で活発に行われている。「喜びの教会・助ける宣教会(Joyful Church & Helping Mission)」は、毎週日曜日午後、マニラ湾沿いで、ストリート・チルドレンにハンバーガーとジュースを無償提供し、約200人と礼拝を共にする時間を設けている。その活動に現在では他教会のコリアン信者、子どもたち、留学生らがボランティアとして参加している⁽¹⁸⁾。

医療の分野においても、キリスト教の宣教師が活動している。ミンドロ島、パンガシナン、オロンガポ、バタアンなどで、歯科、内科などの医師免許を持つ宣教師が現地に赴き、

短期間で 100 名から 700 名規模の患者を対象に無料で治療行為をおこなっている⁽¹⁹⁾。

また、6 つめとして、韓人会会長（2003 年、2004 年度就任）をはじめとする、熱心なクリスチャンたちによって、ハンセン病患者のための村づくりなど、具体的な活動もおこなわれている。韓国にはソロク島というハンセン病の元患者が住んでいる定着村がある。韓人会会長がソロク島を訪ね、フィリピンの元患者のために村づくりをしようと話をした。ソロク島の住民とフィリピンのコリアンが、フィリピン人のハンセン病元患者のために、国境を越えた共同で取り組む活動である⁽²⁰⁾。

仏教では、世界文化遺産である韓国の慶州仏国寺石窟庵からフィリピン仏国寺布教院が設置された。熱心な信者が日曜日の参拝のほか、定期的に修練会を開催している⁽²¹⁾。

文化面でも、フィリピン、韓国間の相互交流がはかられるようになってきた。2000 年に「比韓文化財団（The Filipino-Korean Cultural Foundation, Inc.）」が設立された⁽²²⁾。財団の会長が率先して、朝鮮戦争に参戦した元フィリピン人兵士によって 1959 年に結成された、「625〈朝鮮戦争〉参戦勇士会」とも長年に渡り交流を続けている。

また、この財団の会長の協力によって、急激に増えている国際結婚家族を対象にする「韓国・フィリピン家族協会（Kor-Phil Family Association Inc.）」が 2002 年に結成された。2003 年 2 月現在の会員は約 70 世帯（そのうち 80%がコリアン夫、フィリピン人妻のカップル）である。毎週土曜日には、2 世の子どもたちや、フィリピン人妻を対象に、韓国語教室を開いている。

この活動に「婦人会」も賛同し、旧正月や秋夕（チュソク）という旧盆の時期には、韓国固有の文化を理解するために伝統的な行事を毎年開催している。特に子どもたちの韓国語能力の向上、韓国の文化理解によって、コリアンとしての民族心の育成も目指している。

以上のように、2000 年以降、コリアンの諸組織は、フィリピン人の必要に応じて活動するようになり、地域社会に貢献している。このような関係は、コリアンの安定した生活基盤の形成につながっているといえる。

第 3 節 最大規模の社会組織——韓人会

1. 韓人会の組織と特徴

では、次にコリアン・ディアスポラ社会の大元となっている韓人会をとおして、フィリピンにおけるコリアンの活動について考察する。フィリピン韓人会（The United Korean Community Association Inc.以下韓人会）は、1969 年に設立され、2004 年現在、15

代目の会長が引き継いでいる⁽²³⁾。マニラ首都圏のビジネス中心地であるマカティ市に本部を置いている。

設立の目的は、フィリピンに居住しているコリアンたちの親睦と紐帯を強化し、その福利を増進することである。そして、フィリピン人との調和した生を追求することによって、コリアンの誇りを示し、祖国の発展に寄与することを目的としている。韓民族の全体性（アイデンティティ）を築き、民族愛を抱くことができるよう、体育、環境、文化、教育事業を支援している（『韓人会報』2001年1・2月号：3）。

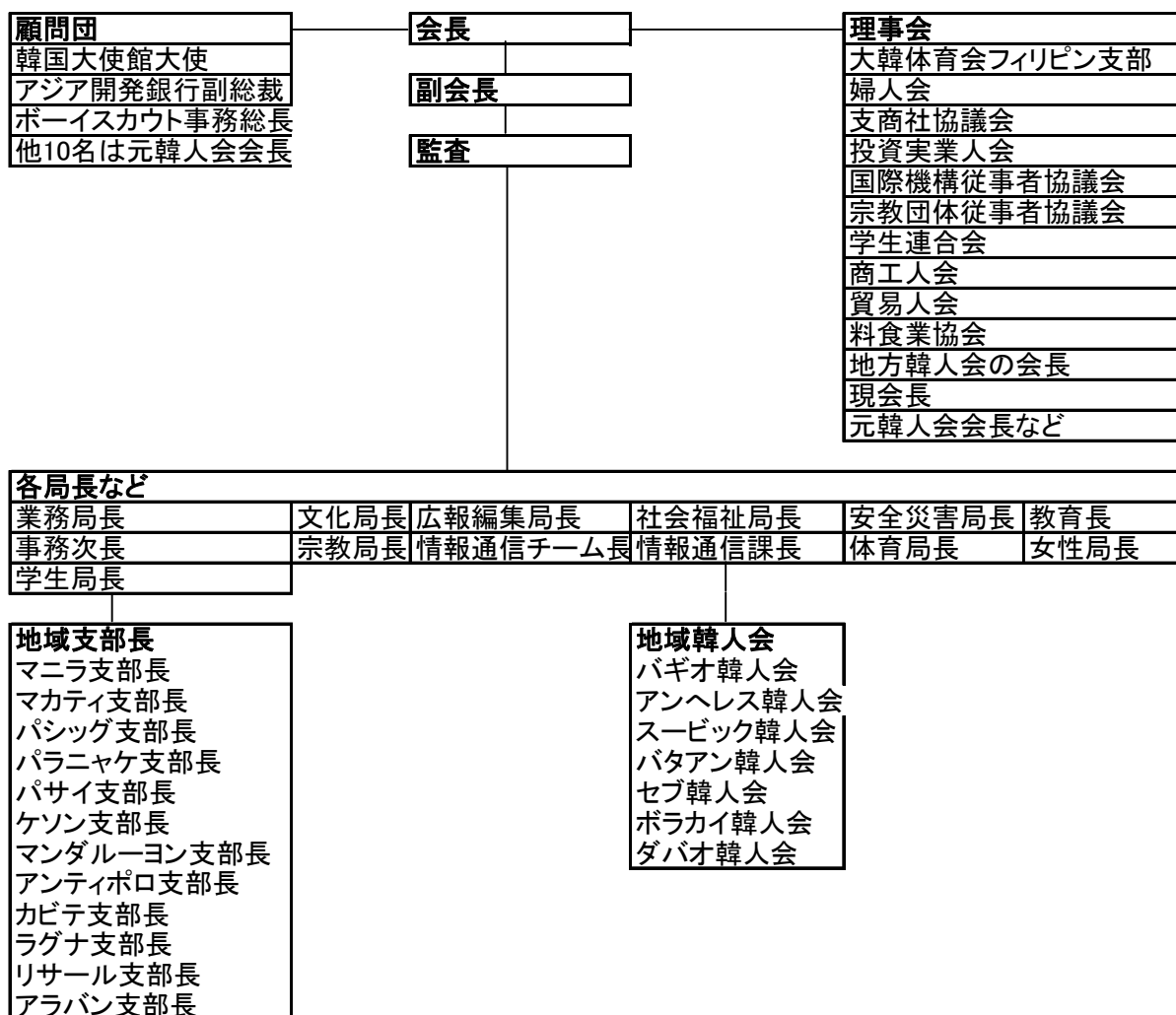
韓人会の組織は図1（90頁に掲載）のようである。これは、(1) 役員会、(2) 理事会、(3) 顧問会、(4) 独立して運営されている地方都市7ヶ所における地方韓人会（バギオ、スービック、アンヘレス、バタアン、ボラカイ、セブ、ダバオ）の代表者、(5) マニラ首都圏とその周辺におけるコリアンの集住地域13ヶ所に設置された支部（マニラ、パラニャケ、パサイ、パシッグ、ケソン、マカティ、マンダルーヨン、アンティポロ、カビテ、ラグナ、バタングス、アラバン、リサール）の代表者からなっている。およそ50人によって組織されている。

役員の任期は2年であり、会長1名、副会長、監事、および韓人会の運営全般の実務を担当する局長によって構成されている。2003年、2004年度の役員では、韓会の歴史上初めて、女性の副会長が誕生した。また、新たに社会福祉局長も選出され、フィリピン人に対するボランティア活動を組織として運営する企画を練るようになった。

理事会に選出された人々は以下のようになっている。100人以上の正会員を持つ地方韓会の代表、韓人会長および歴代会長の中から代表者3名から選ばれる。また、次の組織代表者によって構成されている。大韓体育会フィリピン支部、婦人会、支商社協議会、投資家協議会、国際機構従事者協議会、駐比韓国宣教団体協議会、商工会議所、貿易人協議会、経済人（商人）協議会、旅行社協議会、留学生協議会というメンバーである。他に、選出理事として、正会員30名以上の推薦で選ばれる者が5名いる。

顧問会は、会長から推薦された者が、理事会の決議によって若干名が選ばれ、諮問する機能を持っている。駐フィリピン大韓民国大使館大使、国際機関の従事者、歴代韓人会会長などが就任している。会費は年間1,000ペソである。会員は約1,000世帯（1世帯を4人と考えると、およそ4,000人の会員）で、商社勤務10%、企業経営者20%、自営業者40%、宣教師10%、学生20%という構成となっている。年齢層は、0歳児から20代が30%、30～50歳代が60%、高齢者（最高齢者が70歳代）が10%となっている。

図1 韓人会組織表



注: 2001年度、および2004年度を参考に作成した。

出所: Korean Association Phils., Inc. 『フィリピン韓人会報』2001年1、2月号、22-23ページ。

「週刊 コリアポスト」第520号、2004年1月10日付け、14ページ。

韓人会の活動事業は次の 5 つに大別できる。(1) 生活相談、就労、留学ビザの申請、犯罪防止相談窓口、(2) 親睦を深めるための行事を開催、(3) フィリピンに居住している外国人同士の交流、(4) 世界各国に居住するコリアンとのネットワークの形成、(5) フィリピン人、フィリピン社会のためになる活動、である。(5) については、次節で詳しく説明する。ここでは、4 項目について具体的にみていきたい。

(1) コリアンの生活相談

2002 年 2 月、韓人会とフィリピン移民局がビザ協定書を締結し、韓人会で 9g 就業ビザの発給業務を代行することができるようになった。それまで 6 ヶ月間かかっていたところを、40 日から 60 日以内で就業ビザの発給許可を受けることができる。

また、コリアンの福利向上のために、随時寄金を募る「韓人発展基金」というものが 2001 年に設立された。これまで韓人会の事務所は賃貸であったが、この発展寄金によって 2003 年には 34 年ぶりにマカティ市内に事務所を購入した。

危機管理についても警告を促している。フィリピン警察庁職員を講師に招き、強盗など、犯罪の被害者にならないよう未然に防ぐ方法についてセミナーを開催している。他に、テロや災害時に備えて、災害対策委員会を常設することを考えていた。医師、看護師によって、非常時の対策班を組織し、救急車両、薬品の確保など、いつでも対応できるよう準備をはじめるとのことであった。また、様々な問題にたいし、専門的なアドバイスを受けられるようコリアンのための弁護士および法律顧問担当者の採用を考えているとのことであった。

コリアン留学生への奨学金制度が、1 年に 2 回（前期 6 月、後期 10 月）実施されている。2001 年 7 月現在の時点では、計 10 人の留学生に 5,000 ペソずつ奨学金を支給していた。元々は、両親の収入に基づいて奨学生を選んでおり、奨学生らの名前は外部に公表していなかった。というのは、家計が苦しいというレッテルを貼られることを恐れていたという。しかし、奨学生名を公表したほうが良いという韓人会内部の声により、2001 年以降からは成績優秀者のみ奨学金を得られるという方針に変えた。

また、韓人会としては、これまで国際結婚をした家族にたいして特に関心をはらっていなかった。しかし、今後はフィリピン人配偶者や子どもたちに韓国の文化を理解できるよう韓人会としても支援していこうとしている（『コリアポスト』2003 年 2 月 15 日：14）。

(2) コリアンの親睦を深めるための行事を開催

「フィリピン・韓国文化交流の夜 (Filipino-Korean Cultural Exchange Festival Night)」というものを2年に1度ずつ開催し、2002年で11回目を迎え、コリアンが取り組むイベントで最大のものである。ニノイ・アキノ・スタジアムを会場に、約3,500人のフィリピン人とコリアンが集い、韓国、フィリピン両国の歌手を招待し、韓国企業のフィリピン人従業員らが参加し、歌や踊りを披露する。

また、スポーツを通じた交流も行われており、韓人体育大会は2003年で16回目になった。韓国人学校の場所となる、デ・ラ・サール・ハイスクールの運動場(室内、室外)を借りて、体育大会が開催される。1999年は、400～500人ほどの参加だったのが、2002年には、2,000人という予想以上の参加者だった。準備していた料理もプレゼントも不足するほどであった。地域、支会、支部別にチームを結成し、子どもから大人まで毎年、楽しみにしているイベントの一つである。

音楽発表会というものも2年に1度ずつ開催され、出場者がフルートやピアノや歌など、各自得意な音楽を披露する。

地方にある韓人会でもさまざまな行事が催されている。例えば、バギオにある、バギオ韓人会では、毎年5月5日の子どもの日には、「子ども敬老・孝行特技自慢大会」というものが開催される。60歳以上は特別客として招待し、子どもたちが童謡を歌い、踊りを披露する(『韓人会報』2001:21)。

旧正月の行事では、韓国固有の正月の遊びや、もちつき大会などをおこなっている。そこには、親のいないフィリピン人の子どもたちも招待し、子ども同士の交流を深める場にもなっている(『マニラソウル』2003年2月8日:62)。

(3) フィリピンに居住している外国人同士の交流

韓人会はまた、フィリピン在住のアメリカ人、スペイン人、日本人など約12カ国の外国人コミュニティの会長と共に、「在フィリピン外国人協議会連合 (Federation of Foreign Association in the Philippines Inc.)」を結成した。定期的に集会を持っている。

議題としては、フィリピンに居住する外国人の権利保護、安全対策についてなど情報交換をしている。例えば2002年10月の会議では、移民局の弁護士を招待し、外国人のビザ問題についてセミナーが開催された(『韓人会報』2002 冬号:25)。

(4) 世界各国に居住するコリアンとのネットワークの形成

朝鮮半島の統一にむけて海外在住コリアンとの連携した活動が見られる。民主平和統一諮問会東南アジア支部フィリピン支局というものがあり、元韓人会の会長らが名を連ねている。

2002 年にはソウルで世界各国在住のコリアン女性の代表者らが集い、朝鮮半島統一問題や海外生活に伴う諸問題を討議する国際会議も開催されている⁽²⁴⁾。

また、1995 年 1 月、日本における阪神淡路大震災、2002 年 9 月、韓国における水害被害など、資金的な面で援助活動もおこなった。

さらに、日本との関係で言えば、日本の歴史教科諸問題に対する抗議行動もおこなわれている⁽²⁵⁾。2001 年 4 月 3 日、日本において、「新しい歴史教科書を作る会」による教科書が検定において承認された。そのことに対して韓国政府は、同年 5 月に日本政府へ、日本の中学校歴史教科書勧告関連内容修正要求資料というものを伝達した。

このような一連の過程を経て、2001 年 6 月 12 日前後に、約 70 カ国 130 都市において、日本大使館と領事館前に在外コリアンが集結し、「日本の教科書を是正するためのキャンペーン」が開催される運びとなった。

そのため、在フィリピン韓人会においても、「日本の歴史教科書歪曲に対し糾弾するキャンペーン」と称し、各協議会会員にも呼びかけて、大規模にデモ行進を開催する予定で準備を進めた。しかし、フィリピン当局から許可が下りず、計画倒れになったのである。

第二次世界大戦時の日本による侵略の正当化、従軍慰安婦問題などについて、フィリピン人にも理解を求め、共同してキャンペーンを展開する予定であった。

第 4 節「よき隣人のコリアン」としての韓人会の活動

ここで着目したいのは、「よき隣人としてのコリアン」のイメージ向上の活動である。コリアンがフィリピン社会に受け入れられ、生き残るための戦略ともいえるだろう。

1980 年代から 1990 年代中盤まで、コリアンが経営する企業では頻繁に労働問題が発生するなど、雇用関係においてコリアン男性ビジネスマンに対するイメージは低下していた。

また、1990 年代以降、韓国からフィリピンへの観光客が急増するにつれて、就労ビザも持たずに不法滞在のままガイドをするコリアンが目立ち始めた。さらに、1997 年のアジア通貨危機の影響で、韓国では失業者が急増し、行き場を失った人々が韓国から近く、英語圏でもあるフィリピンに大挙して移動するようになった。これらの人々もまた、観光

ビザで入国後、就労ビザがないまま、コリアン対象の小ビジネスを始めるようになった。しかし、フィリピン入国管理局から一斉摘発にあうなど、不安定な生活を余儀なくされていた。コリアン同士の詐欺事件も頻発し、フィリピンにおけるコリアンのイメージは決してよいものではなかった。

そこで、韓人会は、フィリピンでコリアンが生活し続けるための方策として、「よき隣人」としてのイメージをホスト社会の人々に与えるための活動を開始した。

韓人会の設立目的にも、「フィリピン人との調和のとれた生活を追及する」と明文化されている。1991年のピナトゥボ（Pinatubo）火山大噴火による被災者に対しては、韓人会主催によって、アンヘレス市近郊の6地域へ直接訪問し、米60キログラム、ラーメン360パック、衣類とゴム製の靴などを提供したことがあった。しかし、全般的には、コリアンとフィリピン人の文化交流はなされてきたが、具体的に地域に溶け込み、地域住民にコリアンの姿が見える活動はおこなっていなかった。2003年度の韓人会会長は次のように話す。

歴代の韓人会の会長は、フィリピン社会に韓人（コリアン）たちが定着できるよう、努力をしてきたでしょう。韓人会の活動だけでなく、フィリピンで安定的に事業ができるよう商工会議所の設立に力を尽くした方や、文化交流によって、韓人とフィリピン人の相互理解に努めた方々がおられます。私の代では、フィリピン人にとって、よきイメージを持ってもらえる韓人になることができるよう、活動を始めます。

そこで、2003年には、韓人会の会長をはじめとして、「よき隣人のコリアン（be Good Neighbor Korean）」というスローガンのもと、様々な計画がうちだされた。「よき隣人」としての活動には次のようなものがある。

韓人会およびコリアンによる諸団体および個人名で奨学金を積み立て、コリアン奨学金（Korean Scholarship）制度を作ることである。

2003年3月にはマニラ湾の砂浜にて、大量に投棄されているごみを一斉に大清掃した。このマニラ湾沿岸では、キリスト教会によって毎週日曜日に主にストリート・チルドレンの子どもたちを対象に礼拝もとっておこなわれており、周辺の住民にとっては、コリアンの存在は見慣れたものであった。ここでは、英語が堪能な牧師による説教および賛美の時間がもたれるが、それ以外のコリアンの姿をフィリピン人に見せることはなかった。それが、

今回、フィリピン人の生活空間を衛生的に美しくし整えたことは、フィリピン人にとって、コリアンが「よき隣人」であることをアピールした一つの大きな成果であった。大清掃に関しては、マニラ湾のみでなく、セブ島、ボラカイ島など、対象地域をさらに拡大していくとのことであった。

もう一つが、医療活動である。診察行為をしている宣教師はいるが、献血をしたことはなかった。韓人会では、献血運動を実施し、緊急時にフィリピン人やコリアンが無料で血液を受けることができるようにした。この献血に関しては、フィリピン人に十分理解してもらえるよう、努力を重ねてきたことの一つでもある。フィリピンでは、血液を売る人々が性病、エイズ、肝炎などの疾病を抱え、また、麻薬を使っているというケースが報告されている。そのため、輸血をしたために病気に感染するという事態が発生している。韓人会会長、幹部役員はマカティ市長と会議を重ね、血液を採取する必要性を話してきた。そして、2003年2月に初めてコリアンが献血キャンペーンに協力することが実現した。よい隣人コリアンとしてフィリピン人に受け入れられるための一歩となった（『コリアポスト』2003年2月15日 1、9）。

また、もう一つがビジネスの中心地のマカティ市内にゴミ箱を設置することである。マカティ市には、コリアンの小売業が密集している地域がある。ここは2003年2月にマカティ市長によって正式にコリアン・タウンと命名されたところでもある。この地域は、コリアンの姿を非常によく目にする。ここに、ゴミ箱を設置することによって、町を衛生的にする。環境美化にコリアンが一翼を担っていることを目に見える形で示そうとしているのである。

歴史的な側面からは、朝鮮戦争に従軍したフィリピン人元兵士らによる、「625 参戦勇士会」は、韓国の京畿道（キョンギド）のユルトンという所に戦死したフィリピン兵士のための慰霊塔を設置した。さらに、フィリピン人によって構成されているユルトン記念会が、2001年4月23日に韓国で記念式典を開催した。その際、韓人会から幹部が出席し、フィリピン・韓国間の歴史的な繋がりを深め、その事実について次世代へ伝える努力をしている。

このように、韓人会は、フィリピン社会におけるコリアンのイメージが向上するよう、経済面、健康面、生活環境の整備といったあらゆる場面において、その存在を示すようになったのである。フィリピン人にとって、コリアンは信頼できるものとして、その存在意義を高め、外国人として暮らすコリアンの身の安全を確保できるのである。同民族同士が

協力しあうことによって、フィリピン社会で生きぬく方法を見だし、フィリピン人とも密接な協力関係を築いているのである。

第5節 韓国学校——女性の専門職をいかせる場

韓国学校は、毎週土曜日の午前中に開校されている。ここは、教師の資格を持つコリアン女性の専門をいかすことのできる場であり、母親たちにとっては、PTA活動を通じて、子どもたちの教育や学校の運営に関して意見を表明できる場である。2001 年までには約 4000 人の卒業生を送り出している⁽²⁶⁾。

2003 年 2 月現在、教員資格を持つ 10 人のコリアンが韓国の教育基準によるカリキュラムで授業に取り組んでいた。教科は、国語、歴史、音楽、数学の 4 科目である。教員の性別をみると、10 人のうち男性はわずか 3 人である。校長は男性、教頭は女性であるが、ほぼ女性教員によって韓国学校が支えられていることがわかる。韓国で教員免許を取得し、韓国で働いていた女性たち、もしくは、すぐに結婚し、教師として働く機会のなかった女性もいる。夫の仕事の都合のため、フィリピンに入国することになったが、専門職をいかすことのできる場を得たのである。

フィリピン入国前に、韓国で教職に就いていた女性たちにとっては、週一回しか開校されない韓国学校の謝礼ではとても経済的に自立しているとはいいがたい。しかし、特別な使命感を持って働いている。それは、母語教育と韓国の文化や歴史を教え、帰国後も韓国の学校教育に適応できるよう、導くことのできる立場にいるからである。フィリピンで暮らすことで、自身の能力を発揮できない女性たちもいる。しかし、彼女たちは教職に就くことで、社会的な貢献ができる喜びと自己肯定感を持つことができる。

PTA においては、母親が中心となって運営されている。韓国語の書籍が並ぶ小さな図書室も設置されており、母親たちが交代で貸し出しの係りを担っている。韓国の年中行事である旧正月や、「先生の日」といった特別な時にも、彼女たちが腕をふるって韓国の伝統料理を作って皆にふるまう。このような協力があつてこそ、韓国学校が運営されているといえる。

韓国学校の歴史をみると、1970 年の開校当初の教員は、フィリピン留学中のコリアンのシスターたちであった。女性たちの活躍がみてとれる。当時は、大韓民国大使館員やアジア開発銀行員の子どもたち 10 名ほどの生徒が入学し、わずか 3 学級で構成されていた。大使館の参事官が初代校長として選任された。シスターが帰国後は、フィリピン留学中の

コリアン学生たちが教師になり、子どもたちの指導にあたってきた。

歴代校長をみると、大使館員、アジア開発銀行員、WHO（世界保健機構）事務次長など、国際的な機関に従事している男性である。女性校長の就任は歴代一人のみである。2002年度からは初めて公募によって校長が選ばれることになった。釜山の高校で45年間、教師をしていたというベテランである。

校訓が「母国愛、隣人愛、母国語愛」である。この校訓からもわかるように、フィリピンで暮らしながらも自分はコリアンであると自覚できるよう民族教育を主軸にしている（ソ他編 2000）。1983年からは、韓国政府から年間5,000ドルの補助金が出るようになり、学校運営に支障をきたすこともなくなった。その補助金から、教職員は月給100ドルを受けとることができるようになった。

設立当初は子どもたちが韓国語を忘れないように語学教育が主たるものであった。しかし、親から様々な要望が出された。商社から派遣された駐在員家庭の場合、およそ3年で韓国へ帰国することになる。帰国後、勉強についていくためにはハングルだけを学んでいては不十分で、韓国の教育課程に沿った科目も学ばなければならなかった。学校の教育内容を充実させていくことが課題となったのである。

韓国学校では、1989年と1996年の2回、保護者を対象に、韓国学校への要望に関するアンケート調査をおこなっている。その結果をみると、保護者が学校に求めていることの変容がわかる。

1989年度の調査で、韓国学校で子どもに何を学ばせたいかという質問項目では、韓国の伝統的な礼儀作法や道徳心を教える授業を求める声が多かった。それが、1996年度の調査では、数学を希望するとの声が半数以上を占めるようになり、将来、大学進学に備えて高度な数学の力を身につけておかなければならないとのことであった。小学校の場合は、音楽教育を取り入れることを望んでいるとの回答であった。

これらの要望に応じて、韓国学校を正規学校として作るかどうかアンケート調査をしたことがある。正規学校を設立することを賛成する親が大多数であったが、子どもを通わせる考えはないという親も多かった。外国で生活しているため子どもには英語を身に付けさせる必要があるからというのが理由である。

2003年2月現在では、10クラス（幼稚園2、小学校3、中学校2、高校2、大学進学特別クラス1）に編成され、約200人の生徒が通っていた。数学の特進クラスも開講されるようになった。フィリピン生まれの子どもたちも増え、国際結婚の家庭に生まれた子ども

たちも通うようになった。さらなる文化教育も重視している。

コリアンの親にとって、子どもの教育は深刻な問題である。フィリピンで生活しているこの機会に英語を学ばせたいと親たちは考える。平日はフィリピンの学校か、インターナショナルスクールに通っている子どもたちは、母語を使う機会もあまりなく、歴史を学ぶ時間はほとんどない。そのため、親世代との価値観のギャップが生まれ、子どももまた、自分がコリアンであるという意識を持ちにくくなる。将来、韓国の高校、大学へ進学することを見据えた場合、特に母語の習得と受験勉強が必要になる。

たとえ、家庭内では韓国語を使用することを徹底しても、子どもたちにとっては、日頃、学んでいる英語のほうがより流暢に駆使できるようになり、兄弟姉妹の会話では英語しか使わない。平日は現地の学校に通い、習い事もして、週末には韓国学校に通うことが子どもたちにとっては、負担になっているのが実情である。母語の習得がままならないため、韓国学校の授業を理解できず、ついていくことのできない子どもたちもいる。

1997 年のアジア通貨危機以後、親たちは韓国本社からの撤退通知のため、帰国を余儀なくされた。英語教育を重視していた子どもたちの学業も中断することになった。また、2000 年以降、特にキリスト教宣教師によって、週末に開校される韓国学校の設立が増加した。ケソン、パラニャケ、バギオ、カビテ、アンティポロなどにあり、フィリピン教育省によって正式に認可された学校（幼稚部から高校まで）も開校されるようになった。同時に、子どもたちが拡散し、マニラの韓国学校の生徒数が減少することになった。

韓国学校は、教師と母親たちの願いによって支えられ、37 年間の歴史を刻んできた。2003 年には遂に、韓国の義務教育課程と同様の正規学校を開設するため、韓人会の幹部メンバー、校長らを中心に財団理事会が結成された。建設予定地も確定した⁽²⁷⁾。コリアンにとって長年の課題であった教育の充実化は、校舎建築に向けて具体的に動き始めたのであった。

第 6 節 コリアン・ディアスポラ社会内部の関係の変化——国際結婚をしたコリアン女性との共存へ

1. コリアン・ディアスポラ社会内部の変化

このように、コリアン・ディアスポラ社会において、あらゆる社会組織の形成とそれとともに、コリアン個々人の生き方の変化がみられる。ではここで、コリアン・コミュニティ内部のコリアン同士の関係の変化について考察してみたい。

ここで注目されるのは、コリアンの中のマジョリティ（コリアン同士の結婚をした人々）が、コリアンの中ではマイノリティである国際結婚をした人々に対する意識の変化がみられることである。

フィリピン在住の国際結婚の流れができたのは、1950 年の朝鮮戦争を機に国際結婚をした人々によるものである。フィリピン人軍人や技術者と国際結婚をしたコリアン妻を対象に調査をおこなった Kim, Sung Chul (1979) の研究がある（*Study of Biculturation of the Korean Wives of Filipino husbands Residing in Metro Manila Area*, University of the Philippines, MA thesis, Asian Studies).（「マニラ首都圏在住のフィリピン人夫を持つ韓国人妻の二文化に関する研究、フィリピン大学大学院修士論文」）。

この研究によれば、次のような指摘がある。「フィリピンに滞在しているコリアンは、国際結婚を異族結婚とみなし、異民族の血が混ざることが忌避する傾向がある。そのためフィリピン人と結婚したコリアン妻たちを同民族のコリアンとみなさない。その時代、両者には精神面で近寄りがたい壁が存在しており、相互に交流するという関係はほとんど形成されていない。」

1970 年代に、国際結婚をしたコリアン妻たちによって、「母親会」という相互扶助を目的とする組織が結成された。韓国社会は、儒教思想の影響から、家系に他民族の血が混ざること好まず、国際結婚に対する意識は否定的な時代でもあった。

Kim (1979) の論文が完成してから既に 20 数年の歳月がすぎ、フィリピンのコリアン・ディアスポラ社会には、国際結婚に対する変化がようやく現れている。

2001 年の婦人会役員では、初めて国際結婚をした女性が会長として就任し、婦人会主催によって、国際結婚の家族との交流会が開催された。そして、2002 年、「韓国・フィリピン家族協会（Kor-Phil Family Association Inc.）」が結成された。

国際結婚をした彼ら、彼女たちが自ら社会組織を結成することによって、マジョリティのコリアン・ディアスポラ社会の中に、自分たちの存在をアピールできるようになったのである。組織結成の当初から、会員たちは単なる親睦会の機能しかない団体として、コリアン・ディアスポラ社会に判断されることは避けたかった。存在感を強め、格式を高めるために、2003 年 2 月現在、証券取引委員会（Security Exchange Commission）から、非営利団体として認められたところであった。

社会組織として動くことによって、コリアン社会において最大の組織である「韓人会」との交流が発展するようになった。国際結婚をした人々が、フィリピン人社会とコリア

ン・ディアスポラ社会の接点を結ぶ紐帯となる役割も果たし、相互に顔が見える関係づくりをはじめられるようになった。

1970年代から、国際結婚をしたコリアン妻たちを支援してきた1人のコリアン男性がいる。彼は、「比韓文化財団」の会長でもあり、「韓国・フィリピン家族協会」を設立した際の発起人でもある。また、韓人会の会長職のときには、韓国とフィリピンの文化的側面からの交流を最初にはじめた人物である。彼は当初、フィリピンに留学のためにきた。以下は彼の語りである。

[事例1] 50代、男性、旅行会社経営、フィリピン滞在歴26年

私の両親はクリスチャンで、私の代で3代目のクリスチャンですよ。私は大学では神学科に入学しました。私は1977年に、フィリピンの大学に留学しました。留学中は心理学を専攻して、カウンセリングの勉強をしました。これは、アジア・クリスチャン大学協会（Asian Christian University and College Association: ACUCA）のメンバーとして留学することができました。

フィリピンに来てからすぐに関心を持ったのは、フィリピン人と結婚をした婦人たちのことです。たいへんな暮らしをしていましたよ。この婦人たちのための組織である「母親会」の結成に私はかかわりました。私はキリスト教の信者でもあるので、社会的なことに関心を持っています。社会の中で、より困難な生活を余儀なくされている人たちの立場で考えて生きようとしてきました。

留学を終えた後、韓国へ戻らず、フィリピンで旅行会社を経営しながら生活してきました。私たちはフィリピンに暮らしているのだから、フィリピンを理解しないといけませんでしょう。フィリピンに暮らす韓人（コリアン）たちは、自分の生活で忙しいのですよ。お金を稼ぐことで精一杯ですよ。韓国とフィリピンの文化交流をしようという意識を持つ人はそう多くはありません。

このようなことは誰かがしないといけないと思いました。文化交流によって、お互いに知り合おうと考えたのです。私が韓人会の会長職になった時から始まりました。

2001年には比韓文化財団というのを結成しました。妻とは、フィリピンで出会いました。日本でも暮らしたことがある、中国系韓国人です。妻は、2001年に、婦人会の会長になったので、私たち夫婦が協力して、婦人会と比韓文化財団主催の国際結婚をしたカップルを対象に行事を開催しました。それがきっかけとなって、「韓国・フィリピン

家族協会」が設立されたのですよ。

こうした、コリアン同士で結婚をした人々と、国際結婚をした人々との間には、区別化する動きが潜在的にあった。しかし、国際結婚をした人々が、その仲介役になり、相互のつながりを持つことができるよう変化しているのである。

「韓国・フィリピン家族協会」の2代目の会長（コリアン男性）は、1960年代に父親の仕事のためフィリピンに来た人である。彼は父親の異動に伴い、フィリピンのほか、ネパール、ミャンマーなど、思春期にアジア各国で暮らした経験を持っている。

[事例2] 40代、男性、旅行会社経営、フィリピン滞在歴25年

私は釜山で生まれました。ソウルに引っ越してからは10年間暮らしました。1974年に父親の仕事のため、フィリピンに来ました。私が11歳の時ですよ。父はアジア開発銀行（ADB）で働いていました。父の仕事の関係で、マレーシア、スリランカ、シンガポール、ビルマでも暮らしました。今はミャンマーと言うでしょう。とにかく東南アジアの国々をたくさん移動しましたよ。1年とか、6ヶ月間といった期間で他国へ移動するため、私の教育上の問題が生じました。それで、ひとつの学校に継続して通うことができるように1978年以降は母と私がフィリピンに残りました。父は、プロジェクトが終わればフィリピンに戻ってきて、また他の国へ行くという繰り返しでした。ADBの本部がフィリピンにあるので、父はプロジェクトが終われば必ずフィリピンに帰ってきました。

彼は、大学進学時にはアメリカへ留学した。フィリピン帰国後、働きながらフィリピンのロータリークラブで社会活動も始めた。そこで妻となるフィリピン人女性と出会った。彼は、朝鮮戦争時にフィリピン人と結婚したコリアン女性と子どもたちについて次のように語っていた。

朝鮮戦争時に国際結婚をしたコリアン妻たちはたいへんな暮らしをしていた人も多いですが、その子どもたちはまた韓国人でもなく、フィリピン人でもないと言われ、人種的な差別を受けていたと聞いています。1970年代といえば、韓国はまだ貧しい時代でしたから、経済的な格差からそのような立場だったのでしょう。

このようにコリアン・ディアスポラ社会からだけでなく、フィリピン社会からも特に国際結婚をした子どもたちは、人種的な差別を受け、たいへんな苦勞をしていた時代があった。

それが現代では、フィリピン在住のコリアンをみると、年々、国際結婚をしている人々が増え続けている。非営利団体としてこのような社会組織が活動することによって、具体的に目に見える活動がはじめられることとなった。韓国語をほとんど解さない子どもたちへの韓国語教育がおこなわれることはまた、将来、韓国語をいかした職業に就くというチャンスをもたらすことになる。国際結婚をした人々とその子どもたちが、コリアン・ディアスポラ社会に受け入れられ、また、フィリピン社会との仲介役となることによって、韓国の伝統的な意識を変容させる契機ともなっているのである。

では、次に、朝鮮戦争時にフィリピン人と国際結婚をしたコリアン妻のライフ・ストーリーから、コリアン・ディアスポラ社会内部の変化を考察してみたい。

2. 国際結婚をした女性を受け入れる家父長制意識の変化

〔事例3〕70代、女性、在フィリピン29年

筆者はAさんに、2003年2月に韓国婦人会によって開催された旧正月のお祝いの席で出会った。会場は、マカティ市内のコリアン・タウンにある韓国レストランであった。

フィリピン在住29年を迎えたという彼女の姿は、韓国語、日本語に加え、英語もフィリピン語も流暢に駆使し、表情もみるからにフィリピン人女性のようにであった。彼女は、流暢な日本語を使って次のように話した。

フィリピンに1974年に来たのですよね。フィリピンに来てから、韓国の愛国歌（国歌）を歌ったことがありませんでした。フィリピンに来てから30年間、歌わなかったのです。機会もないし、忘れちゃったし。だから今日、愛国歌を歌って、感慨無量。それと今日、韓国の婦人たちと会い、フィリピン人と結婚した婦人たちにも会って、感慨無量で涙が流れました。嬉しくても涙が流れ、哀しくても涙が流れました。私は若い時にこの国に来たのに、今はおばあさんになったねえと泣いたの。その気持ち分かりますか。日本で13年。韓国で25年。ここで30年。

彼女のライフ・ストーリーは次のようである。Aさんは、朝鮮半島が日本による植民地時代の真っ只中であった1930年代に生まれた。Aさんが幼少の頃、当時、東京の大学に留学中のおばさんから、日本に来るようにすすめられ、Aさん一家は日本に渡ることになった。学齢期に達すると、第三国民学校に入学し、日本の教育を受けることになった。彼女は当時のことを次のように話している。

第三国民学校は日本人ばかりで、韓国人は私と姉だけでしたよ。よく勉強しましたよ。夏休みにはホームワーク（宿題）がありました。虫捕りもして、バタフライ（蝶々）を採りましたねえ。ああ、懐かしいですねえ。春の小川はさらさらいくよ、という歌もうたいましたよ。

国民学校5年生か、6年生の夏休みに、先生と一緒に柳の木を植えたのですよ。その木にね、サインしたのですよ。私が韓国へ帰ってからも、大きくなっただろうなあと、時々、その木のことを思い出していました。機会があれば、国民学校へ行って、その木を見たいなあと思い続けていました。大東亜戦争の時代のことだから、もう木はないだろうとも思いましたけどね。1964年の東京オリンピックが開催された時に、日本に住んでいるおばさんに呼ばれて、(20年ぶりに)、その国民学校にも行きました。そうしたらあったのですよ。木がありました。私を書いた字もありました。驚きました。木は大きくなっていましたからね。それを見て、泣きましたよ。懐かしくて。懐かしくて。人間だったら、死んでいないけれど。やっぱり自然はあったと思って。

Aさんは、第二次世界大戦終結後、韓国へ帰国することになった。高校にも進学した。朝鮮戦争が勃発してからは、駐韓米軍基地内でタイピストとして働くことになった。その基地内で、建築家として仕事をしていた、生涯の伴侶となるフィリピン人男性と出会うことになった。

韓国で1961年に国際結婚し、1974年にフィリピンに移住することになった。夫のことを次のように話している。

お父さん（夫）は、教育的な良い家庭で育っていて、良い大学を卒業していて、教養のある人でした。私は他のフィリピン人と結婚した婦人（韓国人の）よりも、そんなに苦勞しなかったのですよ。

フィリピン入国後、まもなくして夫はサウジアラビアへ出稼ぎに行くことになった。この時すでに2人の子どもをもうけており、Aさんは子どもたちのために両親がそろってフィリピンで一緒に住むことを願ったが、夫を引き止めることはできなかった。

1970年代というと、韓国の建設業者が大挙して中東へ企業進出していた時期でもある。Aさんの夫は韓国語も使いこなすことができるようになっていたため、サウジアラビアでは韓国企業に就職し、建築家としての専門をいかすことができた。安定した収入を得ることができ、2人の子どもをインターナショナルスクールに入学させることができたという。高校卒業後は2人ともアメリカの大学へ進学し、今は独立している。

フィリピン移住後、Aさんにとっての第一の転機は、1987年に夫が亡くなったことから始まる。当時を次のように語っている。

お父さんが死んで、とても苦労しましたの。でもゴッド（神様）が私によい職場をくださいました。（外資系の）航空会社に就職して、日本語の通訳をしたのですよ。1990年頃から韓国人は自由に海外旅行できるようになったので、急にたくさんの韓国人が世界中に行くようになりました。航空会社に通訳者として就職した人はみんな20歳前後の若い人たち。でもみんな日本語はできないのですよ。私はフィリピン語もできるし、韓国語、日本語、英語もできるから、航空会社に就職してからすぐにマネージャーにまでなりました。韓国人だから正直だし、熱心に仕事をするから、選ばれたのです。いい生活をすることができましたよ。

夫が亡くなっても、Aさんは語学力をいかし、安心してフィリピンで生活を送ることができた。ところが、二つめの転機が訪れることになった。1997年にアジア諸国の経済を不安定にさせたアジア通貨危機により、その航空会社の利用者数が激減し、撤退することになったのである。その後、無職となったが、Aさんは、熱心なキリスト教の信者で、2003年2月の時点では、教会生活を中心としながら、ボランティア活動に参加しているとのことであった。

Aさんは、筆者に自身の人生を語りながら、日本に対する望郷の念を示す次のような言葉も話していた。

私が韓国でずっと今まで育っていたらこんな考えはないと思いますね。どうして私が

日本に住むのではなく、フィリピンで住むことになったのでしょうか。フィリピンで住むことになって、ここでは、いつも日本人に会うし、日本語の看板を見たり、日本のラーメン屋を見ると、とても日本が懐かしくて、とても懐かしいのです。

また、自分の人生を回顧して、国際結婚について次のように語っていた。

日本人は国際結婚をそんなに悪くみないでしょう。韓国人はそうではないのですよ。軽蔑するのです。正直に話しますと、そういうところがあるのです。

この言葉から、Aさんがフィリピン社会に適応しながら暮らすと同時に、フィリピンに形成されたコリアン社会から隔絶されていた様子を垣間見ることできる。

しかし、彼女がフィリピンで懸命に育児期間を過ごし、夫が亡くなってからは通訳者として経済的にも自立した時代と、現在とではかなりコリアン社会の様相に変化がみられる。それは、上記で説明したように、韓国・フィリピン家族協会の結成や、婦人会や韓人会とのつながりがある。コリアン・ディアスポラ社会において、国際結婚をしたコリアン女性の存在が明確に認められ、暮らしやすくなっているからである。

Aさんは、晩年をアメリカかフィリピンのどちらかで暮らすことを考えている。アメリカには、アメリカ人女性と国際結婚した息子がいる。フィリピンには娘がいる。

私は今、アメリカとフィリピンを行ったり来たりしていますよ。フィリピンは住むにはいいところですよ。お金が少しでも、なくても暮らすことができます。寒くないです。英語を使うことができますし。フィリピン人は外国人をととても大切にしてくれます。おいしい食事も毎日できますし。時々、苦勞もありますけれど、私が信じているイエス・キリストの苦勞と比較すれば、私の苦勞は何でもないのですよね。神様を信じて生きていますから、私は幸福です。私の全てを神様に捧げています。そうすれば、神様は私にどうすればよいのか応えてくださいます。私は人を羨ましく思うことはないし、私が持っているものは、貧しい人に与えたいと思っています。

彼女の人生を通じて、韓国、フィリピンの現代史がみえてくる。フィリピンでの生活は長いものの、コリアン・ディアスポラ社会とほとんど接触を持つことのできなかつた国際

結婚をしたコリアン女性たちの切なさが浮かび上がる。

コリアン・ディアスポラ社会は、儒教的な考えから国際結婚をした女性たちを特別視してきた。より弱者の立場にいる彼女たち、また子どもたちの存在に無関心であった。

前節で述べたように、社会組織の活動は、フィリピンにおいてコリアンが安全に安定した暮らしを確保するという目的がある。と同時に、Aさんのような立場の人々による社会組織活動によって、コリアン・ディアスポラ社会内部の韓国伝統的な価値観が変革されてきたのである。

第7節 フィリピンで築いた新たなコリアン・ディアスポラ社会

本章では、ホスト社会で直面している諸問題に対し、コリアンがいかに解決し、異文化に適応しているのかを、社会組織の一形態であるアソシエーション活動から検討した。

以上のことから、コリアン・コミュニティ内部においては、アソシエーションを結成することによって、コリアン同士のつながりを強固なものにし、個別の相談の際にも、フィリピン政府当局との仲介役となり、自助組織としての機能を果たしていることがわかった。

外部的には、フィリピン社会にコリアンが存在していることを示すためにボランティア活動を積極的におこない、フィリピン人との紐帯関係を築き、良きイメージを形成している段階といえるだろう。このような活動は、企業活動において、また、日常生活におけるコリアンに対するマイナスイメージを払拭するものになりつつある。コリアンのステレオタイプを打破しているのである。

外交レベル、民間レベルにおいて、コリアンが協力しあい、フィリピンに居住している華僑、アメリカ人、日本人、オーストラリア人など、多様なエスニック・コミュニティとも交流し、共存の道を探っている。コリアンは、フィリピン人の生活向上にも向けた活動を実践しており、コリアンの利益のみ追求しているのではない。そのことによってコリアンの生活圏内における立場を守り、安全枠を広げているともいえる。このようなフィリピン社会に開かれたコリアンの活動は、同民族同士のみが交流するような偏った閉鎖社会にはなりえない。

コリアンの場合、日本人の駐在員とは異なった形態のフィリピン生活である。日本人駐在員の場合、一時滞在者であるため、何年か滞在したあとに本国へ戻ることになる。その何年間かを無事に過ごすことができればいいのである。ところが、コリアンの場合は、商社勤務の形態よりも、中小企業の進出や自営業者の人数が多い。そうすると、期間が限定

されたフィリピン滞在ではなく、長期に渡る定住化となる。コリアンは、母国の民族性を保持しながら、フィリピン社会に順応し根をはるように生活をしていこうとする意思が強い。

もう1つ指摘できるのは、コリアン・ディアスポラ社会内部の伝統的家父長制の価値観を揺るがす動きである。韓国の社会規範では、国際結婚を異なった民族の血が混ざることからなかなか受け入れられないものであった。国際結婚をしたコリアン女性たち、子どもたちは、コリアン・ディアスポラ社会とフィリピン社会の板ばさみの中にいたのであった。国際結婚も増えていく時代にあって、異民族との結婚を忌避する韓国の伝統的な思考も変容しているのである。また、国際結婚をした人々による社会組織活動が、ホスト社会とコリアン・ディアスポラ社会を仲介する役割を果たし、問題解決の糸口となりえているのである。

コリアンにとってのアソシエーション活動は、フィリピンにおけるアイデンティティ構築の場であり、危機を克服する手段でもある。かつ、次世代へ民族心と愛国心を継承する役割も担っている。

2004年には、韓国・フィリピン修交55周年を迎えた。この半世紀の間、コリアンはフィリピンに定着し、共生のあり方を模索し続けてきた。各種に渡る組織的なアソシエーション活動はフィリピンにおけるコリアンの定住化を促し、フィリピン人、外国人との共存を達成したモデルの一事例といえるだろう。

フィリピンにおけるコリアン・コミュニティをみると、各協議会の運営委員が男性中心ではあるが、韓人会の組織においては、女性役員が起用されるように変化している。そこから見えてくるのは、ジェンダーの視点から再検討する必要性である。アソシエーション活動によって、ジェンダーのあり方が再定義され、新たなジェンダー関係が創出される基盤ができつつあるのではないだろうか。コリアンの男性、女性の意識が相互作用することによって、それぞれの生き方が変化し、移民社会に創り出された韓国本国とは違うジェンダー関係が形成されているのではないだろうか。このことについては、次章で考察する。

① 比韓文化財団会長へのインタビューによる。2001年7月6日、12日、20日および2003年1月14日～17日、21日、24日、29日に会長の職場を訪ねた。

② 同上。

③ 同上。

④ 1993年7月に韓国ソウルにある半導体工場でおこなった、幹部職員へのインタビュー

による。

(5) 「対フィリピン EDCF 支援現況 1997 年 4 月 25 日現在」駐フィリピン韓国大使館より入手した資料による。

(6) 「対韓国政府によるフィリピンへの無償援助 1997 年 4 月 25 日現在」駐フィリピン韓国大使館より入手した資料による。

(7) 2001 年 7 月、フィリピン貿易人協議会会長へ会社にて、インタビューをおこなった。

2001 年 7 月 19 日、「母親会」結成当時の会員へのインタビューによる。インタビューは、彼女が経営する韓国レストランにておこなった。

2001 年 7 月 11 日、商人協議会会長へ会社にて、インタビューをおこなった（元々、料食業協議会という名称であったが、後に商人協議会に変更した）。

2001 年 7 月 18 日、駐フィリピン韓国商工会議所会長へ会社にて、インタビューをおこなった。

2001 年 7 月 20 日、支商社協議会会長へ会社にて、インタビューをおこなった。

2001 年 7 月 11 日、建設協議会会長へ会社にて、インタビューをおこなった。

2001 年 7 月 14 日、韓人学生協議会の会長（女性）にマニラ市内の喫茶店でインタビューをおこなった。

(8) 2001 年 7 月および 2003 年 2 月、コリアポストのスタッフへ事務所にて、インタビューをおこなった。

(9) 2001 年 7 月 7 日、マニラソウルの社長に、2003 年 2 月 7 日にはマニラソウルの副社長（女性）へのインタビューによる。それぞれ、事務所でインタビューをおこなった。

(10) 2001 年 7 月、ニュース・ゲートの社長に、事務所でインタビューをおこなった。

(11) 2001 年 7 月および 2003 年 1 月に、比韓文化財団会長へ会社にて、インタビューをおこなった。

(12) 2001 年 7 月 11 日、商人協議会会長へ会社にて、インタビューをおこなった。

(13) 2001 年 7 月 7 日、在比旅行社協議会会長へ旅行会社にて、インタビューをおこなった。

(14) 2001 年 7 月 18 日、商工会議所会長へ会社にて、インタビューをおこなった。

(15) 2003 年 1 月 30 日、婦人会の幹部スタッフへのインタビューによる。彼女の職場でおこなった。同年 2 月 19 日、駐フィリピン韓国商工会議所の会長へのインタビューによる。彼の職場にておこなった。彼は、「韓国貿易人協議会」の会長職にも就いていたことがあり、当時のボランティア活動についても話をうかがった。

(16) 2001 年 7 月 15 日、カビテ投資家協議会会長へマカティ市内の喫茶店にて、インタビューをおこなった。

(17) 2003 年 1 月 15 日、愛の家でシスターへのインタビューによる。

(18) 2003 年 1 月 19 日、奉仕活動に参加しているキリスト教信者へのインタビューによる。筆者もボランティア活動に同行した。

(19) 2003 年 1 月、2 月に駐比宣教団体協議会の会員へのインタビューによる。

(20) 2003 年 1 月、2 月に韓人会会長へ韓人会事務所にて、インタビューをおこなった。

(21) 2003 年 2 月 14 日、仏教徒信者へのインタビューによる。彼女の職場でおこなった。

(22) 2001 年 7 月および 2003 年 1 月に、比韓文化財団会長へ会社にて、インタビューをおこなった。

(23) 以下の内容は 2001 年 7 月 5 日、韓人会事務所にて、事務局長へのインタビューによ

る。

(24) 2003 年 2 月 7 日、会議に出席した婦人会の元会長へのインタビューによる。彼女の自宅でおこなった。

(25) 2001 年 7 月 5 日、韓人会会長へ事務所にて、インタビューをおこなった。

(26) 以下の内容は、2001 年 7 月 21 日、韓国学校にて、校長先生へインタビューをおこなった。

(27) 2003 年 1 月 14 日、韓人会事務所にて、韓国学校財団理事長へインタビューをおこなった。

第6章 夫婦にみるジェンダー関係の変容

これまでの章で、フィリピンにおけるコリアンの生活世界を理解するために、歴史的な背景を整理し、かつ、フィリピン入国後の人口動態、企業進出、社会活動等について、全般的な分析と考察を重ねてきた。本章ではさらに、個々のコリアンのレベルに視点を移し、彼ら、彼女らのジェンダー関係がどのようにみられるのか、またどのように変容してきたのかについて、具体的にみてみたい。

第1節 調査の方法について

1. インタビュー対象者の選定

インタビューは3つの社会組織から協力を得られた。婦人会（24人）と駐比宣教団協議会傘下の師母分科会（9人）と韓国学校のPTA（4人）である。師母分科会というのは、宣教師夫人たちの会である。韓国学校のPTAからは4人であったが、実際は、婦人会の会員24人中7人が、子どもを韓国学校に通わせている。また、既に卒業した子どもたちもいる。

本研究は、夫婦を対象とするものであるため、既婚女性が会員である社会組織を通じて、調査の協力を依頼した。この3つの社会組織は、コリアン・ディアスポラ社会において、結成から長い歴史があり、コリアン女性たちにとって情報収集や交流の場として重要な位置にある。快く、調査依頼を引き受けてもらうことができた。

婦人会には、2003年2月、婦人会会長の協力のもと、筆者はマカティ市で開催された旧暦の新年会に参加することができた。そこで知り合った宣教師夫人を通じて、後日、師母分科会のメンバーにもインタビューをおこなった。また、毎週土曜日に開校される韓国学校では、校長先生（男性）と教頭先生（女性）の協力のもと、PTAのメンバーを紹介してもらった。

調査の協力を得られた方には、氏名、住所、電話番号、家族構成など、基本的なプロフィールの記入をお願いした。常に配偶者のプロフィールも同時に尋ねた。婦人会のメンバー2人には、新年会の場でインタビューをおこなうことができた。他は、後日、個別に電話をしてインタビューの日を決定し、自宅や職場を訪問した。男性の場合は、職場及び社会組織の事務所や自宅を訪ねた。

師母分科会へのインタビューでは、宣教師たちが大勢居住しているアンティポロ市へ出

向いた。マニラ首都圏からバスで1時間ほどのところに位置している。婦人会の新年会で知り合った宣教師宅にメンバーたちが集まり、個別にインタビューをおこなった。韓国学校では、子どもたちの授業が終わるのを待っている母親たちに、控え室となっている教室で個別にインタビューをした。

また、本章で対象とする男性については、社会組織の代表者や参加メンバー4人を選んだ。実際には、他数人の男性にインタビューをおこなったが、フィリピン入国時は独身者であった。ジェンダー関係の変容という場合、フィリピン入国前と入国後の変化をみる必要があるため、ここでは入国時に結婚している人を対象とした。

しかしながら、男女の人数に偏りがある。これまでの筆者のフィールドワークでは、韓国企業研究のため男性が対象者であった。ここでは、ライフ・ストーリーを聞き取るために、コリアン女性に重きを置いた。また、調査のための滞在期間の制限から、男女の人数を同じように合わせることはできなかったことも一つの理由である。

プロフィールは表1（112頁に掲載）のとおりである。41人の事例があり、男性4人、女性37人である。41人の中に、夫婦はいない。年齢は、30代から70代が対象となっている。女性4人がフィリピン人と国際結婚をしている。30代から70代と幅広いが、大半が40代、50代である。上記の団体のメンバーが40代、50代に集中しているため、必然的に協力者の年齢層がそのようになった。しかし、渡比した年代、職業が多様になるようにサンプリングには配慮した。2003年2月現在で、夫が亡くなっている方は3人いた。2人がフィリピン人で1人がコリアンである。入国前と入国後の夫婦関係の変化について話を聞くことができたため、その3人の女性も対象者とした。

表1 インタビュー対象者〔入国年度順に掲載〕(2003年2月現在)

	性別	年齢	入国年	日常生活での主な活動について
1	男	60代	1965	貿易業
2	女	60代	1974	飲食店
3	女	70代	1974	航空会社での通訳業を退職後、ボランティア活動
4	女	60代	1974	ブティック
5	男	50代	1984	広告業
6	女	40代	1984	宣教師
7	女	50代	1986	海運業
8	女	40代	1986	レンタルビデオ店、進学塾
9	女	50代	1986	専業主婦
10	女	50代	1989	食品店
11	女	40代	1989	宣教師
12	女	40代	1991	ホテル経営
13	女	40代	1991	専業主婦
14	女	40代	1991	宣教師
15	女	40代	1991	宣教師
16	女	50代	1991	韓国学校教師
17	女	40代	1992	韓国学校教師
18	女	40代	1992	宣教師
19	男	40代	1992	宣教師
20	女	50代	1993	専業主婦
21	女	40代	1994	宣教師
22	女	30代	1994	コリアンのエスニック・メディア紙
23	女	40代	1994	下宿屋、韓国レストランのパート等を経て、専業主婦
24	女	40代	1994	韓国語講師
25	女	40代	1994	花屋
26	女	40代	1995	美容師
27	女	40代	1995	宣教師
28	女	30代	1996	専業主婦
29	女	40代	1997	専業主婦
30	女	40代	1997	工事用重機、家電販売
31	女	30代	1997	韓国学校教師
32	女	40代	1998	宣教師
33	女	30代	1998	宣教師
34	女	40代	1998	専業主婦
35	女	30代	2001	下宿屋
36	女	40代	2001	大学教授
37	女	40代	2001	専業主婦
38	女	40代	2002	専業主婦
39	女	30代	2002	専業主婦
40	女	40代	2002	専業主婦
41	男	50代	2003	飲食店

注：入国年の順に並べた。

2. 面接の方法

インタビューのはじめに、この調査の内容を説明し、ノートにメモを取ることや会話の内容をテープに録音してもよいか許可をもとめた。この面接の内容は学术论文の執筆に使用するものであることを先に説明した。使用した言語は、調査対象者の母語である韓国語である。日本の植民地時代に学齢期を過ごした女性 1 人は日本語もできるため、彼女自ら日本語も使用した。また、彼女は国際結婚をしているため、英語、フィリピン語も堪能である。会話の中には、韓国語、日本語、英語、フィリピン語といった多言語が混ざり合うものとなった。一人のみ録音は断られたが、ほかはすべて録音の許可をもらい、後に筆者が日本語に逐語訳した。

一人あたり、2 時間から 3 時間ほどかけて、渡比前のことから、フィリピンでの生活および配偶者関係を含む多様なライフ・ストーリーを語ってもらった。

第 2 節 調査対象者のプロフィール

ここでは、41 人へのインタビュー記録に基づいている。しかし、本章では夫婦を対象としているため、プロフィールについては、夫婦 82 人とその子どもたち 87 人について紹介する。

1. フィリピン入国前の生活

(1) 出生地

出生地をみると、82 人のうち 79 人が韓国生まれで、3 人が分断以前の北朝鮮生まれである。この 3 人は、1950 年に始まった朝鮮戦争の戦渦の中、必死に南へ逃れて、韓国で育った人たちである。国際結婚をした人の場合は、相手のフィリピン人男性 4 人ともフィリピン生まれである。

子どもたちの出生地について見ると、その総数 87 人のうち、韓国生まれ 69 人、フィリピン生まれ 15 人、アメリカ生まれ 3 人である。韓国生まれであっても、みな乳幼児期から 10 代にかけてフィリピンに渡った子どもたちである。思春期をフィリピンで迎えており、特に乳幼児期にフィリピンにきた子どもたちの場合は、自分の母国はどこなのか悩むアイデンティティの問題に直面している。これは、親世代の深刻な悩みの一つとなっている。

(2) 最終学歴

男性の最終学歴は、中卒 1 人、高卒 1 人、大卒 23 人、大学院修士課程修了 8 人、博士課程修了 4 人である。国際結婚相手のフィリピン人男性は 4 人とも大卒である。

学科は、建築学、貿易学、林学、土木設計学、機械工学、経営学、物理学、水産学、教育学、神学などである。神学校へ進学した男性の場合、4 年制の大学卒業後、牧師になることを決めて、大学院から神学の勉強をはじめた人もいる。

女性の最終学歴は、高卒 3 人、専門学校卒 2 人、大卒 29 人、大学中退 1 人、大学院修士課程修了 2 人、大学院博士課程修了 1 人である。また、フィリピン入国後に大学院修士課程に入学し、神学の勉強をしている女性が 3 人いる。

女性たちが卒業した学科は、数学、英文学、地理学、生物学、音楽、食品栄養学、教育心理学、看護学、社会福祉学などである。

国際機関に勤務していた夫の赴任先がフィリピンからミャンマーに異動していたことがあった。滞在期間中、ミャンマーの大学に入学し、家政学を修めた女性もいる。

(3) 結婚の期間と時期

結婚をした時期をみると、1960 年～1964 年までには 4 組、1965 年～1969 年は 1 組、1970 年～1974 年は 2 組、1975 年～1979 年は 3 組、1980 年～1984 年は 11 組、1985 年～1989 年は 12 組、1990 年～1994 年は 6 組、1995 年～99 年は 2 組であった。

30 歳を超えて結婚した人をみると、男性は 5 人（そのうち 1 人はフィリピン人）、女性は 2 人であった。夫婦とも同年齢であるか、夫のほうが 1～3 歳年上である。大きな年齢差は特にない。女性のほうが年上のケースは 3 組ある。2 組は 1 歳差、もう 1 組は 8 歳離れている。出会いの場は、大学、職場、お見合いの他に、幼なじみというものもある。また、1990 年以降、韓国に外国人労働者が急増したが、工場で働いていたフィリピン人男性と出会い結婚したケースもある。

婚姻の期間は次のようである。5～9 年は 5 組、10～14 年は 3 組、15～19 年は 15 組、20～24 年は 9 組、25～29 年は 3 組、30～34 年は 1 組、35～39 年は 2 組、40～44 年は 3 組であった。ここで対象としているコリアンの場合、婚姻期間が 15 年から 24 年の枠内の人が多い。

1960 年代、1970 年代に結婚した人々が育った時代背景は次のようである。日本の植民地時代に乳幼児期を過ごし、日本語教育を受けた世代である。第二次世界大戦の終わりと

同時に、日本の統治下から解放されたことを経験し、続く 1950 年 6 月 25 日に勃発した朝鮮戦争の時期に思春期を迎え、混乱の中を生き抜いてきた人々である。

1980 年代に結婚した人々が育った時代背景は次のようである。朝鮮戦争の前後に乳幼児期を過ごし、韓国が独裁政権の中、外国資本を呼び寄せ輸出指向型による経済発展が推進された高度成長期（1970 年代）に青年に達した人々である。

そして、1990 年代に結婚した人々の場合では、韓国が民主化に向けて激動し、学生によるデモが活発におこなわれている時代に、乳幼児、思春期を過ごしている。この時期の人々は、女性の大学進学率が著しく高まり、女性運動が本格化した時代に大学に通いはじめた。また、時代が大きく変動し、成人期には海外から外国人労働者が流入し始めるようになった時期でもある。韓国で暮らしながら、外国人労働者との出会いも増え、国際結婚も急増し始めた頃である。

（4）出国前の職業等

出国前の韓国での職業をみると、男性の場合は会社員が 13 人である。海運業、通運業、貿易業、建設業、合板会社、銀行員などである。自営業は 12 人いる。製造業は半導体、看板、家畜飼料などがある。他に、物産店、飲食店、ブティックの経営者や靴メーカーの代理店もある。宗教関係では、牧師 7 人、伝道師 1 人である。他に、国際機関 2 人、研究所 1 人、教師 1 人、学生 2 人であった。

国際結婚をしたフィリピン人男性 2 人の場合は、朝鮮戦争時に米軍関係の建築会社でそれぞれ建築技師として働いていた。職種は多岐にわたるが、ホワイトカラー系が多い。

女性の場合は、専業主婦が最も多く 14 人、次いで牧師夫人 5 人、伝道師 2 人である。会社員は 3 人いる。自営業としては、美容師、飲食店、ブティック、貴金属卸売業の他に、幼稚園や音楽学校の経営者もいる。中学、高校の教師は 4 人いる。語学学校での講師もいる。国家公務員、研究所の研究員は 1 人ずついる。結婚前まで看護師として働き、結婚後、牧師夫人になった人もいる。また、フィリピンに進出している韓国企業の製品を検査する検査官の仕事をしていた女性もいる。彼女の場合は、韓国にいた頃から、フィリピンへ定期的に出張していた。

また、国際結婚をした 4 人のうち 2 人の女性は、朝鮮戦争時に、米軍関連の仕事に就いていた。1 人はタイピストとして働いた。もう 1 人は、Post Exchange（略語は P.X. 陸海空軍の厚生機関、ナーフイともいう。酒・売店・娯楽施設などを運営）で働いていた。

P.X.で働いていた女性の場合、夫の勤めていた建築会社がベトナムへ進出することになり、夫も派遣されることになった。ちょうどベトナム戦争の時であり、彼女はベトナムに派兵されたコリアン軍人やビジネスマンを相手に韓国料理の店を開いた。幼い息子は近所の友人に子守を頼んだ。ベトナム戦争終結後はコリアンの客が少なくなったため、店を閉じて、夫婦そろってフィリピンへ行くことにした。

2. フィリピンでの生活

(1) フィリピンへの入国年

フィリピンへの入国年は次のようである。まず、男性は次のようである。1965～1969年は1人、1970～1974年は3人、1980～1984年は2人、1985～1989年は5人、1990～1994年は14人、1995～1999年は10人、2000～2003年までに6人であった。

女性の場合は次のようである。1965～1969年は1人、1970～1974年は3人、1980～1984年は3人、1985～1989年は4人、1990～1994年は14人、1995～1999年は9人、2000～2003年までに7人であった。

女性は大部分が家族一緒にフィリピンに入国している。しかし、有職者の場合、仕事の都合や子どもたちの教育のこともあり、夫がフィリピン出国後、1～2年以内にフィリピンへ行く例もある。また、子どもと夫が先に入国している例もある。

男女全体を滞在年数でみると次のようである。1年以下2人、1～4年13人、5～9年26人、10～14年20人、15～19年12人、25～29年3人、30～34年1人、35～39年2人である（ここに3人の亡くなった男性は加えていない）。

(2) インタビュー対象者の年齢

2003年2月現在の年齢は次のようである。男性の場合、30～34歳は1人（フィリピン人）、35～39歳は3人、40～44歳は11人、45～49歳は13人、50～54歳は4人（このうち1人はフィリピン人）、55～59歳は3人、60～64歳は1人、65～69歳は1人、70～74歳は1人である。2003年2月の時点までに、3人の男性は亡くなっていた。

女性の場合、35～39歳は6人、40～44歳は17人、45～49歳は10人、50～54歳は1人、55～59歳は3人、65～69歳は3人、70～74歳が1人である。男女ともに、30～40代が多い。

子どもたちの年齢はどうであろうか。未就園の0～4歳は5人、学齢期に入る5～9歳は

14 人、10～14 歳は 18 人、15～19 人は 27 人である。

成人している場合は、20～24 歳は 10 人、25～29 歳は 4 人、30～34 歳は 2 人、35～39 歳は 6 人、45～49 歳は 1 人である。25 歳以上になると、結婚し育児期間の人々もいる。

(3) フィリピン入国後の職業等

フィリピン入国後はどのような職に就いているのであろうか。男性の場合、自営業は 14 人いる。韓国にいた時と同じ仕事に従事しているのが、半導体、家畜飼料製造、看板業、物産店、貿易業、建設業などである。

コリアン夫婦にとって、フィリピン入国後の大きな変化は、個人事業や自営業の場合にみられる。夫婦が一緒に仕事をするようになったことである。7 つの業種で 8 組の夫婦が経営している。妻は副社長である。海運業、看板業、家電と工事用の重機販売店、飲食店、食品店、またコリアン対象の新聞社など、夫婦が共同で経営している。国際結婚をした夫妻は、1974 年から韓国レストランを開業した。

また、元々は本社からの派遣でフィリピンに来たが、ビジネスチャンスを見つけたため早期退職して個人事業を始めた人もいる。

宣教師の場合も 10 組の夫婦が宣教活動をおこなっている。教派は様々である。また、アジア開発銀行で勤めていたが退職後、フィリピンに留まり、親子で旅行会社を営んでいるというケースもある。

本社から派遣された人は 4 人おり、業種としては、航空運送 1 人、銀行 1 人などである。他に、フィリピンの大学院に留学して、修士号と博士号を取得した男性は、韓国へ帰国後、大学の教授になった。

フィリピン人男性の場合は、次のようである。朝鮮戦争後、コリアンの妻と一緒にフィリピンへ戻った。中東へ韓国の建設企業進出が増えた時期に、彼は建築技師の専門と妻との生活で培った韓国語能力をいかして単身中東へ渡った。

また、スウェーデンで観光学を学んだ後、アメリカのレストランに就職したフィリピン人男性がいる。彼は、アメリカでコリアンの妻に出会い結婚した。フィリピン帰国後に、親から受け継いだホテルを営んでいる。貿易業に携わっているフィリピン人男性は、韓国在住のフィリピン人を対象に物品を販売している。

女性の場合は、上記の夫婦で自営業をしているということのほかに、次のようなものがある。まず、専業主婦は 10 人いる。教職は 5 人いる。その内訳は、韓国学校の教師 3 人、

フィリピン大学の助教授 1 人、国際結婚をした家族対象の韓国語講師 1 人である。

自営業は、花屋 1 人、美容師 1 人、ブティック 1 人、レンタルビデオ店と進学塾の 2 つを同時に経営している女性もいる。フィリピン人と結婚した女性は、航空会社での通訳職を退職後、ボランティア活動をしている。

(4) 同居家族およびフィリピン在住の兄弟、姉妹との関係

フィリピンでの同居人をみると、夫婦のみ、もしくは親子という核家族である。両親（夫側）が先にフィリピンで事業をしていたため、結婚後、フィリピンに来て同居をはじめたというのは 1 組ある。

また、母親（夫側）の介護のため、韓国から呼び寄せて同居しているのは 1 組である。母親が足の怪我のため寝たきりとなり介護を必要とする状況になったためである。フィリピン人の介護労働者を雇い、フィリピンで世話をすることにしたという。もし韓国で生活していたら、有職者の妻はとても介護はできなかったという。フィリピンだから、フィリピン人の介護労働者の手を借りて義母の世話をすることができるとのことであった。

また、弟が語学留学のため、短期間、同居しているという例もある。子どもの留学のために母子で入国した例もある。その場合は、父親は韓国で働き、生活費、学費をフィリピンへ送金するという役目に徹している。

同居ではないが、兄弟や姉妹がフィリピンで暮らしているとの答えは、わずか 2 人だけであった。1 人は、インターナショナルスクールに子どもを通わせたいという妹の願いを聞き入れて、フィリピンに妹親子を呼び寄せた例である。もう 1 人は、弟と同業種の製造業をそれぞれ経営しているという例である。

(5) 子どもたちの教育状況

親は子どもたちの教育に非常に熱心である。調査対象者の子どもの総数 87 人のうち、2003 年 2 月現在、在園、就学中の子どもたちは 70 人いる。そのうち、インターナショナルスクール（小、中、高）は 13 人、イギリス系のブレント・スクールは 2 人、アメリカ人宣教師によって設立されたフェイス・アカデミー在学中（小・中・高）は 17 人おり、合計 32 人である。学費は高くても、将来、米国へ留学させることを希望している親の場合、インターナショナルスクールを選ぶ傾向がある。

フィリピンの現地校に通っているのは次のようである。幼稚園 2 人、小学校 6 人、ハイ

スクール 10 人、大学は 7 人である。中国語も習得できるようにと、中国系の幼稚園 2 人、中国系の小学校 1 人がいる。合計 28 人である（他に 10 歳、8 歳の子どもがいるが、どの学校に通っているかは不明。この 2 人も人数に加えると、合計 30 人になる）。

また、米国の大学 1 人、大学院 1 人、韓国の中学 1 人、大学 5 人が在学中である。フィリピンのインターナショナルスクールを卒業し、米国留学後、現在は博士課程に在学中というケースもある。米国の大学在学者のうち 1 人は、父親の海外勤務によって、幼少期にパキスタン、タイ、フィリピンといったアジア各国で暮らした経験がある。

全般的に、フィリピン滞在中に高度な語学力を身につけて、米国や韓国の難関校を目指している。しかし、韓国のような過度な受験戦争とは違うと、親たちは語っていた。フィリピンには、将来の目標を見据えて、そのことに集中して勉強できる環境があると話していた。

母語習得に関していえば、土曜日のみ開校される韓国学校がある。しかし、週 1 回では韓国語を自由につかうには不十分とのことから、自宅で親が本の読み聞かせをしたり、韓国語の本を与えて、意識的に韓国語を使うようにほとんどの家庭では気をつけている。

フィリピン滞在中に、英語はさることながら、中国語も学ばせる親がいるのは、将来の選択肢を広げることができるよう、親が導いているのがわかる。しかしながら、フィリピンに暮らしながらもフィリピン語の習得についてはほとんどの場合、あまり熱心ではない。フィリピン語の能力がついても、職業選択の幅が広がるとは思っていないからである。

しかし、大多数のコリアンがそのように考えてはいるものの、自宅近くにある近所のフィリピンの子どもたちが通う小学校を選んだケースもある。その場合は、外国人はおらず、コリアンは 1 人だけである。その子は、英語はもちろんだが、まるでフィリピン人のように流暢なフィリピン語を習得している。

既に学業を終えた子どもたちをみると、米国の大学、大学院修了者が 6 人おり、米国で就職した者もいる。カナダの大学 1 人、フィリピンの大学、大学院は 3 人、韓国の大学、大学院修了者は 2 人いる。

男性 1 人は、父親が国際機関での現役時代、家族でマレーシア、スリランカ、シンガポール、ミャンマーで暮らした経験があり、アジア各国の社会情勢に精通している。

(6) 宗教

キリスト教を信仰している人が多い。家族そろってプロテスタントの信者は 28 組いる。

この中には、無宗教であったが妻の影響で教会に通い始めたという男性が2人いる。そのうち1人は執事になった。

カトリックの場合は、6組である。妻と子どもたちだけがプロテスタントおよびカトリックの教会に通い、夫は無宗教というのは3人いる。

仏教徒は2組いる。そのうち1人は、夫が無宗教であったが妻の影響で仏教を信仰するようになってきているとのことであった。夫婦共に無宗教は2組いる。

1世帯のみフィリピンのプロテスタントのキリスト教会へ通っているが（国際結婚をしたケース）、他はすべてコリアンの牧師、神父がいるコリアン対象の教会に所属している。

無宗教であるが、フィリピン生活の情報を得るために家族皆で教会に通っているケースもある。その家族は、キリスト教信者たちによる奉仕活動にも積極的に参加している。熱々の手作りハンバーガーを作り、ストリート・チルドレンや地域の子どもたちに配るボランティア活動にも参加している。そこでは、ただ食料を渡すのではなく、同時にフィリピンの子どもたち向けの礼拝も野外で執りおこなわれている。

(7) 韓国伝統の年中行事

韓国の伝統的な行事であるとか、祖先を敬う心を大切にする儒教思想から来る祭祀も、フィリピンではしていないという声が大半であった。フィリピンにいても厳格にしなければならないというのは、2家庭ある。義父母と同居している家庭では、そのような傾向が強い。

しかし、大半がフィリピンでは、これまで女性が担わなければならなかった各行事の責任を負わなくてもよくなり、肩の荷を降ろせるようになったということである。これは、韓国式の生活スタイルの大きな変化といえる。

(8) 所属している社会組織

全員が2つ以上の社会組織に所属している。韓人会、婦人会、駐比宣教師団体協議会および師母分科会、韓国学校PTA、商工会議所、経済人連合会、貿易人協議会、大学の同窓会などである。事業をしている男性は必ず商工会議所に所属している。小規模な自営業をしている場合は、経済人連合会の会員である。

(9) 居住地域

居住地域は、ビジネスの中心地であり、外国人ビジネスマンが多く居住しているマカティ市に10組、フィリピン国立大学があるケソン市には5組、マニラ国際空港に近いパラニャケ市に3組、パシッグ市9組、マニラ市2組、ラスピニャス市1組である。宣教師たちは、マニラ首都圏近郊のアンティポロ市7組、カインタ市3組に集住している。国際結婚した女性は、バタアン州に1組住んでいる。

賃貸マンションに19組、賃貸一軒家に12組が住んでいる。賃貸住宅が半数を占めている。持ち家は5組、所有マンションに住んでいるのは5組いる。この場合、国際結婚をした人や永住権を取得しているコリアン家族など、フィリピンが仮住まいの国ではなく、老後も考えて住宅を購入している。

宣教師以外は、いずれも韓国にいた時よりも面積の大きい家で生活できるようになり、居住空間が広がったと答えている。

(10) 健康状態

韓国は日本のように四つの季節があるが、フィリピンは雨季と乾期のみのため、熱帯地域独特の病気に罹った者もいる。家族がマラリア、デング熱などで入院したこともある。また、女性の場合は更年期障害など婦人科系疾患を患っている者もいる。

では、このようなコリアンの男性、女性たちがフィリピンで生活しながら、どのようにジェンダーの関係が変容していく体験をしているのであろうか。次節では具体的なケースに即して彼ら、彼女らの意識の変化に着目しながら考察してみたい。

第3節 フィリピン移住後のジェンダー関係

ここでは、フィリピンにおいて、ジェンダー関係が変容した部分と、変容していない部分について考察する。男性、女性のそれぞれから検討する。

その際、滞日中国人女性のジェンダー観の変化について研究しているオイ・ション・ゴウ(2005)の類型方法を参考にする。オイは滞日中国人の中でも高学歴の既婚女性を対象に聞き取り調査をおこなった。聞き取った内容を分析する際、4つの類型を作り出した。オイは、日本のジェンダー構造において、高学歴の滞日中国人女性たちが、家庭と仕事の両立が難しい状態にいることを想定した。それを前提にして、来日前と来日後のジェンダ

一役割観が、家庭志向とキャリア志向のどちらの傾向にあるのかを類型化した。

その類型は変容型と持続型の 2 つに分けられている。変容型には、「キャリア志向から家庭志向に変わった A 型」と、その逆に、「家庭志向からキャリア志向に変わった B 型」がある。持続型は、C 型の「家庭志向」と D 型の「キャリア志向」の 2 つに分けられる（表 2）。

表 2 事例の類型

〈変容型〉	
A 型	キャリア志向→家庭志向
B 型	家庭志向→キャリア志向
〈持続型〉	
C 型	家庭志向→家庭志向
D 型	キャリア志向→キャリア志向

出所：オイ(2005)、150 頁より引用。

オイは 8 人の中国人の既婚女性を対象にしている。短大卒 2 人、大卒 1 人、修士課程修了 5 人、博士課程修了 1 人、というように高学歴の人たちである。皆、日本で就職している。中国人と結婚した者が 4 人、日本人と結婚した者が 4 人いる。

中国にいた頃に身につけたジェンダー観が、日本での暮らしの中でどのように変化したのかを分析した。オイは、滞日中国人女性が日本の高等教育を受けても、日本で就職する際に、「外国人」、「年齢」、「ジェンダー」といった三重の制限や障害に直面しているという。また、長期滞在している間に、固定的なジェンダー役割分業が浸透する日本社会に拘束される傾向がある、という結論を導き出している。

オイは、8 人の中国人女性の語りを、すっきりと 4 類型にあてはめている。しかし、様々な背景、思い、悩みや希望を持つ女性たち、また男性たちの心情を 4 つの類型にあてはめることは難しい試みである。本章では、オイの類型を参考にしながら、次のように分析する。

変容型は、「A 型 キャリア志向から家庭志向への変容」と、その逆の、「B 型 家庭志向からキャリア志向への変容」である。

持続型は、「C 型 家庭志向から家庭志向へ」と「D 型 キャリア志向からキャリア志向」であるが、オイによれば、C 型は来日前から性別役割分業の意識がやや強く、日本に滞在し就職しても、ジェンダー役割分業を肯定する人々をさす。しかし、実際には、性別役割分業がそのまま変わらなかったとしても、夫婦の関係が変わるということもありえる。

また、オイによれば、D 型はジェンダー役割分業や母親意識に関して弱いとする。本国でも、移住先の国においても仕事をしている場合、キャリア型に分類できるが、ジェンダー役割分業や母親意識に関して弱いとは断定できないこともある。仕事を続けることで、性別役割分業が変わっても、夫との関係は何も変わらないということもありえる。また、キャリア志向型であっても、家庭志向の意識がないとはいえない。

そこで、本章においては、オイの類型を参考にしながら、夫との、また、妻との関係の変化という視点を取り入れながらコリアンの男性、女性たちのライフ・ストーリーを類型化してみる。では、次節から 4 類型に基づいて考察する。

1. 変容型

(1) A 型 キャリア志向から家族志向

ここでは、キャリア志向から家族志向へジェンダー関係が変容したことを考察する。女性と男性では、全く異なる経験をしていることがわかる。韓国で仕事をしていた女性の場合、フィリピンでこれまでのキャリアを生かすことができないために、空虚感にさいなまれている。男性の場合は、仕事上の問題はないことはないが、事業が順調であれば、安定したフィリピン生活を送ることができる。ここでは、女性 3 人と男性 4 人の計 7 人があてはまる。以下では、女性 2 人、男性 2 人の計 4 人の事例を検討する。

① キャリアをいかせないことからくる空虚感

〔事例 1〕 50 代、女性、主婦、結婚期間 29 年、フィリピン滞在歴 10 年

彼女は子どもの頃、儒教道德のもとで父母の権威と教えは絶対的なものであり、無条件従うものであると学んできたという。そのような影響を受けながら育った彼女であるが、夫とは、同じクラスの友達としての出会いであったことから、妻は夫に服従するものであるという考えはなかったという。特別な努力をして夫と対等な関係を築いてきたというのではなく、50 代になっても友達感覚で対話ができるという。

彼女は、韓国で専門をいかすことのできる研究職に就いた。子どもが生まれた後も仕事

は続けた。

私は子どもが生まれてからも仕事を続けていました。子どもが幼い時は、家にいる時間を増やしましたが、仕事を続けました。育児をしながら家事を自分ひとりですることはたいへんなことだったので、家事をしてくれるパートタイマーに来てもらっていました。私はそのような生活に満足していました。後悔することはありませんでした。

ところが、夫が海外勤務をすることになり、幼い娘を連れて、パキスタンとタイで生活することになった。夫はその後、異動のためフィリピンでの勤務となり、1993 年からフィリピン生活が始まった。その頃、まだ 12 歳であった娘はインターナショナルスクールに通い、卒業後は、アメリカの大学へ進学した。

娘は韓国で暮らした期間よりも、海外生活のほうが長くなり、アメリカ留学後、いったい自分はどこの国の人なのか、何人と言えるのか、アイデンティティ・クライシスに陥ったという。幼い頃からアジア諸国で暮らした経験から、自分はコリアンであるだけでなく、アジア人であるという自覚を持つにいたったとのことであった。

心を尽くして大切に育ててきた娘は、筆者によるインタビュー当時も、アメリカ留学中で、子育てに手がかかる時期はひと段落を終えていた。彼女は、外での仕事もなく、子育てに手がかからなくなった毎日を次のように語っていた。

ここに来てからは何もしていないでしょう。子どもは大きくなり、勉強をしに旅立っていった。だから、私は社会活動をしています、それはプロダクティブ [生産的] だと感じることはないのですよ。だから、空虚感がいつもあるのですよ。

多くの夫人たちはフィリピンに来てから、ゆとりの時間ができたと言います。友達と交流する時間が増えて、一緒に昼食をとったり、ティー飲んだり、そういうことをたくさんの人たちはエンジョイしているみたいですよ。でも私は、それはエンジョイにならないのですよ。

仕事をしていた時は生きがいを感じていたから、どのように時間を使うのかが大事でしょう。夫の職場には、配偶者のアソシエーションがあるのですよ。そこにソーシャル・ウエルフェア・コミッティ [社会福祉委員会] があって、しょうがい者を助けたり、孤児院の子どもたち対象の奨学金支援をしたり。私は、その活動に携わりました。社会

的な活動に関わることはやりがいがあります。それでも相変わらず、空しさは同じなのです。何かプロダクトがあって、アウトプットしたいのに、それができないから。それが少し、やりきれない思いがあるのです。

彼女は自身の生活を月給に換算した場合について次のように語った。

夫の月給を計算してみて、私はこれだけのお金を受け取るだけの価値あることを日々しているのだろうかと考えましたよ。私が韓国で仕事をせず、家庭の主婦だけをしていても、すべきことがたくさんあります。でも、フィリピンでは、子どもは大きくなり、家を離れて行き、掃除と洗濯はフィリピン人のヘルパーがしてくれるし。私がすることといったら、夫の服をなおして、対話の相手になってあげて、おかずを作ること、それが全部でしょう。子どもも遠い所にいるから、あれだ、これだとすることがないのですよ。

私は自分の日常生活に意味がないように感じる場合があります。何ていうか、自分がすべき仕事をできない感じがあるでしょう。そこから抜け出さないといけないのに、それがうまくいきません。

彼女はフィリピンで暮らしながら、韓国とフィリピンの女性の社会的立場の違いについて次のように語っていた。

フィリピンでは働く女性が多く、家計に責任を持っている人が多いように思います。韓国の場合は、女性が必ずしも家計の責任を持たなくてもいいのです。夫がお金を持ってきて、管理するのが妻の役目です。それは韓国とフィリピンの差異ですね。フィリピン人女性は職場がないと生活がたいへんということもあると思います。でも、フィリピンの場合は、職場における女性の地位が男女平等にみえます。その点、韓国は少し劣ります。でも、家庭での発言権が強いのはフィリピンと韓国の女性の共通点ではないでしょうか。韓国はアジアの一国で、儒教文化が基本としてありますが、家庭での発言権はとても強いですよ。日本よりも中国により近似しているのではないのでしょうか。韓国の女性たちは、社会的な地位が低くても、家庭内における立場は重要視されているからでしょう。

彼女にとって、フィリピン生活は、単調であったという。しかし、子どもは順調に育ち、学びたい分野を見つけ、海外でも1人暮らしができるまでに自立した。まずはありのままの自分の現状を受け入れて、考え方、努力次第で、幸福な生活を作っていきたいとのことであった。

唯一生きがいを感じるのは、教会での聖書の勉強会だという。また、教会でも、フィリピン子どもたちが学校へ行けるよう、奨学金支援のプロジェクトを担当しているとのことであった。

②妻が経験するフィリピンでの社会的地位の下降

ここでは、フィリピンに来たことで、韓国で積んだキャリアを失い、社会的な地位の下降を経験した女性についてである。伝統的な性別の役割が強固に維持されており、女性特有の問題を抱えている事例をとりあげる。

〔事例 2〕40代、女性、主婦、結婚期間20年

彼女は、韓国で専門職に就き、キャリアを積んできた。彼女の父親が男女の区別なく教育を与えてくれたおかげだという。

私の父は息子、娘区別なく教育してくれました。女性もライセンス〔資格〕を持ちなさいと。一生、自立できることを父は望んでいましたし、そのようになるよう、私に機会を与えてくれました。

彼女は結婚後、家族から仕事を辞めるように言われたが、仕事を続けてきた。婚家は儒教思想に基づく男尊女卑であったと彼女は語っていた。

韓国では結婚後、夫の言葉に従い、夫が死んだ後は、息子の言葉に従えということがあるのですよ。そういう考え方は今もありますよ。私がほかの人と違うところは、自立心があることです。これを基本にしています。

それでも、結婚してからは、夫、姑、小姑に仕える生活になったのです。仕事を続けることは反対されました。私は、仕事を捨てたら、家にいることになってしまったら、

私は死んでしまうかのように思いました。仕事がいへんだとか、体がつらいとかいうのではなく、私そのものがいなくなってしまうようなことです。そうだから、私はいへんであっても仕事をしました。スーパーウーマンになったということですよ。

夫はビジネスのためフィリピンへ行くことになった。彼女は韓国で仕事を続けたかったため、別居生活を選んだ。しかし、数年後、彼女は退職して、フィリピンへ行くことを選んだ。退職直前まで、仕事を辞めるべきか葛藤していた。1997年12月に発生したアジア通貨危機以降、経済不安定のため、職場においても多くの同僚が解雇された。彼女は生き残り、これ以上、解雇される不安もなく、月給も上がり、安定した生活を送っていた。定年まで働くことはできるが、仕事を続けるべきか家族がいるフィリピンへ行くべきか悩み続けた。同僚、先輩、後輩からは仕事を辞めるべきではないとのアドバイスを受けたが、結局は、母親、妻としての役割を選ぶことにした。また、婚家の人たちに仕えることから逃れたかったという理由も話していた。

フィリピンでの生活は、夫、子どもたちの世話に専念しながら、積極的にボランティア活動もしている。しかしながら、フィリピンでの暮らしは、彼女にとって過酷な選択でもあった。夫は韓国にいた時から暴力をふるう人であったという。別居期間中は暴力から離れることができたが、同居が始まると再び暴力をふるい始めた。彼女は心境を次のように語っていた。

自分の専門職に従事する時、男女平等関係が起きると私は分かりました。少なくとも、仕事をしている時は平等だったのですよ。仕事の面では。でも家庭に戻ると、家庭の中の女性の位置があるでしょう。妻の位置が平等ではないということではないですが、社会が与える妻の役割に入ると、ちょっと、たくさん落ちてしまうでしょう。

離婚を考えてみても、自分が持っているものをみてみたら、あまりにもないのですよ。既に全てのことが傾いてしまって、家庭内は男性中心社会に変わってしまっていたのです。それで私が外へ出て行って、何をできるのか。どんなカンパニー[会社]があって、どんな職場があるのか、この国で、どこへ行って、誰に会えばいいのか分からないのです。夫は全て知っているのに。韓国ではそういうのはないのだけれど、フィリピンで私は何もわからない。ここでは、自分の実力だけで生きていくことができないのですよ。韓国では離婚してすぐ、私の方法でそのまま生きていくことができる。職場もあったわ

けれど、どこでも私の言葉をそのまま話すことができるし、何も問題がないでしょう。ここでは既に、職場はないし、言いたいことはたくさんあるけど、知っていることは全然ないし、英語はよくできないし、どこへ行って何をするのか、これはすでに不平等に陥っているということです。これは、闘うことのできるバックグラウンドがないことですよ。

そして、夫からの暴力について、逃げ場のない心境を次のように語っていた。

暴力をふるわれても、私には避難場所がありません。避難場所は私の家でしょう。自分で解決しないといけないでしょう。解決するまで仕方がなく冷戦を続けて。避難場所が他にあるわけでもなく。そのため家庭の問題は自分で解決しないといけないでしょう。

彼女は韓国にいた時は、経済的に自立していた。しかし、家族と一緒に暮らすことを選び、フィリピンに来たことにより、職を失い、社会的な地位の下降も経験することになった。経済的に自立できる基盤を持っていないため、暴力をふるわれることによって、さらに、弱い立場に追い込まれるようになっている。韓国では、暴力をふるわれても、それに屈することなく、生きることができたのは、生きがいを感じる仕事を持っていたからだ。彼女の父親が男女の区別なく教育を与えてくれたおかげだという。

フィリピンでは、彼女の住宅はとても広く、家事全般は住み込みのフィリピン人メイドがしていた。家事の負担はなくなったものの、夫の暴力におびえる日々が続き、韓国と変わらないジェンダー関係が続いている。

そのような中でも、彼女は新たな道を探し求めている。フィリピンで、商売をはじめる準備もしていた。夫とのジェンダー関係が強化されながらも、彼女のもともとの自立心から、フィリピンでの再挑戦をはじめたところであった。

③男らしさからの解放——問題を分かち合う夫婦関係へ

では、男性はどうであろうか。ここでは、男性側のライフ・ストーリーから考察してみたい。

[事例 3] 60代、男性、貿易業、結婚期間40年、フィリピン滞在歴38年

彼はフィリピンで暮らしはじめて 38 年になる。フィリピンにはミンダナオ島での木材関連の仕事のため、1965 年に単身で入国した。当時は、合板会社の工場長として働いていた。木材を韓国へ輸入する仕事であった。

妻は、韓国の有名女子大学を卒業した。妻と 2 人の子どもは、1 年遅れてフィリピンへ渡った。3 人目の子どもはフィリピンで生まれた。子どもたちはすでに独立し、長女はイギリスで暮らしており、次女と長男はソウルで暮らしている。長男は日本人女性と知り合い、国際結婚をした。長男は 30 代になって、生まれて始めて韓国で暮らし始めた。

妻にとって、フィリピンでの暮らしは単調な毎日であった。彼にとっては、仕事優先で変化に富んだ日々であった。居住場所は外国人が集住している高級住宅地で、妻が普段、接する人はごく限られていた。フィリピン人のメイドと乳母が同居していたため、家事、育児をすべて自分で負わなくてもよかった。はたからみれば衣食住が整った生活は十分に幸せに見えるが、妻にとってはそうではなかった。彼は、これまで考えたこともなかった妻の心情を省みるようになったという。

私がフィリピンに来た頃の 30 数年前というと、1960 年代ですね。その頃は、フィリピンに住む韓国人は 1500 名から 2000 名ほどだったのですよ。当時の韓人社会は、貿易会社、商社といったビジネスのグループと、アジア開発銀行 [ADB] とか、大使館員など、ごく限られた人々でしたよ。ADB とか大使館員の場合は、同僚がいるでしょう。同僚の奥さんたちが一緒に集まって余暇活動を過ごすとか、そのようにしていましたよ。夕食時間も職場でのパーティーに同席したり、奥さんたちも参加するような席がけっこう多くあるのですよ。そうしながら残った時間を英語の勉強にあてるとか、タガログ語の勉強をしたり、そのような話をよく聞きましたよ。

私のように、商社の駐在員として生活するとか、独立して一人で会社を運営するとなると、妻にとっては夫を介した主婦同士のグループを作ることがなかなかできないのですよ。

このように妻は孤立した状態であったことを語っていた。彼の場合は外で仕事をする分、フィリピン人との接触も多く、一日として同じことの繰り返しの日々ではなかった。しかし、妻は家庭で何気なく時間ばかりが過ぎていくような日々であったという。

私の生活は外で仕事をする。そのようなスタイルだから。家内は外の活動をほとんどせず、外に出て誰かに会う場合も韓国人と会うことになり。家に帰れば子どもたちと韓国語で会話をして、韓国的な生活をするので、フィリピンに来てても大きな変化がなかったのですよ。私だけ外へ出て社会活動をしてくるから。私だけ英語を使い社会活動をすればいいのであって。

妻の場合、市場へ行って買い物をすることはあったでしょう。当時は韓国の食品店はなかったので、市場でフィリピンの食材を買ったでしょう。フィリピンのものを買うという点では若干の変化はあったのですが、家庭内での韓国の文化、習慣については大きな影響はなかったのですよ。韓国人のおかずの中でキムチが重要なものですが、市場へ行くと、キムチの材料になる大根とか白菜はあるのですよ。今は韓国食品店へ行けば唐辛子粉も買えますが、昔はなかったでしょう。ソウルへ帰国する度に、唐辛子粉をたくさん買って帰ってきましたよ。

妻はフィリピンに来てから私の仕事の補助をするとか、何か副業を持つとかそういう必要はなく、家庭内で子どもたちと過ごして主婦の役割だけをしたらいいのだから、フィリピン人たちと積極的に接するとか、そういう必要性がなかったのですよ。だから、フィリピン現地に同化する必要がなかったのですよ。

妻はフィリピンの人たちと会って、積極的に現地の言葉を習わないといけないとか、そうでなければ暮らしがたいへんであるとか、そういうことはなかったもので、現地語が特別に抜кин出て上手になるとか、そういうことはないのですよ。

私個人の場合は仕事があるからいいのですが、家内にとってマニラ生活はおもしろくない生活になることもありえました。そのようなことは実際に問題だったのです。

言葉がよく通じたり、文化も似ていれば、フィリピンの隣人といくらかでも親しくなることができたと思うのですが、文化の差異があり、言語の障壁もあって、妻にとってはフィリピン人と親しくなって、一緒に時間を過ごすことは少し難しいことだったのですよ。当時は韓国のキリスト教会もなかったし。今は教会がたくさんありますけどね。今は、韓国人のコミュニティも大きくなって食堂もたくさんありますし。今は英語を一言もできない韓国人が来てても、ソウル生活と同じ生活ができる、そのようなすべての条件が整っていますよ。20年、30年前は全然そうではなかったのですよ。主婦が家に残り、残ってありあまる余暇時間を過ごさないといけないというのは深刻な問題の一つだったのですよ。

彼は仕事が忙しく仕事を優先する生活をしていたため、妻の心理的な状態にまで気配りをする余裕もなかった。

妻が無気力な状態になることもあったでしょう。その当時はなぜそうなのかわからないまま過ぎたのですが、今になって再び考えてみると、そのような問題が大きな原因だったのではないかと。

30年前は、ソウルとマニラを行ったり来たりするというのは簡単なことではありませんでした。マニラから東京を経由してソウルに入るとか。香港を経由してソウルへ行くとか。マニラ、ソウル間の直通がなかったのですよ。飛行機のチケット代も高くてね。今のようにソウルへ頻繁に行くことはできませんでした。妻はフィリピンで暮らしながら、自分の余暇時間をどのように過ごせばいいのかわからなくなってしまったのです。

子どもが小さかった時は、子育てにある程度、力をそそぐことができますが、フィリピンでは、乳母もメイドもいるので、時間の余裕がたくさんあるのですよ。時間が余ってしまうほどなのですよ。時間が余ってしまうことから問題が生じていたのですよ。

フィリピンは文化や生活習慣が韓国と違って、韓国では男性たちよりも主婦のほうが忙しいのですよ。でも、フィリピンに来てから生活が変わってしまって。中国の東洋画を習ってみたり、趣味活動を広げてみたりしていましたけどね。当時は、ソウルにも頻繁に行くことができないので、時間が残ってしまうのです。一緒に過ごす友達もあまりいなくて。主婦として家の中だけで生活するというのはたいへんなことだったのですよ。

次第に彼は、妻が抱えている悩みを、自分の問題として考えるようになっていった。

そのようなことは結局、男性にとっても、たいへんなことになるのですよ。なぜなら、家内がたいへんな思いをしているのだから。私が支えて助けてあげないといけない。だから、家に早く帰って、私が一緒に時間を過ごしてあげるとか。韓国であれば、劇場へ行く場合はお前が一人で行っておいで、男性がお前のことを劇場まで連れて行かないといけないのかと言うこともできたのですが。韓国人男性、韓国人の夫はこのように言いますよ。でもここでは、たとえ私が劇場へ行ったり、映画を観る趣味がなくても、妻について行かないといけないから、そういう面でも私にとってはたいへんなことだったの

ですよ。仕事も忙しいですからね。そのような問題が生じたのですよ。

このように、妻の回復を願って、一緒に時間を過ごし、共に何かをしてわかちあうようになっただけのことを話している。

彼は長年にわたるフィリピンでの生活をとおして、フィリピン人女性とコリアン女性の社会的な役割の違いについて次のように話している。

フィリピン人女性は社会的な役割を担うという部分においては、韓国人女性よりもずっと発展していると思います。職場、政府、官庁などで働いている男性と女性の比率を見ると、女性の活動の比率は高いですね。女性たちの役割と能力は男性たちが持っていないものですよ。

また、彼自身、フィリピンに来てから他人のことを意識することから解放されて楽になったことを次のように語っている。

私はフィリピンに来たことで良かったことが何かと言うと、この国が民主主義をアメリカから早く学んだ国なので、人に対する差別だとか、干渉が少ないことです。韓国文化は少し他人に対する干渉、他人をたくさん意識して生きないといけない、そのような社会雰囲気なのです。日本も多分そうでしょう。他人を意識するでしょう。でもこの国はそういうのがないのです。それと、人件費が安いので、ハウスヘルパーだとか、運転手だとか、乳母だとか、このような家事労働を助けてくれる、そのような人たちが豊富にいるので、家内や私自身も負担が軽くなり、とても自由に生活できたことです。

やがて妻は困難を乗り越えることができた。そのきっかけは夫婦の対話の時間が増えて、お互いに理解しあうことができるようになったためであったという。妻との関係の変化について次のように話している。

フィリピンに来てから夫婦の対話の時間が増えましたよ。ああ、もう確実に増えましたよ。妻の困難を克服できたのも対話が増えたことによると考えることができるでしょう。韓国では完全に一般的なやり方で。ここでは必ず話しあって何かをする。そのよう

にしてきました。韓国にいた時には、お互いに相談しあうということ自体がありませんでした。一般的に私が決定すれば、そのまますべてのことがそのようになりました。

そうして、夫婦の信頼関係の深まる中で、彼は妻の影響を受けて、キリスト教を信じるようになり、一緒に教会に通うようになった。執事にもなった。

私が教会へ行くようになったその直接的な動機は、妻が教会に通っていたからでしょう。そうしたら頻繁に教会に行くようになって、キリスト教との関係が近くなり、もちろん、たくさん考えたでしょう。私たち人間自体が不安定なのです。生まれて死ぬことを人間はどのようにしても知ることができるわけではないでしょう。そのようなこと、人が生まれて死ぬこと、また時間を人間はどのようにもすることができないのです。だから、神様の存在を私たちは否認することはできないのです。全知全能の存在は誰なのだろうか。それがどのような存在なのかを考えるようになったのです。家内のおかげでキリスト教信仰が近くなり、信じるようになったのです。

妻と時間を共有し、対話を重ねることで、妻の問題をわかちあうことができるようになった。夫にとってはキリスト教を信仰するようになり、教会を通じた交友関係も広がった。韓国では夫がすべてのことを決定していたが、フィリピンでは妻の意見も尊重することができるようになったことを大きな変化としてとらえている。

また、彼は家父長制が必要なものであると話している。彼の父親は、子どもたちに命令だけを下すような権威的な人ではなかったという。最終的な決定を下すのは父であったが、子どもであった自分の考え方に干渉することなく、自分で考えて物事を決めるように教えてくれたという。そして、学んだことは、やはり家父長制は必要であると次のように話していた。

私は家庭で最終決定を下す人がいないといけないと考えます。最終決定を下すことのできる、そのような位置にある人が必要だと。それをするのが家長だと、そのように考えます。家父長制というのは儒教から伝わってきたものです。祖父、次に父というように、男性の系統で考えるものです。父がいなければ、次に母が家長になることもできるのであって、母がいなければ最も末の子が家長になることができると考えます。家庭で

は最終決定をできる、そのような位置の人が、私は必要だと思います。それが家父長制ならば、家父長制がいいものなのでしょう。そのように考えます。

彼は、妻との性別役割分業も変わりはない。妻の問題を自分のことと切り離して考えていたが、避けて通り過ぎることはできなくなったことで、彼は妻に向き合い、悩み事を分かち合うようになった。いたわりあう関係を築くことができるようになり、妻の問題はまた自分の問題でもあると考えるようになったのである。そうして、男性はこうでなければならないという考え方からも解放されるようになったのである。有無を言わず妻は夫に従うべきといった権威的な家父長制ではなく、夫婦の絆を深める家庭志向の考え方を見つけたのであった。

④異文化理解から芽生えた夫婦間の平等意識

次は、仕事でフィリピン人従業員と接触する中で、韓国とは違う男女の役割について気がついた例である。夫婦間の決定権は依然として夫側にあるが、フィリピンという異文化に触れながら、夫婦の関係も変容してきたことを語っている。

[事例 4] 50 代、男性、広告業、結婚期間 26 年、フィリピン滞在歴 19 年

彼は、1984 年に繊維を輸出する会社の支社長としてフィリピンに派遣された。2 年目が過ぎた頃、フィリピンの生活にも慣れて、独立してもビジネスチャンスがあると考えた。1987 年に、同じく繊維産業の会社を設立し、フィリピン国内向けの生産をはじめた。さらに、1995 年には多国籍企業の看板を製造する広告会社を設立した。その後、繊維会社のほうは、コリアン職員に譲り渡すことにした。彼は、フィリピン生活の生きがいや次のように話している。

私の生きがいは、熱心に仕事をして、職員も私自身も自分の会社に誇りを持つようすることです。何もない状態からフィリピンで仕事を始めてきました。韓国人として、フィリピン人を助けようと考えています。

貿易人協議会というのがありますが、私は 1999 年に会長になりました。奨学金制度を始めたのですよ。韓国企業の製品を扱う商品展を催して、奨学金を作りました。その奨学金はフィリピン人学生に渡しましたよ。この間、奨学金は積み立てられていますよ。

これからも奨学金制度は続いていくことでしょう。このような活動にも生きがいを感じています。貿易人協議会での奨学金制度の取り組みがうまくいったので、今後もこのような貢献をしたいと考えています。私は自負心を感じていますよ。

このようにフィリピン人に対して貢献したいという気持ちは、フィリピン生活の中から自ずと生まれてきたものであった。彼はフィリピン人について次のように考えている。

私はフィリピンで生活しながら、フィリピン人から差別されるという体験はありませんでした。フィリピン人は善良です。両班〔韓国語では、ヤンバン。身分階級の最上位に位置する人〕ですよ。礼儀もよく、善良で仕事もよく出来ます。メイドも礼儀があります。メイドも両班ですよ。人に気を遣います。韓国人は仕事がよくできるのですが、人としての資質は劣っています。韓国人は無礼ですよ。

フィリピン人は、韓国人をみる時、こう思っていますよ。自分よりも社会的に高い地位にいるのに、なぜ英語ができないのだろうか。支社に派遣されている韓国人は、フィリピン人の悪口を言います。私はそういう人に対して、フィリピン人のほうがずっと両班だと話します。

フィリピン人の性質は、植民地政策の影響ではないかと話す人もいます。フィリピン人がよく嘘を言うのは、植民地にされたからだと言う韓国人もいます。しかし、そうだとはい簡単に言えるものではないでしょう。この国の文化をたくさん学ぶことが大切です。フィリピン人は礼儀を守り、善良な人々ですよ。一緒に仕事をしているフィリピン人は、モチベーションを与えると熱心に仕事をしますよ。実際にフィリピン人は、海外でも仕事をしています。看護師はナンバーワンですよ。中東でもフィリピン人はナンバーワンのエンジニアです。フィリピン人の個々人に資質があるからです。

このように、フィリピン人を高く評価しているのである。また、フィリピンで仕事をする意味を次のようにも語っている。

フィリピン人をポジティブに見たら、成功します。私はフィリピンに来てから、19年間、大使館員、大企業の方々など、いろいろな人たちを見てきましたが、70%の方々がフィリピンをネガティブに見ています。30%の方々がポジティブに見ています。ある

大企業の社員はフィリピンでは商売をすることがない、フィリピン人は嘘をつき、責任感がないと、悪口を言います。しかし、アメリカへ行ったら私たちは仕事ができるでしょうか。ビジネスチャンスが少ないです。発展途上国だからこそできる仕事があるので、す。

アジア通貨危機による影響といった、外部的な環境の変化は、ビジネスには関係ないのです。どんなに難しくても道があるものです。個人のビジネスが、A、B、C、D といくつかあるとしますよね。ビジネスの環境が悪くて 20%しか整っていないとしても、残り 80%は自分の競争力によってなんとでもなるのです。

彼はまた、妻がいつも自分を支えてくれた、と語る。妻は韓国では結婚後も子どもができるまで働いていた。妊娠したため仕事を辞めたが、継続して働きたいとは考えていなかったという。第一子出産後、すぐに第二子を妊娠したため、育児に専念する生活を送ってきた。

フィリピン入国後、彼が 1987 年に独立してからは、会社の仕事を妻も手伝うようになり、経理を担当している。子どもを学校へ送り出した後、妻は午前中のみ会社で働いている。昼食時間は一緒に過ごすようにしており、韓国にいた時よりも夫婦が共に過ごす時間が増え、友達のような感覚を持っているという。育児に関しても、夫婦共に神経を使ってきたと話している。

長女が 5 歳、次女が 4 歳の時にフィリピンでの生活が始まった。インターナショナルスクールを卒業後、2 人ともはアメリカの大学に留学した。長女は日本の国際基督教大学に留学したことがある。現在では、2 人ともアメリカで就職している。息子はフィリピンで生まれ、インターナショナルスクールに通う高校生である。

3 人ともフィリピンでは韓国学校に通い、韓国人としての意識を持つように育ててきた。家庭内では韓国語しか使わないようルールを徹底してきたが、言語面では英語が最もよくできる。時々、韓国へ帰り、韓国の文化に直接、接するようにさせてきた。

アメリカに暮らす娘たちとは頻繁に連絡を取り合っている。結婚 25 周年の記念に娘たちが花束を贈ってくれたという。フィリピンで暮らしながら、夫婦の関係について次のように話している。

私たち夫婦はもう 30 年の付き合いになります。フィリピンに来てからは対話をする

時間が増えました。日曜日に一緒に教会へ行くことは大切にしています。フィリピンでは、夫婦の会話時間が増えたという話は私たちだけでなく、よく聞きますよ。韓国よりも、ここでは夫婦がたくさん対話をしているようです。私が韓国にいた頃と比べて、韓国社会は大きく変わりましたよ。離婚率も高くなりました。韓国社会の価値観が変わってきています。外国に住む韓国人夫婦は保守的な面があると思います。なぜなら、韓国が保守的であった時代にフィリピンに来て19年が過ぎましたが、そのままの価値観を持ってフィリピンで過ごしてきたと思うからです。

韓国では、女性たちが男女平等に向けて闘っています。保守的であるということは家父長的であるということです。私たち夫婦関係には、家父長的なものは残っているのですが、長い時間をかけて、変わってきているようにも思うのですよ。お互いによく話し合うようになりました。それでも決定権は私にあります。

妻が家族のために犠牲をおつてきたでしょう。でも、妻は楽しく生きてきたと思います。私に力を貸してくれました。妻は家族のために犠牲とは言わないけれど、それは愛といえるのでしょうか。

私は妻のために、両親のために、自分のために、家族のために、そして、教会、商工会議所、貿易人協議会のために、そして仕事のために、熱心に生きてきました。フィリピンに住む韓国人の一部には寄与しているでしょう。いつも忙しく生きてきましたが、一方で余裕を持って、リラックスしながらゆとりを持って生きていきたいと思っています。

このように語る彼はまた娘たちの結婚相手について、必ず韓国人でなければならないと考えている。

娘たちは結婚の時期になってきていますが、私は国際結婚を許しません。結婚というものは家族関係が大切です。父母との関係です。2人は良くても、他の人には不便な面もあります。友達になるのは良いのですが、結婚というのは二つの家がすることです。国際結婚することは家を放棄することになります。家同士の交流があることが大切です。

子どもたちには韓国人と結婚することを願っている。彼が基本とする価値観はそのま

ま持ち続けているが、仕事を通してみてきたフィリピン人女性からは多様な考え方を教わっている。韓国の場合と男性と女性の責任が違うことを次のように話している。

フィリピン人女性は、結婚して子どもが生まれても働き続けています。たとえ夫が逃げてしまっても、賢明に子どもを育てています。フィリピンは中絶が許されない国です。だから、子どもがたくさん生まれます。フィリピン人女性は賢くて、たくましいと思いました。男性は子どもが生まれたのに収入がなかったり、もしくは逃げてしまう人が多いように思います。

フィリピン人女性は、子どもを育てることを大事に考えています。一人で育てることをも。そのことを恥ずかしいとか、そういうふうにも思いません。韓国では、そういう女性のことを可哀そうな人と見ます。私自身もそう考えます。ここフィリピンではそのような状況になってもありのまま受け入れ、不幸とは思っていないのです。

男性は家族を養うという意識がないようにみえます。その点では、韓国は違います。そのような境遇の女性を不幸な人と見ます。フィリピンでは、40歳で子どもがいない女性もいれば、30歳で子どもがいても、父親が誰か分らないというケースもよくあります。田舎にいる実家のお母さんに子どもを預けて、自分自身は懸命に働くという人もいます。

彼は、フィリピンの女性像をこのように語っていた。韓国とは異なる文化を理解し、また学びながら、彼はフィリピンでの自分の立場を形作ってきた。長男も姉たちのように高校卒業後はアメリカの大学に留学する予定である。彼は、今後、フィリピンを拠点としながらアメリカにも居住場所を設ける予定でいる。遠隔地からもインターネットや電話など情報通信を利用しながらフィリピン人社員に会社の運営を任せて、ビジネスを展開していくことを考えている。これまで、ベトナム、中国、タイ、香港など各国を行き来しながら仕事をしてきた。どこにいても韓国人としての自負心があるという。

仕事をしながらたいへんな問題に直面した時などは、キリスト教の信仰が心の支えになったという。経済力がなかったならば、もっと難しく、また抱える問題も違ったであろうと、フィリピンで暮らしながら思うことがあるという。

上記の事例 3、4 は、いずれも家父長制は必要であり、決定権は夫にあるという。事例

3 では、フィリピン生活で夫婦が向き合い、喜びも困難も分かち合うことができる関係に変容したと語っていた。事例 4 でいえば、かえって家父長制を頑なに守ることでコリアンとしての意識を保ち、子どもたちにもコリアンとしてのあるべき姿を教えることができると考えている。しかし、日頃接するフィリピン人を介し、フィリピン社会と文化を知り、社会における女性の立場の認識が広がった。それは、韓国での生活では得られなかったものであり、フィリピンではじめて獲得したものであった。

また、他の男性の語りからも、フィリピンに来てからは、他人の目が気にならなくなったことや、子どもは韓国の受験地獄の環境から離れて、自分の能力を開発できる勉強ができるようになったとの声が聞かれた。

(2) B型 家庭志向からキャリア志向

ここでは、伝統的な性別役割分業がフィリピン生活の中で変化したことによって、女性も仕事をはじめ、仕事でなくとも社会組織活動や教会において運営委員を担う立場につくようになったケースである。この B 型は、13 人の女性たちが該当する。13 人一様に、夫との関係が良くなっていることを語っていた。しかし、簡単にそのような関係へ移行したのではなく、時間がかかるものであった。

①権威的な夫の変化——共に働くパートナーへ

[事例 5] 30 代、女性、宣教師、結婚期間 9 年、フィリピン滞在歴 5 年

宣教師としてフィリピンに入国して 5 年になる。フィリピンでは、経済的に困難な家庭を対象に聖書の勉強や医薬品の配付など、様々な支援活動をおこなっている。夫婦そろって宣教活動をしているため、家事は役割分担をするようになった。フィリピン人のメイドと運転手はいない。フィリピンで暮らしながら、生活の変化について次のように語っていた。

韓国では、夫が牧会をしている間、私は夫をサポートすることと信者のために祈るといように、夫の補助的な役割をしていました。

韓国では、信者のために熱心に祈ることが牧師夫人の第一の仕事ですよ。韓国を離れて、韓国よりも貧しい国で、現地の人を対象にする救済事業の場合、牧師夫人の役割はとて多くなります。病気の子どもの世話をしたり、お腹がすかないように食べ物

を与えたり。家を訪ねて祈ったり。聖書の教えを話したり。女性たちの手が必要になることがたくさんあります。牧師夫人は、海外にきたら夫と同じように宣教師の立場になりますが、役割が広がり、宣教師夫人が具体的に活動することが増えます。祈拝することほど重要な仕事はありませんが、フィリピンに来てからは、夫と一緒に現場へ行き、夫と一緒に過ごす時間が増えました。

韓国では、裏方で教会内部の仕事が役目であったのが、フィリピンでは外での活動が増えるようになった。韓国では、夫が権威的であったと次のように語っていた。

私は、母も祖母もクリスチャンで、幼い頃からキリスト教の影響を受けて育ちました。キリスト教的な影響のほうを強く受け、儒教的なものはあまりなかったように思います。でも、韓国社会は儒教的なことがたくさんあるでしょう。キリスト教を信じている家庭にも家父長制が浸透しています。私は儒教的なものの影響を受けて育っていないと思うのですが、結婚してから考え方が大きく変わりました。夫は権威的な人ではないと思ったので結婚したのですが、実際は権威的な人でした。

彼女はまた結婚後のコリアン男性の役割について次のように語った。

結婚することで、男性はどうすることもなく負わされることがあります。夫は権威を主張するようになり、女性と子どもに対して服従させることを望むようになります。そのようになるのですよ。なぜなら、結婚をすると夫は家族がいて、その役割から抜け出すことはできません。社会と家族の狭間にいるような存在です。夫はどうすることもできない、夫の意志や哲学があっても、その意志のとおりできない社会的な環境もあって。夫がどんなに個人の考えを持っていたとしても、職場の中で、一人で生きるのではないでしょう。教会でも、他の牧師もたくさんいて、副牧師も伝道師もたくさんいて、自分一人で男女が平等な関係にすることもできず、自分一人だけ私は従わないということはできないでしょう。そのような社会的な立場が、夫を権威的にならざるをえないようにしていると思います。一人の個人が、どんなに個人的な価値観で、意志が確固としていても、自分の意志のままに生きることはできません。それで結婚後、夫はしかたがなく権威的になったと思います。

このように語るが、フィリピンに来てから彼女の夫の態度は変わったことを指摘した。

それが、フィリピンに来てからは変わりました。韓国では夫はほとんど家庭の仕事はできず、社会生活に負われていたのですが、ここに来てからは、何かと言う人もいないし、いろいろと言う義父母、実父母もいないし、教会の中の牧師たちがいないから、何かを言う人がいないから、少し自由になったでしょう。家の仕事もたくさん助けることができるし、料理もたくさんして、子どもたちも見てくれて。

家事の役割分担はフィリピンに来てから、夫も家事をたくさん助けてくれるでしょう。庭の掃除とか、犬にご飯をあげる事とか、ありふれている仕事です。韓国では夫は忙しくて、家庭内のことはできなかったのですが、ここではしますよ。私が特別に忙しいことがあって外に出る時は、子どもに服を着せたり、料理もして。私よりも上手ですよ。やれば上手なのにしないでしょう。

このように、夫が家庭内の仕事を分担するようになったのである。そして、彼女自身の生活がより充実している様子を語っていた。

例えば、韓国では女性たちはあまりにも家庭や育児に縛られるから、社会に出て仕事をしにくいのですが。フィリピンでは、職場であったり、社会奉仕であったり、有給であっても、無給であっても、自発的に女性が参与できる機会が増えるように思いました。

私も救済活動で、1人でも多くの家庭を訪問しようと思っています。フィリピンに来てからは、女性としての役割が大きくなり、韓国にいた時よりも、女性が持っている能力を発揮できる機会がたくさんあるように思います。

彼女の家庭では、フィリピン人のメイドも運転手も雇っていない。家事をフィリピン人に代わってもらうことが、女性の負担を減らすことになるとは限らないことを話していた。

フィリピン人に家事を分担してもらえれば、肉体的に楽になるかもしれませんが、長所あれば短所もあるのです。家事は人に任せればいいという、家事を軽々しく考えて

しまう場合もありますよ。何でもフィリピン人のメイドにやってもらうことに慣れてしまえば、子どもたちに良くないことでしょう。韓国語を話す機会が減り、韓国語ができなくなったり、父母を尊重しない子どもたちもいますし。偏らないようバランスよくすることが大事だと思います。

また、フィリピン女性とコリアン女性の共通点は家父長的なこととも言う。

私が見るフィリピン人男性はずっと家事をよくしています。韓国人男性よりも。フィリピン人女性たちは、韓国人女性よりも、もっと多く社会進出しています。公共団体へ行っても職員の大部分が女性です。

でも、家庭内で重要なことを決める時には、フィリピン人女性たちが夫に頼っているように見えます。夫が決定したことに従うというのが、韓国人女性と同じところで、家父長的な部分だと思います。でも、女性が社会的進出をたくさんできて、機会がたくさん保障されているということはフィリピン人女性のほうがいいですね。

今、目の前に起きていることは、すべて私が選択した結果です。結婚を選択して、子どもたちが生まれて。私が選択した結果に対して責任を持たないといけないと考えます。

②性別役割分業の変化

〔事例 6〕 50 代、女性、自営業、結婚期間 18 年、フィリピン滞在歴 17 年

彼女は結婚後まもなくして、夫がフィリピンへ留学することになり、1986 年 6 月にフィリピンに入国した。この年の 2 月、フィリピンではピープルズパワーという、マルコス元大統領の辞任を求めて抗議活動が大規模に展開された時期であった。落ち着きを見せた 6 月に、夫婦でフィリピンへ渡った。

最初は彼女も一緒に修士課程に進学予定であったが、想像以上に学費が高く、勉学を続けることを諦め、夫を支える立場に徹することにした。夫は、フィリピンで修士号、博士号を取得して、韓国へ戻り大学の教授になることができた。

彼女は、フィリピンで 2 人の子どもを出産した。夫が博士号を取得した頃になると、子どもたちは学齢期に達していた。夫が韓国で就職が決まり帰国することになったが、母子 3 人はフィリピンに留まることにした。彼女は自分が勉強できなかった当時のことを思い

出して、次のように語っている。

夫だけが勉強して、私はできなかったことで、悔しい思いはありますよ。でも、そのことをどうみるかという、私は自分の置かれた場所に留まったのであって、夫は大学の教授にまでなることができましたが、私の内面的な部分については、とても豊かになったと思いますよ。私はかえって、自分の生き方に喜びを感じることができるようになったのです。でも、喜びを感じる一方で怒りを覚えることもあります。なぜなら、私が女性であるということで、私の置かれている立場について、怒りが込み上げてくることもあるのですが、家族と夫をサポートしているという自負心も持っていました。夫が勉強できるように、妻としての役割も果たしたでしょう。

彼女は、「自分の生き方に喜びを感じることができるようになった」と語っているが、それは次のような背景がある。

母子でフィリピンに留まることを考えた時、生きていくためにどのような仕事をしたらいいのか悩んだ。韓国に戻った夫からの仕送りだけを頼りに生活はできないと思ったからだ。とはいえ、フィリピンで就職しても、自分の給料では生活費、学費を工面することは難しいと考えた。しかし、自分ができそうな仕事は選り好みせず、なんでもやってみようと思った。

韓国製の服や鞆を売るブティックから始まり、韓国商社の支社長、貿易会社、鞆製造工場やレストラン経営、そして2003年2月現在の時点では、レンタルビデオ店と韓国やアメリカの大学進学のための学習塾を営んでいる。

この塾の経営を始めたのは、自分の子どもたちと一緒に過ごす時間を作ることができると思ったからである。仕事をしていると、なかなか子どもたちと一緒にいることができない。しかし、塾を営むことによって、仕事をしながら子どもたちに接することができると思ったからである。

子どもたちはインターナショナルスクールに通っているため、年間の学費は相当な額になる。しかし、フィリピンでの生活は、彼女の収入だけで成り立つようになった。彼女が、夫と別居生活を決意した理由は、フィリピン社会そのものが、女性が働くことのできる環境であったからだという。

社会的な役割を担っているフィリピン人女性はとても多いと思いました。韓国の場合は、女性に対して社会が閉まっているように思います。女性に対してはね。社会が開かれていないということです。外で働く機会があまりないということでしょう。男性たちの考えが変わらない以上、女性たちの意識がどんなに変わっても、なかなか、女性に対して開かれた社会にはならないのではないのでしょうか。それに、フィリピン人女性の場合は、家事をするヘルパーがいるから、分担することができるでしょう。家事の責任を妻だけに与えていないところだと思いました。だけど、韓国の場合は、家事の責任は妻に与えているのですよ。だから、そういうことが、女性に負担をかけることになるのではないのでしょうか。

私の場合も、家事をしてくれるフィリピン人を雇っているから、基本的なおかずは、私が作っていますが、他の家事は任せることができるでしょう。フィリピンでは、家事をしてくれるヘルパーがいるお陰で、私は肉体的にあまり疲れなくなりました。精神的にはいろいろと葛藤が多かったのですが、肉体的には助けてもらっています。

このように彼女は、夫や親戚など、近くに親族が住んでいなくても、母子だけでフィリピンで暮らし、かつ、母親が就労できる条件がフィリピンには整っていると判断した。そのため、夫に全面的に頼ることなく、フィリピンで暮らし続けることができたのである。しかし、周囲の人々の目は厳しいものであったという。

義父母も、私の両親も韓国へ帰って、一緒に生活しなさいと、何度も、何度も繰り返して言っていました。だから、私は良い嫁ではないでしょう。なぜなら、夫を1人、韓国に置いているのですから。

ある面では子どもたちに申し訳ないでしょう。お母さんが忙しいから、家にだけいるお母さんのようにケアしてあげることもできないでしょう。でも、私がどうすることができるでしょう。私は外で働いているのだから。夫に対しては、一緒に暮らしていないため、私の手で食事を作ってあげることができないのは、申し訳なく思うこともよくありましたよ。

フィリピンに暮らす周囲の韓国人は私たちの家庭を理解できないと言っていました。夫婦は一緒にいるべきであると。でも、子どもたちの教育のことを考えると、そう選択せざるをえないということもあったのですが、なかなか、韓国的な考え方では分っても

らえないでしょう。夫に対して申し訳ないと思う気持ちもあって、私の心の中では、痛みをおった部分の一つですよ。韓国社会では、みんな女性が男性をケアしてあげないといけないのに、そうしてあげることができないから、申し訳ないでしょう。だけど、最近では、同じ立場になれば、自分もそうするだろうと、友人の理解も得られるようになってきました。

彼女は、夫と一緒に暮らすことを選択しないままであることから、多くの葛藤に悩んだ。韓国の伝統的なジェンダー規範からいえば、夫の身の回りの世話もしない嫁という周囲からの批判は厳しいものであった。

しかし、彼女を精神的な迷いから救ったのは、神様を信じて生きるというキリスト教の信仰であったという。彼女の信仰とは、神様の目の前では、無条件、従順になるように、夫に対しても従順になることによって、自分の権利を探すということであった。彼女が意味している従順とは、自分が夫よりも下に位置するということでもなく、自分自身を抑圧することでもない。それぞれが果たす役割をすることだという。

役割というのは、状況によって変わることもありえるものだと思います。夫婦によって状況も違うと思います。女性のほうが社会的な地位が高い場合もあれば、収入が多い場合もありえるでしょう。韓国社会はそういう女性を受け入れ難いのです。洗濯といえば、無条件、女性がすること、というのではないですよ。でも、韓国の社会では、主にそのように考えられているでしょう。なぜなら、そっちのほうの素質は女性のほうにあると思われているからです。自分の素質や、能力によって、分担できればいいのだけれど、韓国社会では、家事は女性の仕事、外の仕事は男性というように区分されているから、トラブルが多いでしょう。それはまだ、私たちの開発されていない認識とも言えると思います。だから、それぞれの状況によって、各自の役割を着実にすればいいのです。私は長い間、そのように考えることができませんでした。

彼女にとって、フィリピンでの暮らしは、性別における役割分業について疑問点を抱くようになっていった。女性だからこそ、しなければならないという義務に応える生活ではなく、今の自分ができることに取り組むことが、彼女にとっての役割であった。また、離れて暮らす夫と、個として対等な関係を維持していく上で、必要な意識の変化であったの

だ。

③嫁役割から解放されたフィリピン生活

〔事例 7〕 50 代、女性、自営業、結婚期間 26 年、フィリピン滞在歴 17 年

彼女は、夫と幼なじみで、子どもの頃からいつも一緒に遊ぶ中であった。家族ぐるみのつきあいではあったが、彼は長男で、結婚となると嫁としての役割は彼女にとって過重であった。

私は夫と幼なじみですよ。幼い頃からいつも一緒に遊んでいました。1977 年に結婚しました。フィリピンに来る前は、長男の嫁だから、しなければならないことがあまりにも多くてたいへんでしたよ。義父は亡くなっていましたが義母がおられるので。婚家から抜けだしたくてね。韓国にいた時にはあまりにも仕事が多いので。義母からも小姑たちからもいろいろと要求されました。夫は私がしたいことをさせてあげたいと思っても、それができなかったのですよ。

子どもにはなかなか恵まれませんでした。義母は長男の嫁は、必ず息子を産まなければならないと言っていました。結婚して 6 年後に娘が生まれました。それから 4 年後に息子が生まれました。結婚後 10 年目にして、息子を授かったのです。なかなか子どもができなかったので、息子はもう産めないのではないかと悩んだこともありました。フィリピンに来てからはそういうことから自由でしょう。婚家からの逃亡とも言えますね。

このように語る妻は、韓国にいた時には、嫁として責任が過重であったという。なかなか妊娠しなかったため、長男の嫁としての責任を果たすことができないことに負い目を感じていた。夫は、嫁としての役割を果たすことは当然視していたため、妻がどんな心境であろうとも、改善できるように動くことはなかった。フィリピンに来てからの生活を次のように語っていた。

家事役割分担は、フィリピンに来てから夫はやはりせず、これまでどおりです。フィリピンに来てからはヘルパーたちがいるから。フィリピンは当然のごとくヘルパーがいるように社会ができているから、かえって、ヘルパーがいない生活している外国人はとてもおかしく見えるのですよ。

家事をフィリピン人のヘルパーと分担できるようになって、時間にゆとりができましたが、この社会はいろんなことをできるだけの社会ではないのですよ。行く所がないのですよ。まず、外国人ができる仕事が少ないです。外国人の女性ができる仕事は少なく限られているので、何かしようと思ってもできないのです。それはどうしようもないのですよ。

彼女自身が、自分の生き方の変化について次のように語っていた。彼女が毎日接するフィリピン人は、メイドであった。子どもが幼い時から、ずっと一緒にいる。子どもたちは大学生と高校生になった。フィリピン人のメイドとは、子どもたちの成長と一緒に喜び合ったという。家族の一員として考えている。

フィリピン生活で生きがいを感じたことは、韓国にいた時よりも私の生き方、心が変わりました。この国の人たちの考え方からたくさんのことを教わりました。この国の人たちの習慣や思考方式を批判的に言う人もいますが、私はそのように考えなくなりました。この国の人たちの生き方もとてもよいものだと思います。

例えば、こんなことがありましたよ。ヘルパーが里帰りをした時のことです。その時、月給は400ペソを払っていました。ヘルパーは、月給よりも高い船のチケットを買っていたのです。私は驚いて、なぜお金の節約をしないのかと聞きました。ヘルパーは1年に一回しか実家に帰ることができないから、デラックス券を買って、里帰りの道中も楽しみたいからだと言うのです。また働いてお金を稼ぐから、これでいいんだと言うのです。私はその考え方に驚きました。韓国へ帰国する時、私は少しでも安い航空券を買っていました。到着時間が真夜中だったりして、空港に迎えに来てくれる家族にも迷惑をかけていました。

私はヘルパーよりもずっとお金持ちなのに、本当のお金持ちはヘルパーのほうだと。私たちはお金があっても使い方がわからないのですよ。お金の使い方を教わりました。これは例えばのことですが、そんなふうに、物事の考え方が幅広くなっていったのです。

また、彼女は、物事のとらえ方、考えた方が柔軟になるにつれて、こうでなければならぬという考え方から自由になったと語る。子どもたちの育つ環境も韓国よりもよかったと話す。

この国に来てから、私の心は自由になりました。子どもたちもちゃんと育ってくれて。韓国で大きくなっていれば、あまりにも情報過多のため、知らなくてもいいことを知ってしまうでしょう。習ってはいけないことまでも次々とテレビやニュースで、目にしてしまうことでしょう。教育では競争が激しくて、賢くなっているかもしれませんが、純真ではなくなっていたことでしょう。フィリピンで子どもたちは、学校、教会、家しか行くところがなく、心が素直です。

フィリピン入国後は、夫婦の関係のあり方に変化がもたらされた。夫はフィリピンで貿易関係の仕事をしてながら社会組織活動の会長職に就いている。韓国では、妻は専業主婦であったのが、フィリピンでは社長である夫を支える副社長という立場になった。

夫婦ともにクリスチアンのため、毎週日曜日には家族そろってコリアン対象の教会に通っている。彼女はまた、フィリピン人シスターからタガログ語を学び、また、子どもと一緒に美術教師をしているフィリピン人から絵画を習うなど、自主的に生活を送るようになった。妻は夫の社会活動に関わる姿勢について次のように語っていた。

義父母は慈善活動に携わっていた方です。夫も両親の影響を受けていたのでしょう。でも、韓国にいた時には、仕事ばかりでそのような活動をする時間を作ることはできないでいました。元々は関心のあったことがフィリピンに来てからできるようになったということでしょう。

また、夫婦、親子関係の作り方について次のように語っていた。

夫婦、親子の関係で大切にしていることは、各自の個性を尊重することです。相手が指示して、そのようにみんなが動くよう言われてもできないことです。みな考えを同じようにしてしまうことは無理が出ます。個人を尊重できる関係づくりを努力しています。

夫とはお互いに尊重しあえる関係へと変化したのであった。

2. 持続型

この持続型では、「C型 家族志向から家族志向へ」と、「D型 キャリア志向からキャリア志向へ」を考察する。

ジェンダー関係が、フィリピン入国前とほとんど変わらないまま持続している型について考察する。C型にあてはまるのは6人いた。夫との関係が変わらなかったのは5人いる。また、結婚当初から、もともと夫婦の関係が同等であったというのは1人いる。

(1) C型 家庭志向から家庭志向

①性別役割分業の維持による安定した夫婦関係

〔事例 8〕40代、女性、自営業、結婚期間18年、フィリピン滞在歴12年

1980年代、米国留学中に彼女はフィリピン人男性と知り合った。彼女の母親は3姉妹を米国へ留学させたがっていた。彼女は特に目的はなかったが、ファッション関係が好きであったため、留学中はデザインの勉強をしていた。

母親は国際結婚を泣きながら反対したが、彼女の決意はゆるぐことはなかった。アメリカで2人の子どもに恵まれた。子どもたちの教育を考えたとき、父親の国であるフィリピンへ行くことを選んだ。なぜなら、米国では夫婦が共働きをしなければ生活することが難しく、子どもを預ける場所もなく、子どもを育てながら働くことが非常に困難であったという。フィリピンでは、夫の家族に助けられながら、安定した環境で子育てができると考えたためである。

彼女は、幼い頃から、女性は結婚したら夫に従うべきであると親から教えられてきた。そのように考えていたことが、結果として結婚生活を続けることができたという。

幼い頃、結婚したら妻は夫に従うべきであると親から教わりました。だから、結婚生活が続けることができたのだと思います。それに、信仰がなかったら、あまりにもたいへんだったと思います。神様に対する信仰があったから。いつの日か、夫が私の望むことを私のためにしてくれるだろう。そのようにいつも希望を持って、絶えず祈祷しながら生活してきました。あまりにも若い時に結婚したので、結婚がどういうものなのかわからないまま生活がはじまりました。最初はとてもたいへんだったでしょう。

私が望むことはこれなのに、夫はこれを望んで。これはよくないと決める前に事が進んでしまう。私はそのように育ち、夫もそのように育ってきたからなのでしょう。

それでも、私たちに大きな問題もなく生きてきました。それは、韓国人たちは夫に対して従順にならないといけない、そのように聞かされて大きくなったからだと思います。私が大きくなる時はそうでしたよ。女性は夫に対し従順にならないといけない。女性は大きくなったら良い夫に出会い、夫の下で従順に生きること、それが最高のことであると。そのように教えられたのですよ。だから、そのような考えがあつたので、夫が私の意見と違うことがあっても、私が我慢しないといけない、私が従わないといけない、そのようにしてきました。

そのようにしていたら、ある時、夫が私の意見を尊重するようになり、そのように、何ていうのかな、私がこのようなアイディアがあると話をすると、そのアイディアに比重をおいて考えてくれて、そして、多くの場合、私の考えを受け入れてくれるようになって。そして、今、私たちは結婚して17年、18年と経てきたから、年数も重ねてきたからそうなのでしょう。最初はもちろん、たいへんでした。

彼女は、一個人としての自分の気持ちをみつめる前に、妻である自分のとるべき行動を、韓国の伝統的な役割に従って判断し、夫を尊重するよう気遣って生活してきた。

フィリピン人の義母、小姑たちとのコミュニケーションも困難の連続であつた。自分の意見を主張すれば、ぶつかるだけであつたため、どんなに苦しい思いをしても、嫁としての立場を自覚し、相手の言動を許すことで気持ちをコントロールしてきたという。

嫁ぎ先との問題はどこにでもある程度はあるのですが、ここに暮らす韓国人の場合は、義父母と一緒に暮らしている人はほとんどいませんよ。韓国へ帰った時に訪ねたり、義父母がフィリピンに遊びに来たり。義父母との関係がそんなに大きな問題になることはないでしょう。一緒に暮らすとなると、それが問題になるのでしょう。離れて暮らせば、大きな問題にはならないのだから。

最初は、私が悩んでいることを夫が理解できなかったもので、私は寂しい思いをしました。今は、私が話す前に夫のほうからわかってくれるようになって。

場合によっては、怒りが何日か続く時もあるれば、若干のことであれば一日過ぎればなくなり。最初、数年間はストレスのため体調を崩すこともありましたよ。信仰生活を熱心にするようになってからは、相手を許さないといけないと思うようになりました。許さずに怒りを持っているから、私が悲しくなるのであって。ストレスを受けて、怒りを

よくあらかわすことができなかったのですよ。でもそこで神様が気づかせて下さったのは、許しなさいということです。それができるようになるには長くかかったのですが。なぜなら、心がとても痛むから、でもそうしようと決めた後からは、生活が落ち着いてきて、相手を理解する心が生まれてきて。私はやっとそのような考えになりましたよ。姑、小姑たちを思い、祈祷するようになって、3〜4年ぐらいになりますね。

フィリピンに来てから最初の7年間、自分は一人だと思いながら暮らしていましたよ。事実、フィリピンには知っている人もいないし、親戚もいないし。この7年間は韓国人との交流もなく、友達もあまりいなかったし、それで一人でいたのですが、振り返って考えてみると、一人だから、誰か頼ることのできる人もいないから、神様にまず頼るようになりました。

このように彼女は、フィリピンでの国際結婚の暮らしの中で、幼い頃に韓国で学んだ女性の役割を実践することと、彼女自身の信仰心によって、夫婦関係、姑、小姑との関係をきりぬけることができたと考えている。普段の生活では、仕事上もプライベートにおいてもフィリピン人との接触が多い。彼女は、韓国とフィリピンの女性の違いについて次のように話している。

フィリピンの女性たちはとても強いと思いますよ。家庭でも義母、小姑2人、夫の4人のうち、女性が3人でしょう。強いですよ。雇用している従業員も男性よりも女性が多いですよ。

フィリピン人女性は社会活動をより多くしているみたいですよ。私はそう考えています。もちろん、私が韓国を出てきた時は、私が考えているのは20年前なのです。今はもちろん韓国はたくさん変わっているだろうと考えますよ。韓国社会についてはよくわかりません。でも、私が考える時、韓国で女性が大統領になるなんて夢を見ることもできませんよ。

今、ここで暮らしている人たちは大部分、そうでしょう。私の年ぐらいになった人たち、40歳をすぎているのですが、韓国では離婚をいいこととは考えず、この年なのにどうせすることもできないというように生きていく傾向が多いみたいです。子どもたちもいるし、他人の目もあるし。それにまた、フィリピンに暮らしている韓国人の主婦たちは、経済力のある人たちはあまりいないでしょう。ほとんど夫に頼っているでしょ

う。だから、それも一つの大きな問題になるのですよ。

何か、自分が、これ以上、こんな生活は嫌と考えて、新しい生活を始めたいとしても、できないのが経済的な理由が大きいですよ。だから、子どもたちのことを考えて、あれもこれもとを考えて、家事をして。なんとなく過ごしながら、時間が過ぎているのでしょ

う。

彼女はフィリピン人と結婚したことで、知らず知らずのうちに韓国的な考え方だけでなく、多様な価値観を学んでいたことに気がついた。フィリピンで暮らすコリアンをみながら、時々、礼儀がないと思うことがあるという。特にコリアン男性の女性に対する態度には驚くという。そのようなことを感じる時、フィリピン人男性と結婚したことに安心感も得ている。彼女の夫は子育てにも積極的である。

フィリピン人男性はよくできるのだなあと、そう感じますよ。現実には私の立場上の問題も抱えることがあります。多くの韓国人は韓国人と結婚するでしょう。私の夫は韓国人ではないから。夫は韓国語ができないから、韓国人が集まる場所に一緒に行っても会話ができません。交流できないから。そうだからと言って、私一人で出かけることもできないのであって。私一人が外へ出て活動することも可能ですが、夫婦が一緒に行かないといけない状況では、たいへんなことがあります。

彼女はフィリピンに来てから、コリアンとの接触はほとんどなかった。しかし、フィリピン人とコリアンの国際結婚も増え、社会組織も結成されたことから、彼女自身も、積極的にそのような活動に参加するようになった。国際結婚をした人たちとのつながりの中で、夫婦そろって、また子どもたちも一緒に過ごすことのできる新たな場所を得ることができるようになった。固定化された夫婦関係の維持ではなく、社会組織という場を通して、夫婦の関係が多様な形でつながりあえるよう変わっていった。彼女の夫は、国際結婚の会の初代会長に選ばれた。

②変わらない夫との関係

〔事例9〕30代、女性、主婦、結婚期間9年、フィリピン滞在歴5年

彼女は、韓国では語学学校で講師をしていた。海外で就職した友人を頼って、彼女自身

も海外就労を考えたことがあった。しかし彼女は結婚していたため、家族から反対され断念したことがあった。

フィリピンには夫の仕事のため入国した。子ども3人は、フィリピンの小学校、幼稚園へ通っている。子どもたちは、隣家のフィリピン人のお婆さんと親しくしていたが、オーストラリアへ行ってしまい、寂しい思いをしているとのことだ。

子どもたちの世話をするフィリピン人のベビーシッターとフィリピン人運転手を雇っている。彼女は、ベビーシッターと運転手から、「なぜ仕事をしないのか」と聞かれたという。彼女は、子どもが小さい時は、子どもの世話をすることが大切だと考えている。今は、子どもの学校の行事の手伝いに参加したり、雑用が多い。しかし、フィリピン人運転手から、なぜ働かないのか、と質問されて自問したという。フィリピン人女性とコリアン女性の違いを次のように語っていた。

フィリピン人女性は経済活動に積極的です。子どもの教育は他人や、家族に頼っているように見えます。フィリピンは、少しのお金でメイドを雇うことができるので。韓国人のお母さんたちは、子どもが小さい時は、働くことよりも、子どもの教育を重要視していると思います。でもフィリピン人から韓国人女性を見れば、家の事をしているというのではなく、仕事をせずに遊んでいると見ているようです。家の中のことは見えないことですからね。

彼女は働きたい気持ちもあるが、それよりも3人の子どもたちの育児に専念している。家庭では、国語教育を重視し、童謡を教えて韓国語に慣れ親しむように工夫している。娘たちが自分は韓国人だと自覚できるよう、意識して接するようにしているとのことであった。韓国語、英語、タガログ語の順にほとんど不自由なく使いこなすとのことだ。夫との関係については韓国にいた時とほとんど変わらないと語っていた。

ほとんど変わりませんよ。韓国にいた時、夫は家事を助けてくれました。ほとんど同じです。韓国では子どもは一人だけだったから、ここでは子どもも増えたから、助けてくれます。夫が家事、育児を「助けてくれる」と考えること自体、家父長的なことでしょう。

また、韓国社会そのものが男性中心であることを話していた。

韓国社会は、男性中心だと考えます。いまだ、男女平等はたいへんだと考えます。構造自体がそうなのです。決定権は男性側でしょう。男性に依存しているのです。韓国政府の育児政策が変わることによって、女性の負担が少なくなれば、もう少し現実的な平等が来ると考えます。

子どもたちがもう少し大きくなったら、教育学の勉強をはじめて、教育にかかわる仕事を始めたいと最後に語っていた。フィリピンで多くのコリアンの子どもたちを見ながら考えたのだと言う。韓国語が難しく韓国学校の授業についていくことのできない子どもたちも大勢いるとのことだ。そのような子どもたちに、なぜ韓国語を学ぶ必要があるのか。また習得体系を整理して、どのように学習したらいいのか教えることができるようになりたいとのことであった。

(2) D 型 キャリア志向からキャリア志向

このキャリア志向からキャリア志向へ、というのは女性が韓国でもフィリピンでも仕事をしている人たちのことである。D 型は 15 人の女性がいる。

韓国にいた時から仕事をしていたため、夫は妻の仕事に理解を示し、比較的、夫と話し合える関係を作ってきたというのは、7 人いる。フィリピンに来てから、男女平等観が夫の行動に見られるようになったというのは、5 人いる。また、韓国にいた時と同じように夫が権威的であるというのは、3 人いる。

①男女平等観の芽生え——夫も家事をするようになった

[事例 10] 40 代、女性、専業主婦、結婚期間 23 年、フィリピン滞在歴 9 年

彼女は、1994 年 10 月にフィリピンに入国した。韓国では、16 年間、高校の教師をしていた。夫と娘が先にフィリピンへ行った。彼女は仕事を辞めたあと、息子とともにフィリピンへ渡った。長女が中学 1 年生、長男が小学 5 年生の時であった。娘はマラリアに感染し生死をさまよったこともあったという。その後は大病に罹ることもなく、フィリピンの大学に通う女子大生である。息子は韓国の大学に進学するため、韓国へ戻り受験勉強中であった。

彼女にとって韓国で、嫁として、妻としての役割をこなし、フルタイムの仕事続けることはたいへんなことであった。家事、育児を義父母に助けてもらいながら、どうにかのりきってきた。働いていた当時のことを次のように語っている。

結婚前は、仕事を続けるか、もしくは辞めて家庭に入るかといったことを考えたことはありませんでした。なぜなら、結婚後も当然、仕事をするものと考えていたのです。でも、結婚した当初は、反対されました。夫も昔の考え方の人だから、女性は結婚したら仕事を辞めて家のことをしないといけなと。最初は反対されましたが、仕事を続けることができました。

今も韓国にいたら働いていたでしょう。義父母がたくさん手伝ってくれました。それでも、なぜか、私一人が忙しいのですよ。夫はなぜ私が忙しいのかわからないのですよ。家に帰ってくればいつもすべて整っていないといけな。私は、いつも掃除をこまめにするようにしていたのだけれど、万一掃除をしなかったら、女が家もきれいにできず、とそういうことを言われてしまうのですよ。だから、仕事が山積みになっても、家事も残っていて、私ばかりが忙しいのですよ。とてもしんどい思いをしていました。喧嘩して、自分の意見を主張しても理解してもらうことはできませんでした。

韓国では女性の仕事と言われることを男性がするというのは習慣的にないですよ。男性が台所に入るといっはないですよ。できないですよ。なぜなら子どもの頃からしななくてもいいように育ってきたのだから。

このように彼女はフィリピンに来る前まで、仕事と家庭の両立をなんとかこなそうと懸命に生活してきた。フィリピンに来た当初、彼女が毎日していたことは、道を覚えるまでマニラ市内をよく歩いたことである。彼女の専門が地理ということもあつて、くまなく歩いて市内の地理を覚えることが楽しみの一つとなっていた。

フィリピンに来てから3年間はジープニーに乗って、毎日、マニラ市内を歩きまわりました。ジープニーはほとんど乗りつくして、どこからどこまで連結しているのか、詳しくなりました。家族から1人で行くのは危ないから行くなと言われても、何か必要な物を市場で買うのに、怖がっては何もできないでしょう。運動靴を履いて、無事に行き来できるよう、いつも祈りながら歩きました。韓国人女性の中で、マニラ市内の地

理を一番詳しく知っているのは私ではないかと思います。

多くのコリアンがしているようなフィリピン人の運転手を雇って行きたいところへ連れて行ってもらうのではなく、彼女1人で動くことができるよう、ひたすら歩いて道を覚えた。このようなコリアン女性は実際にそう多くはない。

彼女の生活面で変化したことの一つは、夫が家事をするようになったことである。性別に関係なく役割分担をできるようになった。夫がなぜ家事をするようになったのか。その理由を次のように話している。

フィリピンに来てみると、女性の仕事を男性がしていることは、とても自然なのです。夫は私がいなければ台所に入り、汁物も上手に作るし、清掃もきれいにし、洗濯物も取り入れるようになりました。そんなふうに自然に変わりました。私の家だけでなく、何軒か他の家でも同じようになったと聞きますよ。夫のすべてが変わったわけではないけれど、韓国でそういうことをするのは、男性としては心に負担があったのですが、ここでは負担なく自然にしていますよ。そんなふうになりましたよ。

フィリピンでは、まず韓国のようにあちこち体面を、人の目を気にしなくてすむでしょう。韓国ではしたくても手がまず動かなかったのに。心が動きませんでした。近所の人たちの目が気になって。ここではそういうことがないでしょう。フィリピン人の男性は自然に家の事もするから。それは人間の自然な姿のようです。夫は韓国では市場にもあまりいかなかったのに。ここでは、百貨店とかに行きながら、帰り際になると市場で何かみるものはあるか。市場に行ってみるか、とこんなことを自然に言うようになりました。

このような夫の態度の変化について、彼女はまた次のように話していた。

楽になりました。夫の思考方式は、女性だからこうしなければならないというのがあったのですが、今はないのですよ。同等な人間としての関係です。年をとったからそうなのかもしれないけど友達のような関係に。関係がよくなりました。韓国では他人の目を気にして、家父長的な人であったのですが、フィリピンでは家事をするようになったり、思考方式がたくさん変わりましたよ。会話をする時も言葉を大事に使うようになりました。

ました。

韓国ではものすごく忙しかったのですよ。パートで家事をする人にも来てもらっていましたが、子どもは小さかったし、私は職場に行っていたし。休む暇なく、とても忙しかったのです。でもここに来てみて人が生活するみたいです。ああ、これはいいなあと思います。生活が、まるで水が流れるように自然になって、このように生活したら人間らしく生活できるのではないかと、そんな考えになりました。

韓国へ行けば、全部早く、早くとしなければならないでしょう。フィリピンに来た頃は、なかなかその考え方も抜けなかったのですが、今は、どうしてそんなに急いで生きないといけないのか。急いでもたった5分の差しかないのにと考えるゆとりができました。時間の使い方が変わりました。

夫とは、今は平等な人としての関係です。女性、男性として生きるというよりも人として。ギブ・アンド・テイクですよ。韓国にいた時には、心配ごとが多くて、学校へ行けば家が心配になるし、家に帰ると学校のことが心配になるし、だから仕事が多いのですよ。私はあまりにも疲れていました。

それと生きがいというのではないけれど、韓国では忙しく生活して、ここでは楽しく生活しているから、心が楽でしょう。お互いに生き残るための競争がないため、ストレスを受けなくなりました。

ここでは、夫は他人の目が気にならなくなったのです。私がより主張を多くするほうだから、私の意見に合わせくれるのでしょう。韓国社会はそれができなかったのですよ。若い世代の人たちはできるのでしょう。私たちのように年をとった人たちはできないのですよ。それが、フィリピンでは、うまくいくのですよ。変わりがたくて変わったということだけではなく、自然に流れるようにそうになりました。だから社会構造がそのように怖いものだと思います。社会構造自体がそうになっているから、私たちもそうならざるをえないのですよ。

夫は他人の目が気にならなくなったという。男性は家事をするものではない、男性はこうあるべきという考え方から解放されることになったことには注目したい。

彼女の生活が楽になったのは、文化的な影響だけではなく、フィリピンの気候や交通機関もまた彼女の家事を楽にしてくれるものであった。

四つの季節のある韓国と、熱帯のフィリピンでの暮らし方は違うものですね。まず思ったのは、夜の過ごし方が違います。フィリピンの夜空は美しい。子どもたちも空がとてもきれいだと話していました。韓国は、夜になって日が沈むと全ての気が死んでしまうように感じます。みんな寝ないといけないし。フィリピンは、おかしいことに熱帯地方だからか、夜になると活気があふれるのです。ここは日が沈むと同時に活気が湧きあがってくるような、そんなふうに思いました。それと、とってもいいと思うことは、韓国では服を季節ごとに取り替えるのに忙しいでしょう。ここでは衣替えをしなくてもいいから。私は女性だから、家事がとても忙しかったのです。

それにここでは、家の前からトライシクル [バイクもしくは自転車の横にサイドカーのついたもの]、ジープニー、バスが連結していて、買い物に行くのがとても便利です。韓国では近所の市場に行こうと思ったら、近い距離だと車に乗って行く事ができません。物を買ったら大きな重たい荷物を手で持って帰らないといけません。ここはトライシクルがあるから、家の前までちょうど連れて帰ってきてくれるでしょう。とても便利にできているなあと。トライシクルにはドアが付いていないので、両手に荷物を持ったまま、乗り降りできるのです。乗り物のドアを開ける必要がないのです。ほんのささいなことでしょう。でも、乗り物にドアがあるかないかなんて、小さなことにすぎないと思われるかもしれませんが、韓国では重たい荷物を抱えることがそれだけたいへんなことだったのですよ。私一人で家事するのだから、韓国では女性がするのだから。だからいつも忙しい。子どもたちも幼いし。だからここに来て、そういうことがとてもよいことに感じられるのですよ。韓国では車を持っていたても、不便だったのですよ。

彼女は住み込みのフィリピン人メイドを雇っていたこともあった。しかし、家の中の物を勝手に持ち帰られたり、コミュニケーション上のトラブルがあったため、辞めてもらうことにした。夫婦で家事を分担というところまではいかなくとも、夫も台所にたち、料理、掃除、洗濯もするようになり、彼女1人で背負う必要はなくなった。家庭内では心地よい生活を送ることができるようになったのである。そのような変化を感じながら、彼女はフィリピン人女性とコリアン女性の違いを次のように話している。

社会的な役割をみると、フィリピン女性たちは韓国人女性よりも、ずっとパワーが強いでしょう。家庭でも女性の地位が高いように見えます。外で働いているフィリピン女

性たちの場合、女性だけが家事をするというのはあまり多くないですよ。メイドを雇うことができるということだけではなくて、夫たちも当然のごとく料理をして、家事をしています。自然に。

韓国では、職場へ急ぎ、帰宅を急ぎ、市場へ急いでいく。時間におわれて生活しています。フィリピンの人たちは、よりよい生活を送っているように見えます。

それと、私たちは異性交際の場合も儒教社会の影響があるのだけれど、フィリピン人は結婚しても性的な関係のためのボーイフレンドをつくるのをおかしいことと考えないのですよ。最近の若い人たちは結婚前にもそういうことはありえるけれど。韓国の女性の場合、結婚後はボーイフレンド、ただの友達も作ることも許されない。夫が嫌がるからできないのだけれど。昔から知っている友達であっても、友達として認められなくて、喧嘩の元になるのですよ。私たちの世代まではそうなのです。フィリピンでは違いますよ。男友達も自然に友達なのですよ。私たちの儒教の文化との違いではないかと思っています。掃除の仕方、シャワーを浴びる時間も違って、この国で暮らしながら、違う文化を理解することについても学びましたよ。

彼女は、フィリピン社会を理解するよう努力してきた。そして、2004 年からは、家内工業をはじめめるため準備をしているところであった。そのためには、タガログ語を習得しなければならないと考えた。「比韓文化財団」では、週 1 回、フィリピン語教室が開催されている。そこに彼女も参加し、タガログ語の勉強もはじめていた。

また、ボランティア活動に積極的なかわりを持っている。「韓国・フィリピン家族協会」が主催するフィリピン人妻、夫、その子どもたち対象のハングル教室で、彼女はボランティアで韓国語の講師をつとめている。

ほかにも彼女は、朝鮮戦争のときに国際結婚をした韓国の女性たち、今ではお年寄りになられた方々と一緒に聖書の勉強会をしている。クリスチャンの彼女と友人が企画した。年齢は 60 代から 70 代の方々である。女性同士、フィリピンでの苦労を分かち合える場にしたいと彼女は考えている。もともと韓国でも、奉仕活動をしていたという。しかし、フィリピン入国当初は適応するまで日々の生活で精一杯であったため、何もできなかった時期があったという。

私がどんなにたいへんな暮らしをしていますが、人を助けて生きていけないといけない

もののなのに、フィリピンに来てからはよくできなかったのですよ。できない自分が人間のように思えなかったのです。

このように彼女は話していた。フィリピンでの生活が順調に進んでいるが、子どもたちのことが気がかりでもある。子どもたちはフィリピンで育ちながら、大きな葛藤はないが、よく考えてみると、韓国とフィリピンではいろいろな面で違うことがたくさんあるため、「韓国人でもなく、フィリピン人でもないような感覚を身につけてしまうと、国際的な迷子になってしまうのではないかと思います」と話していた。

子どもたちは韓国で生まれた。しかし、フィリピンで成長しているため、自分はいったいどの国の出身なのか、アイデンティティが不安定になるのではないかと、彼女は憂慮している。英語が堪能になるのと同時に、韓国語も自由に使いこなせるように、また、韓国の食文化の中で育つことができるよう、家庭内で配慮しているという。

彼女の母親は病のため死期がせまっているという時期でもあった。母の犠牲によって今の自分があり、離れて暮らす母を想うと切なくなると話していた。というのは、母親の世代は、より男女不平等の中で生き、心の痛みを多く抱えてきたからだという。

今後、フィリピン生活でしたいことは、短期の語学研修生やコリアンの店舗などが一同に集まり、コリアンの子どものための教育もおこなうことのできる施設をつくりたいと夢を語っていた。彼女は、夫婦の関係の変化の中で得た心のやすらぎと、新たな展望を見いだしていた。

②決定権が夫にあるまま芽生えた平等意識

ここでは、韓国で暮らしていた頃に身に着けた伝統的な性別に基づく役割をフィリピンにおいても続けることによって、安定した夫婦関係を築くことができるようになった例を考察する。

〔事例 11〕 40代、女性、自営業、結婚期間19年、在フィリピン6年

彼女は韓国では7年間、中学校の教師をしていた。夫も義父母も彼女に対して仕事を辞めて、家庭を重視するように言い続けた。しかし、彼女は、自分には仕事が必要だと考え、教職生活を断念することはなかった。子どもたちは義父母が世話をしてくれた。

夫はビジネスのため、韓国とフィリピンを行き来していた。ところが、1995 年に甲状腺の癌を患い手術をすることになった。無事、手術は成功したが、いつ再発するかもわからない死への不安を抱え、残りの人生をいかに生きるべきか考える転機となった。そして、夫は第二の人生をフィリピンで生きることを考えた。

フィリピンでは、土木工事で使用する機械を韓国から輸入し、修理したものを現地で販売している。また、コリアン対象にキムチ専用の冷蔵庫も販売している。夫が 1995 年に先にフィリピンに入国し、1997 年に彼女は仕事を辞めて、2 人の子どもと一緒にフィリピンに入国した。

子どもたちはインターナショナルスクールに通い、卒業後はアメリカの大学へ留学する予定である。彼女は将来、子どもたちが韓国へ帰っても、もしくはアメリカかフィリピンで暮らしても、能力を生かすことができるよう、しっかりと学力をつけさせたいと考えている。

彼女は夫の事業の運営に携わり、副社長として仕事をしている。フィリピンに来た目的を次のように話している。

私がここに来ることになったのは、夫が健康ではない状態で、韓国から逃避というか、楽に生活できるように。ストレスをあまり受けず、そのようにしようとフィリピンに来ました。少しずつ、少しずつ、よくなってきていますよ。私の目的としては、子どもたちに勉強をさせることと、夫の事業を助けてあげないといけないという考えから来ました。

彼女は、韓国で自身の専門分野をいかすことのできる職業に就いていたが、それを辞めフィリピンへ来ることになった。教師として仕事をしてきた彼女にとっては、大きな変化であった。フィリピンに来てからも性別による役割はそのままであることを次のように話している。

韓国人男性が普通に考えることは、妻は家庭にいないといけないということです。40 代以上の主婦たちも、ごく普通にそのように考えて、義務感を持っています。だから、子どもの教育は、お父さんよりもお母さんのほうに責任があると見ることもできるでしょう。家庭内部のことも私が責任を持たないといけなくて。一般的に子どもがちゃ

んとしなければ、夫から怒られるでしょう。例えば、このようにしか育てられなかったのかと叱られるのです。

私は夫がしていることを補助する役割をするだけのことでしょう。結局、活動は夫がして、外で人に会ったり、仕事を持ってくるとかは、夫がすることであって。私は、夫の下で夫が仕事をできるように助けて、書類を整理して、資金の整理をして。その程度でしょう。一緒に仕事をしてみたら仕事も分担することになるでしょう。大部分、家庭の仕事は主婦がするでしょう。夫たちは自分の仕事をするでしょう。

世代によって考え方が違うと思いますが、40代以上の主婦は家庭で忠実に働いて、夫は外で職場生活をして、家族全員を食べさせて生きていかないといけない。夫が養育、教育費とかを準備しないといけない、そういうふうに考えています。

このように、フィリピンでは、夫の事業を側で支え、また子どもたちが勉強できるよう、環境づくりに専念している。この状況について、彼女は、韓国においてもフィリピンにおいても、同様に男性中心の社会の中で生きていることを感じている。

フィリピンでも、男性中心の社会で生きていると思います。男性中心社会、この言葉そのままですよ。特に韓国は、男性中心、男性優越主義でしょう。私の世代よりも、もう少し前の世代までは、男性のほうが学ぶ機会があり、女性は少なく習ったため、それは、完全に女性が男性に従属する関係でした。私たちの世代では、お父さんも私も同じように大学を出ていますし、すべてのことにおいて、レベルがほとんど同じです。

しかし、長い間、男性中心の根が受け継がれていますよ。男性優越主義のため、意見がぶつかることが多いでしょう。だから、私の場合は譲歩して、我慢しているでしょう。次に関係がよくなったら、あの時、このようにしたことは正しくないでしょうと気持ちを伝えて、お互いに理解できるようにするでしょう。女性のほうが、一步、男性の後ろに立つことが結局まるくおさまるのですよ。折衷しないとイケないでしょう。対話して問題を取り除かないとイケないでしょう。そうでなければぶつかるばかりだから。

彼女は男女観に関して子どもの頃から受けた影響は大きいものであったと考え、「男性優越主義をいつも学んで来て」と語っている。フィリピンに来てからも、最終的な決定権は夫が持っていると話す。しかし、フィリピンで生活しながら、夫婦の距離が近くなった

と認識している。韓国では、彼女のほうが夫を理解するようにつとめていたが、フィリピンに来てからはお互いにわかりあえるような関係に変化してきていることを次のように話している。

夫婦の間がより対等なレベルになったと思います。その理由はいろいろあると思いますよ。もちろん、環境も変わりましたが、年もとることでお互いに尊重しあうことができるようになったと言いましょうか。理解し合えるようになったというか、そのようになったのですよ。

具体的な例として次のようなことを話している。

韓国での生活は、大部分、お父さんたちは外にいますので、家族と一緒に過ごす時間がほとんどありません。土曜日、日曜日も。でもフィリピンは、土曜、日曜は家族の時間。ファミリー・デイというでしょう。家族で過ごす時間を作ることができるようになりました。それと、主に私たちが仕事で会う人は、韓国人よりもフィリピンのビジネスパートナーですよ。個人的に、お互い親しくしています。そのような方々は、大部分が家庭中心で、夫婦中心です。会合の時もそうだし。そのため、そういう部分についてはここで生活することにとっても生きがいを感じるというか。夫婦であるお互いの存在が貴重であることも深く知ることになりました。そんなふうに生活してきました。

最終的な決定権は夫にあるが、夫婦の関係が韓国にいた時よりも、はるかに対等な関係になることができたと話している。その要因としてもう一つ理由をあげている。

ここでは、私たちは外国人ですからね。例えば、お父さんに何か問題が起きた時、誰かに簡単に相談する相手がいないでしょう。ここでは主に私がその対象であり、夫婦間で十分に多くの対話をわかちあうことができるようになったから。だから、二人で問題を解決して進んでいくことができるのですよ。

そして、夫婦で仕事ができる基盤として、フィリピン人のメイドと運転手がいることを次のように話している。

メイドがいるので、私が会社に出てくることができるのでしょう。そうではなくて、韓国式なら、私が子どもたちを学校へ連れて行って、迎えに行つて、勉強をさせないといけないのですよ。でも、運転手もいて、家事をしてくれる人がいるから、私は会社に出てきて、お父さんを助けることができるようになるということでしょう。

フィリピンで暮らしながら、韓国の女性とフィリピンの女性の暮らし方の違いも感じている。フィリピン人女性の場合は、結婚後も働いている女性が多く、大統領も女性であり、市長も女性がしているなど、女性に開かれた社会であるという。このことについて、「韓国ではとにかく男性中心であるから、女性たちがフィリピンのように、社会で多くの地位を占めていなくて」と語る。また、そのような女性の社会的地位の違いもあるが、子どもたちが育つ環境の違いも話している。

子どもたちは、中学1年生と小学5年生を終えた時にフィリピンに来た。子どもたちには常に自分は韓国人であるというアイデンティティを植えつけるように接してきたという。インターナショナルスクールに通っている友人の家にも当然のごとくフィリピン人のメイドがいる。そのような暮らしは韓国ではほとんどありえないことである。その暮らしに慣れてしまって、自分のことを自分でできなくならないように神経をつかっているという。

長女は、中学生の時からフィリピンに来たので、韓国人としての姿勢が体全体に身に付いているので、ゆれることはありません。次男の場合は、小学生の時だったので、ゆれることがあります。友達をみると、水を飲む場合でもメイドが持って来て、薬もメイドが持って来てくれて、牛乳もメイドが持って来てくれて、すべて整えてくれるのです。私たち韓国人はもともとそのようには暮らしていないですし、そんなふうにしてもらうことは当然のことと考えないのですよ。だから、いつもあなたは韓国人だ。混同するなと、そのように植えつけていますよ。自分ができることは自分でするように。困っている人に手を差し伸べることのできる奉仕の心を教えたいです。

彼女の考えでは、フィリピンに住むコリアンはともすれば、フィリピンよりも生活水準が豊かな国から来たことからフィリピン人を無視する傾向にあり、そのような意識でフィ

リピン人に接するため、かえって、コリアンが被害を受けることが多々あるという。

仕事上、フィリピン人とのやりとりでも考え方を理解できず、苦勞がたえなかったことも話している。約束時間を守らなかったり、問題が重なり、フィリピン人に対して失望したり、反発することもあったという。外国に来て、こんなにも苦勞をしないとイケないのかと言いたくなることもある。しかし、フィリピン人の民族性の良き面も理解できるようになり、それなりに生きがいを感じることもあり、今後もフィリピンで暮らしていくことを望んでいる。夫は子どもたちに対して常にフィリピン人について次のように話している。

夫も子どもたちに常に話をしているのが、お前がフィリピンに住むのなら、フィリピン人を愛しなさい。フィリピン人を理解するように努力しなさい。ここは他国なのだから。嫌だったら韓国へ帰れということになる。この国に来て住み、フィリピンで住むことを望むならば、フィリピン人を愛し、この国を愛し、この人たちの文化を理解できるように努力しなさいと話しています。この言葉は正しいことだと思いますよ。この国の人たちを無視して、自尊心を傷つけるようなことをすれば、結局、外国人は損をすることになるのです。

彼女は、事業を平穩に進めつつ、子どもたちの才能を伸ばす教育を受けられるよう努力していきたくと話していた。そんな彼女の心の支えとなっていたのは、仏教でもある。

韓国にいた時は、時間を作ってお寺へ行き、祈禱していました。早朝の時間を利用するとか、1週間に1回お寺へ行く等、そのように暮らしていました。ここでは毎日、眠る前に祈禱して、会社に来てからも、時間がある時は祈禱して。そのようにしていますよ。今も忙しいですが、フィリピンに韓国のお寺が一つあるので、お釈迦様の誕生日のお祝いの時には行っています。他国だから、父母や友達を思い、懐かしくなります。他国に来て事業をすることは簡単なことではないですよ。とても雑多な説明のできない難しが多いのですよ。そのような時、宗教の力でなければ、耐えることができないと、私はたくさん感じています。

決定権は夫にあるというが、それでも夫婦が話し合い、問題を解決し、一緒に行きっていくことの意味を見いだしている。フィリピンでの生活は、夫が決定権を持つということに

おける意味合いが少しずつ変容しながら、夫婦の良好な関係へと結びついているのである。

以上、ライフ・ストーリーをみてきた。これらのライフ・ストーリーから明らかになったことについては、次章で述べたい。

第7章 まとめと結論

本研究における問題意識は、ジェンダーに基づく不平等な男女関係を海外においては、社会的・文化的な影響を受けながら、より平等な関係へと変容させることができるのではないか、ということである。これを解明するために、アジア域内の経済のグローバル化による一つの現象に着目した。それは、韓国企業のフィリピン進出に伴う家族単位の移動についてである。

仮説として、次のように考えた。社会、文化の異なる国において、コリアンの男性と女性がどのようなジェンダー関係を築くようになるのだろうか。ジェンダーに基づく役割は、個人の個性にあわせたものではないため、社会生活を営む上で、また家庭内において自己実現を阻むものとなる。コリアンの場合は、儒教規範がそれにあたる。コリアン男性も女性も、韓国社会から別の国へ居住先を移し、フィリピンという異なる文化に接触することになった。それは、家父長的な儒教規範が自己の思考パターンに取り入れていたことに気がつく一つの契機となる。

ジェンダーによって決定づけられている自身の地位と役割を再考し、自身の気持ちとは表裏一体にある矛盾にも気がつくことになる。自国を離れ、国境を超えるという体験を伴うディアスポラは、ジェンダーを演じなくてもよい生き方を選び取ることが可能になっているのではないか。そのような価値観の転換は、男女がより対等な関係性を作ることへとつながり、韓国ではなかった新たなジェンダー関係が創出するようになっているのではないか、ということである。

では、この仮説に基づいて、明らかになったことを次節で述べたい。「第1節 入国理由と移住の意思決定者」、「第2節 既婚女性のフィリピン入国の特徴——家族内の地位と役割の変化」、「第3節 フィリピン移住後のジェンダー関係」という項目にわけて説明する。

第1節 入国理由と移住の意思決定者

コリアンがフィリピンへ入国した動機をみると、性別によって異なっていることがわかる。夫側の理由は、商社の派遣駐在員、貿易などのビジネス関連や個人事業などがフィリピン入国の主目的である。妻側のほうとしては、夫の仕事のためとの答えが25人いる。夫婦が話し合ってお互いの必要に応じてフィリピンに来たというのは、10組いる。

韓国で妻が働いていた場合は、先に夫が単身で、もしくは、夫と子どもがフィリピンに
入国しており、妻は1年から2年以内に仕事を辞めて、家族と一緒に生活することを決断
している。そのようなケースは5人いる。

宣教師である妻がフィリピンへ赴任することになり、会社員の夫が仕事を辞めて、家族
全員でフィリピンへ渡ることにしたという例もある。夫自身も、宣教師の資格を得るため
に、フィリピン出国前に韓国で神学校に入学したという。彼は実際に宣教師になった。こ
のような妻の決断に夫も従うというのはわずか1例である。

ほかに、留学していた子ども（娘）に中国系フィリピン人の恋人ができたため国際結婚
をさせたくないとの理由から夫婦そろってフィリピンに入国したという例もある。しかし、
結婚を阻止することはできなかった。今は孫たちに会うのを楽しみにする生活となってい
る。

1970年代にフィリピン人と国際結婚をした女性の場合は、当時の韓国社会の風潮では、
韓国で暮らしにくいという考えもあった。そのためフィリピンでの生活を選択した。国際
結婚を決意した女性は、父親から、「これからは宇宙規模で考えていく時代。小さな地球
で、人種が違う人と結婚することに負い目を感じる必要はない。我が家の娘であることを
自覚して、生涯1人の男性に尽くしなさい」と旅立つ娘にはなむけの言葉を贈ってくれた
という。

また、義父母や小姑と韓国で同居していた女性の場合、嫁役割の重荷のため婚家から逃
れたかったということも、妻側のフィリピン行きの決断となっている。基本的に一家の稼
ぎ手である夫の仕事のため、とする性別役割分業が存在するところに、女性自身も新しい
生活を望んだこと、子どもにとっては、英語教育ができるといった理由も重なっているこ
とは見逃せない。

また、フィリピンへのコリアンの海外移住の場合、一定の高収入で中流層の人々という
ことである。発展途上国から先進工業国への女性の移動の場合、「移住労働者の女性化」
という現象が見られるが、その場合の女性たちは、女性自身が稼ぎ手という役割を持って
移動する。しかし、先進工業国出身の女性が発展途上国へ移動する場合、必ずしも稼ぎ手
として移動するということではない。

大半の人々が、フィリピン入国の意思決定は夫側にあり、夫の決断に家族が賛同する
という形態である。稼ぎ手は男性であり、女性は伝統的な妻、母役割に基づいて決定する。
コリアン既婚者の国際移動の特徴は、家庭内におけるジェンダー役割に基づいていること

である。たとえ妻が正規雇用で働いていても、夫がフィリピンへ行くと決断したことで、妻は遅かれ早かれ辞職している。これまで韓国で積み上げてきたキャリアを途中で断念しなければならなくなったのである。女性たちは、夫の決断に妻は従わなければならない、子どもの側にいつもいる母でなければならないと、とらえている。夫は一家の柱であり、決定権は夫にあり、妻は家族の性別役割をそのまま遂行しているのである。

第2節 既婚女性のフィリピン入国の特徴——家族内の地位と役割の変化

上記のように夫の決断に添う形で、妻側にとっては、受動的に決定されたフィリピンへの移動であった。では、実際にそれが実行されていく過程で、どのようなジェンダー関係がみられるようになったのであろうか。まず、フィリピンで住み込みのフィリピン人メイドを雇用することによって、明らかに性別役割分業に変化が現れる。

仕事に関しては、夫婦一緒に仕事をしている場合の職種は、海運業、宣教師、貿易業、新聞社、ホテル経営、下宿屋、看板製造業などである。女性が主婦で男性が働いている場合は、家電部品の製造業、家畜飼料製造業、銀行員、運輸業、アジア開発銀行、韓国外換銀行などである。

しかしながら、女性の立場は、多岐にわたっていることもみてとれる。フィリピン入国後の生活について、大きくわけて三通りが考えられる。一つは、韓国でもフィリピンでも専業主婦であること。二つ目は、専業主婦から兼業主婦となったこと。三つ目は韓国で資格を有している場合や、何らかの職業を持っていた女性の場合、フィリピンにおいても自分の能力を発揮できる場を持っているということである。

女性自身が自分の職業を持っている場合は、美容院、飲食店、韓国学校の教師、大学教授など、これまでの経歴や専門技術を生かしていることがわかる。働き続けることができるのは、家事、育児をフィリピン人メイド、乳母にまかせることができるため、女性だけがしなければならない家事、育児負担が少なくなっているためでもある。

フィリピン人のメイド、運転手、乳母がいないと答えた人はわずか5人しかいない。その中には、以前、メイドを雇っていたが、良い関係を作ることができず、家事は自分ですることにしたという人もいる。

韓国で共働きをしていた女性の場合、義父母に子どもの世話を頼んでいた。フィリピンでは、義父母の代わりにと考え、フィリピンの乳母に子どもを頼んで、仕事を続けている女性もいる。コリアンが運営する幼稚園や保育園というものはないため、特に乳幼児がい

る核家族のコリアンにとって、家事、育児を頼めることは、大きな助けとなっている。

韓国では、家事、育児は妻の役割とされていたのが、フィリピンではメイドという労働力の供給源があるために、手助けをしてもらえる要件がそろっている。男性は仕事中心でフィリピンでの生活が始まるが、女性の場合は、家事、育児にかかる時間が軽減されることになる。となると、どのような時間の過ごし方になるのだろうか。

韓国での暮らしにはなかった、過度な妻役割、母役割からの解放であり、自分自身の自由な時間を享受できるようになる。そのゆとりがまた、家族以外に相談相手がいないといった環境の中で、夫婦、親子が話し合う時間が増えていくことに繋がっている。

夫の仕事の関係から、フィリピンでは夫婦単位でパーティーなどに出席する機会が多く、妻を同伴して動くようになる。またコリアン・コミュニティ、キリスト教会、カトリック教会、仏教関連など、あらゆるイベントにおいて、夫婦が同伴して出席する場が増える。韓国では夫だけが職場の人たちと会合するのが通常であったが、フィリピンでは夫婦単位、家族単位での動きへと変化し、夫婦や家族で時間や機会を分かち合う関係が生まれる。

教師の資格を持っている女性の場合は、インターナショナルスクールや土曜日に開校される韓国学校の教師になるなど、フィリピンにおいても自分の能力を発揮できる場を持っている。博士の学位を持っている女性の場合、フィリピンの大学で教員のポストに就くことができたが、収入は微々たるものだという。しかし、フィリピン人の教え子を韓国へ留学生として送り出すなど、教育面からフィリピンと韓国の架け橋になっていることを自負している。さらに、子どもが通っているインターナショナルスクールで知り合った中国人の母親たちと我が子のための学習会を作っている。教え子のフィリピン人学生を講師として招き、より高度な応用力を身につけることができる学習プログラムを作っている。

美容師の資格を持っている女性は韓国に出稼ぎに来ていたフィリピン人男性と知り合い、国際結婚をした。フィリピンに来てからも美容院を開業し、韓国にいた時と同様に経済的に自立した生活を送っている。フィリピンへ移ることでキャリアが断ち切られたかのようにであったのが、実はそうではなく、新たなチャンスに恵まれている女性もいる。

牧師夫人の場合は、韓国にいた時には、牧師である夫が教会の内外で牧会を十分にできるよう補佐役であった。ところが、フィリピンに来てからは、妻も宣教師という立場となり、夫と共に宣教地へ出向き、フィリピン人住民が必要とすることのために奉仕する。宣教対象者のために共に働くという意識を持っている。このような仕事を通じて、夫婦間の距離が変化しているとの声は多く聞かれた。しかし、韓国で積み上げてきたキャリアをフ

フィリピンで生かす場がないまま、やるせない気持ちを抱えて暮らしている女性もいる。

第3節 フィリピン移住後のジェンダー関係

家族社会学者の石川実による、地位と役割に関する概念でもう一度、フィリピンに住むコリアンについて再考してみる。

前章において、コリアンのジェンダー関係を変容型と持続型に分類することを試みた。フィリピンに住むコリアンが仕事、家庭、育児など、日常生活の中でどのようにジェンダー役割を担い、また、そのジェンダー関係が変容しているのかを語りからみてみた。

フィリピンは一般に女性の社会的地位が高いとされている。しかし、これはフィリピンにおいても階層性が伴うものである。その階層にコリアン家族も参入している。

韓国では、男性は外で働き、女性は家庭内の労働という意識が広く浸透してきた。こうした中で、既婚女性がフィリピン行きを拒否することは、家族や親族から評価されないことであり、同行してこそ男性を支えるよき妻として評価されるのである。ここには、嫁、妻としての地位がある。そこに、韓国の社会規範による役割が動因されるのである。仕事をしていた女性の場合、職場での自分の地位と役割を投げ出すことはできないと考えた。家族から期待される役割との間に葛藤が生じた。しかし、結局は、フィリピンへ行くことを選んでいたのである。女性たちにとって、職場における自分の役割を放棄することは、役割葛藤が生じることになった。石川がいうように、地位に付随する役割セット（様々な役職）は、分割は不可能なことであり、葛藤を解消しようとするれば、地位そのものを捨てるほかないのである。仕事をしていた女性たちの中には、この役割そのものを断念して、フィリピンへ渡ったのである。

家父長制を基盤とする韓国社会で暮らしていた頃は、夫の多くが妻の役目として家の中の仕事をすることを求め、フルタイムの仕事に就いている場合でも、家事、育児は妻の仕事とみなしていた。またそのような関係のあり方について、妻自身は負担に感じながらも、自分の責任と考え引き受けていた。

しかし、フィリピンでの生活によって、生活スタイルの変化が生じることになった。そうすると、女性たちの間には微妙な役割観の変化も見られる。フィリピンでは、家事、育児をフィリピン人のメイドとの分担が可能となり、妻の行動範囲が広がることになった。

いくつかの事例についてふりかえてみたい。「A 型のキャリア志向から家庭志向」では、事例1と2で、キャリアを積んできた女性がフィリピン生活の中で諦めや、焦燥感に

かられている状況を示した。

特に事例 2 では、伝統的な性別役割分業を再生産している様相を、夫の妻に対する暴力から考察した。彼女は、フィリピンへ行くことを選択したために、仕事を辞めることにした。その結果、経済力を失った女性は深刻な問題に直面することになった。離婚を考えても、経済的な問題や子どもたちのことを思うと踏み切ることができない。韓国ではどんなにキャリアを積み上げてきても、フィリピンでは言葉が不自由であることや、資格をいかす職場がない。一時保護所もない。男性中心主義の根源となっている家父長制の存続が男女の関係性を不平等なものにしている。

事例 3 は、仕事中心であった夫が、妻の心情に寄り添い、家庭志向へと変容したケースである。韓国では全ての決定権が夫にあったが、フィリピンでは妻の心に思いをはせるようになり、対話によって夫婦で諸問題を解決していく関係へと変わった。また、男性はフィリピンに来てから人の目が気にならなくなったと語っていた。男はこうでなければならぬという縛りから解放されたのであった。韓国型の男性らしさをふるまわなくとも許されるのである。

また、事例 4 では、職場のフィリピン人従業員を通じて異文化に接触し、フィリピンと韓国の男女の性別役割観の違いに気がついた例である。

「B 型の家庭志向からキャリア志向」では、次のようであった。事例 6 は、子どもの教育環境を考えて、夫と別居生活を続けているというケースである。彼女の自営業によって生計を立て、インターナショナルスクールに通う 2 人の子どもの学費もまかなうことができるようになった。このことから、彼女は、一人の独立した人間としての自己を認識している。

彼女の場合は、夫は韓国へ帰国したが、子どもたちの教育環境を変えることを望まなかったため、別居生活を選択した。彼女は、夫に経済的に頼ることなく、また、女性であるからこうでなければならないというのではなく、自分の能力が正当に評価されるフィリピン社会での暮らしに充実感を得ている。フィリピンに住むコリアンの友人から批判されても、彼女の意思はゆるがなかった。フィリピン社会に適応しつつ、コリアンやフィリピン人との関わりの中で、自己の存在を肯定し、さらに、社会参加という行為を通して自立的な精神を養ってきたのであった。

彼女の場合は、夫や周囲の人々が要求するような妻、母の地位に付随する役割を遂行しなかった。フィリピンで得た地位と役割を選び、韓国で理想とされる妻、母親役割と、そ

の地位は選択しなかったのである。

「C型の家庭志向から家庭志向」では、伝統的な性別に基づく役割を維持することによって、安定した夫婦関係を維持することが可能になっていた。コリアン同士の結婚の場合、その当事者たちは、フィリピンの文化に触れることで女性の立場が変化することを実感している。

しかし、事例8の国際結婚の場合は、フィリピン人の姑、小姑との関係で嫁役割が強調される生活を送り、固定化された性差役割がみられた。

彼女は、アメリカで暮らすことよりも、義母の助けも得られるフィリピンへ生活拠点を移すほうが、子どもたちに十分に手をかけて育てることができると思っていた。しかし、彼女自身はフィリピン人の姑、小姑たちとの同居で心身が疲弊していった。だが、国際結婚によって生まれた子どもたちの存在が、韓国とフィリピン文化への架け橋となっていた。

国際結婚をした人々で作る社会組織に参加することで、夫婦がそろって出席できる新たな居場所を見つけることができるようになった。このことは、単に妻は夫に従わなければならないという考えから、異なった文化を持つ夫婦として生きていることをわかちあい、協力する関係作りができる契機となった。

彼女の場合は、嫁としての役割葛藤が非常に大きなものであった。しかし、家庭の外部にある社会組織に関わることを通じて、夫婦そろって、新たな地位と役割を獲得したのであった。

最後に、「D型のキャリア志向からキャリア志向」では次のようである。事例11の場合、夫がフィリピンでは家事をするようになったという、韓国ではありえなかった行為がみられるようになった。

彼女の夫は、韓国でいう男らしさという、その地位と役割にフィリピンではとられることがなくなってきた。韓国の社会規範にそのような生き方は、もはや選択していないのである。

事例12は、夫の決定権は変わらないが夫婦関係に平等意識が生まれた例である。その要因としては、家事をフィリピン人メイドと分担することで、妻が夫の事業を手助けできるようになったことである。事例12も、韓国にいた時から共働きであった。フィリピンに来てからは、妻だけが家事、育児の負担をせおわなくなったことから、夫婦が一緒に過ごす時間が増えたためである。より会話をするようになり、問題に直面した時には、夫婦が向き合ってどう解決できるか考えるための対話が生まれた。

これらのことを要約すれば、すなわち、フィリピン移住後は、

- (1) 職場におけるフィリピン人従業員との接触や、社会組織活動におけるフィリピン社会、フィリピン人との接点などを通じて、コリアン個々人のジェンダー意識に変容がみられた。
- (2) 夫婦関係においては、夫が家事、育児をするようになったこと、妻の心理的な状態をより理解するようになったこと、妻が働くことを支援するようになったこと等、一般的に性別役割分業において変化が見られた。それは、夫婦がより平等なジェンダー関係を築くことができるように変化していた。
- (3) 女性も男性も、韓国のような伝統的性差役割が強くみられる国から、フィリピンのような比較的、平等的性差役割の国へ行くと、自身が担ってきたジェンダー役割について再考する機会となる。そのような中、男性と女性たちの性別役割分業が大きく変化し、
- (4) この役割変化の過程で、特に女性の場合は、韓国でできなかったことや、新たな挑戦を始める機会が増えることによって、
- (5) 韓国とは別の妻役割、母親役割をおこない、新しい自分の役割を見だし、自己実現型の生き方をしている。母として、妻としての役割のみの評価であっても、夫婦が対等に会話をする関係を築くことができたのは、女性にとっての家庭内での位置の変容となっているのである。
- (6) それは、夫婦関係を不平等な関係からより対等な関係へと変容させてきた。
- (7) これらのことは、フィリピンでの日常生活の中で接してきたフィリピン人のジェンダー役割の影響も受け、コリアンの男性、女性の精神面に内在化されるようになった。
- (8) さらに、家族同伴型の移動は、子どもたちにとって教育の機会の向上としても意味づけられていた。
- (9) 基本的には、夫の収入という安定した経済基盤が条件になっている。男性においては社会的な地位の下降はみられない。しかし、妻には生じているのである。

発展途上国出身の女性が、先進工業国へ移動した際、経歴を生かすことが出来ない現実がある。同じように、先進工業国出身者の女性が発展途上国へ移動した際、この部分については、同様の現象がみられる。女性であることから生じる共通の問題点であることが指摘できよう。ただ、移住先の国から受ける民族的な差別の度合いは国籍によって違いがあ

り、その社会的な地位の下降の意味合いも違ってくる。

また、女性に対する暴力については、先進工業国、発展途上国出身者といった区分に関係なく生じている問題である。先進工業国では、暴力から逃れるための避難場所がある。しかし、このような企業進出に伴って発展途上国へ移動した女性たちの悩みを聴きいれ、避難できるような場所はない。社会的な問題として大きく取り上げられることもなく自己責任として見過ごされてしまうのである。精神的な拠り所として教会も考えられよう。しかし、暴力の問題は、悩みを話すことで解決できるものではない。暴力発生の構造についてよくわかっていない人に相談してもなかなか理解されず、かえって二重に精神的な被害を受けることになる。暴力の加害者が更生できるように、また、被害者を安全に保護できるような場でなければ、解決の糸口さえない。

このようなジェンダー関係の変容と変容しないことの二つの方向性がみられた。

第4節 今後の課題

韓国資本のグローバル化は、コリアン男性、女性、そして子どもたちの生活空間を一挙に広げた。コリアンたちはまた、社会組織活動を通じて、フィリピン人に顔の見える関係づくりもおこなっている。コリアンの利益のみを追求するのではない、フィリピン人と共存していく形で活動している。コリアンはフィリピンの暮らしの中で、ジェンダー意識や伝統的家族の在り方等を見直し、自己認識を再構成している。彼ら、彼女らは、複数の国家間を行き来することによって、様々な文化と言語が融合しあう体験をし、ディアスポラとしての多様な生き方を体得している。

しかしながら、豊かな国出身の人々が、発展途上国へ移動するという現象は、研究としてあえて取り上げる必要がないものなのであろうか。やはり、経済的な基盤がしっかりしていて、食べることに困らない人々については、あえてフォーカスをあてる必要がないものなのであろうか。しかし、ジェンダーという視点から、個々人の生活をみつめてみると、女性だからこそ被る苦しさであるとか、生きにくさがそこにはある。男性もまたそうである。その諸々の問題を見過ごすことはできないと考える。

コリアンの家庭内部の様相と、外部における社会活動、そして、グローバルにどこへでも流れ出ていく企業の動きという、これらの関連性をより明確にしながら、今後、国際比較調査も可能であろう。

また、韓国、フィリピン、および日本を含めた三国間の類似性や異質性を整理しなおす

必要性を考える。筆者がこれまでにフィールドワークによって収集したデータをより深く分析し、普遍的な新たな知見を得るためである。その他に、筆者がジェンダー関係の変容について、より深い洞察を得るために、分析枠組を広く学ぶことも今後の課題である。

これまで、ジェンダーの視点から様々な現象をとらえていくことの重要性を、コリアンの人々から教わった。これらの学びを今後、新たな研究課題へと繋げていく所存である。

参考文献

[日本語文献]

安里和晃

- 2002 「香港における外国人家事労働者のエンパワーメントと労働政策」 研究代表者 津田守『国際移民労働者をめぐる国家・市民社会・エスニシティの比較研究：経済危機の中のアジア諸国における出稼ぎフィリピン人を素材として』平成11-13 年度化学研究費補助金（基盤研究（A）（2））成果報告書 課題番号：11691079、大阪、157-178 頁。

アン・ビクトル、姜信子

- 2001 『追放の高麗人「天然の美」と百年の記憶』 石風社。

伊佐雅子

- 2000 『女性の帰国適応問題の研究——異文化受容と帰国適応問題の実証的研究——』 多賀出版。
- 2002 「女性と異文化適応——日本人母親の場合——」 伊佐雅子監修『多文化社会と異文化コミュニケーション』 三修社、149-173 頁。

石川実

- 2001 「家族内の地位と役割」 石川実編『現代家族の社会学』 有斐閣、76-94 頁。

伊藤るり

- 1996 「もう一つの国際労働力移動——再生産労働の超国境的移転と日本の女性移住者——」 伊豫谷登士翁、杉原達編『日本社会と移民』 明石書店、243-271 頁。

エヴィオータ・エリザベス・ウィ

- 2000 『ジェンダーの政治学 フィリピンにおける女性と性的分業』 明石書店。

オイ・ション・ゴウ

- 2005 「国際移動とジェンダー観の変化——滞日中国人女性の事例を中心に」 渡辺秀樹編『現代日本の社会意識——家族・子ども・ジェンダー』 慶応義塾大学出版会。

大東貢生

- 2002 「配偶者選択に見る民族関係——ジェンダーの視点——」 谷富夫編『民族関係における結合と分離』 ミネルヴァ書房、596-619 頁。

小ヶ谷千穂

- 2001a 「移住女性研究の展開と課題——アジアにおける移住女性研究のために——」

『Sociology Today』 11 号、98-107 頁。

2001b 「国際労働移動とジェンダー——アジアにおける移住家事労働者の組織活動をめぐる——」 梶田孝道編『国際化とアイデンティティ』（講座・社会変動 第7巻）ミネルヴァ書房、121-147 頁。

2001c 「『移住労働者の女性化』のもう一つの現実——フィリピン農村送り出し世帯の事例から——」 竹中恵美子、久場嬉子監修、伊豫谷登士翁編『経済のグローバリゼーションとジェンダー』（叢書 現代の経済・社会とジェンダー）、明石書店、161-186 頁。

2002 「移住家事労働者の対抗的主体形成：香港及びシンガポールにおける組織活動の事例から」 研究代表者 津田守『国際移民労働者をめぐる国家・市民社会・エスニシティの比較研究：経済危機の中のアジア諸国における出稼ぎフィリピン人を素材として』平成 11-13 年度化学研究費補助金（基盤研究（A）（2））成果報告書 課題番号：11691079、大阪、179-190 頁。

菊池真理

2004 「ジェンダーの視点からみた平和」 池尾靖志編『平和学をはじめる』晃洋書房、208-239 頁。

金賢美

2006 「韓国の戸主制度廃止と「家族」概念の変化」 富田武、李静和編『家族の変容とジェンダー——少子高齢化とグローバル化のなかで』日本評論社、175-187 頁。

久津美香奈子

1999 「フィリピン進出韓国企業の特徴に関する一考察」 大阪外国語大学言語社会学編『EX ORIENTE』創刊号、179-206 頁。

グレーベ・ギンター

2003 「デュッセルドルフの日本人コミュニティ——エスノスケープのなかに生きる」 岩崎信彦他編『海外における日本人、日本のなかの外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂、152-169 頁。

邱淑雯

2003 「移民女性における主体性の構築——川崎市在住フィリピン人妻の社会参加——」 立教大学社会学部『応用社会学研究』No.45、81-96 頁。

姜信子

2002『安住しない私たちの文化——東アジア流浪』晶文社。

高賛侑

1993『マイノリティの中の在米コリアン アメリカ・コリアタウン』社会評論社。

高全恵星監修、柏崎千佳子監訳

2007『ディアスポラとしてのコリアン 北米、東アジア、中央アジア』新幹社。

コーエン・ロビン

2001『グローバル・ディアスポラ』明石書店。

国際日本文化研究センター

2006『世界の日本研究 2005 在外コリアンのディアスポラと国際ネットワーク戦略』国際日本文化研究センター。

国際連合経済社会情報・政策分析局人口部編

1996『世界人口予測：1950-2050』原書房、792 頁。

国際連合経済社会総局編

2001『世界人口年鑑・1997（上）』第 49 集、原書房、東京、505 頁、521 頁。

国連開発計画（UNDP）編、横田洋三、秋月弘子、二ノ宮正人監修

2007『人間開発報告書 2006 水危機神話を越えて 水資源をめぐる権力闘争と貧困、グローバルな課題』（日本語版）、国際協力出版会、417-420 頁。

酒井順子

2003「ジェンダーとグローバリゼーション——日本人のディアスポラ」中牧弘充、ミッチェル・セジウィック編『日本の組織 社縁文化とインフォーマル活動』東方出版、77-98 頁。

佐々木衛

2001「延边朝鮮族の移住と家族ネットワーク」佐々木衛、方鎮珠編『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店、83-107 頁。

佐竹眞明、メアリー・アンジェリン・ダアノイ

2006『フィリピン—日本国際結婚——移住と多文化共生』めこん。

小学館、韓国・金星出版社共同編集

1994『朝鮮語辞典』小学館、東京。

瀬地山角

1996『東アジアの家父長制 ジェンダーの比較社会学』勁草書房。

ゼルディッチ二世・M、橋爪貞雄他訳

- 1981 「核家族における役割分化——比較研究」 T・パーソンズ、R・F・ベールズ編『家族 核家族と子どもの社会化』黎明書房、412-172 頁。

相馬直子

- 2002 「女性／男性の問題」 秋月望、丹羽泉編『韓国百科 第二版』大修館書店、244-249 頁。

園田茂人

- 2001 「移動社会としての太陽鎮——1000 戸調査の分析結果から」 佐々木衛、方鎮珠編『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店、64-82 頁。

大韓民国政務長官（第2）室、(財) アジア女性交流・研究フォーラム訳

- 1996 『韓国の女性 アジア女性シリーズ No.4』(財) アジア女性交流・研究フォーラム。

玉置泰明

- 2002 「フィリピンの文化環境」 西田ひろ子編『マレーシア、フィリピン進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦』多賀出版、55-70 頁。

チャン・ジャネット

- 2007 「離婚を経験したコリア系移民の女性たち——抱える困難と対処の方法」 高全恵星監修、柏崎千佳子監訳『ディアスポラとしてのコリアン 北米、東南アジア、中央アジア』新幹社、72-96 頁。

趙惠貞

- 2002 『韓国社会とジェンダー』法政大学出版局。

陳天璽

- 2002 『華人ディアスポラ——華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店。

土肥伊都子

- 2004 「『男女の思いこみ』をつくる社会のしくみ」 青野篤子、森永康子、土肥伊都子編『ジェンダーの心理学「男女の思いこみ」を科学する』ミネルヴァ書房、49-67 頁。

永井博子

- 2001 「女性の地位と役割——多様な性のはざままで」 大野拓司、寺田勇文編『エリア・スタディーズ 現代フィリピンを知るための 60 章』明石書店、102-105 頁。

呉偉明、合田美穂

2003「シンガポールにおける日本の社縁文化——日本人会と九龍会との比較」中牧弘
充、ミッチェル・セジウィック編『日本の組織 社縁文化とインフォーマル活
動』東方出版、99-125 頁。

仁科健一、舘野哲編

1996『[新韓国読本]⑤ 異邦の韓国人・韓国の異邦人』社会評論社。

日本ユネスコ協会連盟編

1997『世界教育白書 1996』東京書籍。

野村進

1997『コリアン世界の旅』講談社。

パーソンズ・T、R・F・ベールズ、橋爪貞雄他訳

1981『家族 核家族と子どもの社会化』黎明書房。

朴三石

2002『海外コリアン』中公新書。

ハム・マギー著、木本喜美子、高橋準監訳

1999『フェミニズム理論辞典』明石書店。

原尻英樹

2000a『コリアンタウンの民族誌 ハワイ・LA・生野』筑摩書房。

2000b「コリアン・タウンの比較研究 新たなエスニシティ論に向けて」五十嵐武士
編『アメリカの移民体制 「民族」の創出』東京大学出版会、313-340 頁。

パレーニャス・ラセル・サラザール

2007「女はいつもホームにある——グローバリゼーションにおけるフィリピン女性家
事労働者の国際移動」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う——現代移民研究
の課題』有信堂高文社、127-147 頁。

ビュン・ファースン

2002「韓国——背景・実態・運動」(財)アジア女性交流・研究フォーラム、篠崎正
美監訳／監修『アジアのドメスティック・バイオレンス』明石書店 45-85 頁。

ベルトー・ダニエル著、小林多寿子訳

2003『ライフストーリー ——エスノ社会学的パースペクティブ——』ミネルヴァ書
房。

ベン・アリ・イヤル

2003「シンガポールの日本人——海外移住者のコミュニティの動態」岩崎信彦他編『海外における日本人、日本のなかの外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂、186-203 頁。

町村敬志

2003「ロスアンジェルスにおける駐在員コミュニティの歴史的経験——『遠隔地日本』の形成と変容」岩崎信彦他編『海外における日本人、日本のなかの外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂、170-185 頁。

マッキーヴァーR.M.

1975『コミュニティ』ミネルヴァ書房。

文玉杓

1997「現在韓国女性の生活における儒教の影響」林玲子、柳田節子編『アジア女性史——比較史の試み』明石書店、241-253 頁。

森岡清美

2004「1. 家族とは」森岡清美、望月嵩編『新しい家族社会学』培風館、1-18 頁。

2004「9. 家族の役割構造」森岡清美、望月嵩編『新しい家族社会学』培風館、90-100 頁。

山本かほり

2000「儒教規範のなかの女性——韓国女性の社会的地位に関する考察」小林孝行編『変貌する現代韓国社会』世界思想社、44-65 頁。

山田礼子

2004『「伝統的ジェンダー観」の神話を超えて——アメリカ駐在員夫人の意識変容』東信堂。

[日本語 インターネット]

日本 外務省

「各国・地域情勢 大韓民国」、「各国・地域情勢 朝鮮民主主義人民共和国」
<http://www.mofa.go.jp> 2007 年 11 月 29 日検索。

[韓国語]

キム・ソンヨン

1995「アメリカにおける韓人女性たち」ミヨンチ大学校女性家族生活研究所『女性家族生活研究』1巻。

国民生活体育協議会 韓民族祝典本部

1994『世界韓民族便覧』

ソ・ソンヨン他編

2000『1970～2000 開校 30 周年記念文集』フィリピン韓国学校。

チョン・ビョンテ編

1999『宣教団体および宣教師要覧』駐比韓国宣教団体協議会。

フィリピン韓人会編

1993 *Korean Directory*

1995 *Korean Directory*

2001 *Korean Directory*

フィリピン韓人会編

2001『2001 韓人会住所録 The Korean Directory of Philippines』

本堂史編集委員編

1996『平和をつくる者たち』フィリピン韓人天主教会。

[韓国語 統計]

外交通商部在外国民移住課

2001『在外同胞現況』外交通商部

韓国銀行外換管理部

1994『海外投資現地法人現況』

1995『海外投資現地法人現況』

1996『海外投資現地法人現況』

韓国銀行外換為替管理部

1997『海外投資統計年報』

韓国法務部出入国管理局

1985～2000 年までの各年版『出入国管理統計年報』

在フィリピン大韓振興貿易協会編

1996『フィリピン』

大韓貿易投資振興協会編

1993『海外進出韓国企業リスト』

大韓貿易投資振興公社編

1994『海外進出韓国企業ディレクトリ』

1995『海外進出韓国企業ディレクトリ』

1996『海外進出韓国企業ディレクトリ』

大韓貿易振興協会マニラ事務所編

1996『フィリピン進出韓国企業リスト』1996年8月現在

[韓国語 新聞記事、ニュースレター]

マニラソウル社「週刊マニラソウル」2003年2月1日

2003年2月8日

コリアポスト社「週刊コリアポスト」2003年2月15日

2004年1月10日

フィリピン韓人会

2000『韓人会報』秋号

2001『韓人会報』1、2月号

2002『韓人会報』冬号

[韓国語 インターネット]

在外同胞財団 Oversea Koreans Foundation

「在外同胞多数居住国家」

「在外同胞現況総計」<http://www.korean/net/morgu/status>2007年11月28日検索。

「週刊マニラソウル」2004年4月16日付け記事：<http://www.manilaseoul.com>

[英語]

Asis Maruja Mila Grosbillnones

1989 *Immigrant Women and Occupational Changes: A Comparison of Filipino and Korean Women in Transition*, Ph.D Dissertation, Bowling Green State University, University of Microfilms International.

Bergsten Fred C. and Choi Inbom eds.

2003 *The Korean Diaspora in the World Economy*, Institute for International Economics, Washington, DC.

Han, Gil Soo

1994 "An Overview of the Life of Koreans in Sydney and Their Religious Activities", *Korea Journal*, Vol.34, No.2, Summer, pp.67-76.

Hurh, Won Moo

1998 *The Korean Americans*. Greenwood Press.

Kibria Nazli

1990 "Power, Patriarchy, and Gender Conflict in the Vietnamese Immigrant Community", *Gender and Society*, 4 (1), March, pp.9-24.

Kim, Sung Chul

1979 *Study of Biculturation of the Korean Wives of Filipino husbands Residing in Metro Manila Area*, University of the Philippines, MA thesis, Asian Studies.

Kim S, Rew L

1994 "Ethnic Identity, Role Integration, Quality of Life, and Depression in Korean-American Women", *Archives of Psychiatric Nursing*, 8, pp.348-356.

Kutsumi Kanako

2007 "Koreans in the Philippines: A Study of the Formation of their Social Organization", Virginia A. Miralao and Lorna P. Makli (eds.), *Exploring Transnational Communities in the Philippines*, Philippine Migration Research Network (PMRN) and Philippine Social Science Council (PSSC), pp.58-73.

Kwon, Victoria Hyonchu

1997 *Entrepreneurship and Religion: Korean Immigrants in Houston, Texas*. New York and London. Garland Publishing, Inc.

Lee, Hye-Kyung

1988 *Socioeconomic Attainment of Recent Korean and Filipino Immigrant Men and Women in the Los Angeles Metropolitan Area, 1980*, Ph.D

Dissertation, University of California, Los Angeles, UMI Dissertation Services, A Bell & Howell Company.

Lee, Susan Miryung, M.S.W.

- 1991 *Child Abuse and Neglect in the Korean Immigrant Community*, a Thesis Presented to the Department of Social Work California State University, Long Beach, in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree Master of Social Work, University Microfilms International.

Lee, Youngmin

- 1996 *Ethnicity Toward Multiculturalism: Socio-Spatial Relations of the Korean Community in Honolulu, 1903-1940*, A Dissertation submitted to the Graduate Faculty of the Louisiana State University and Agricultural and Mechanical College in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy in the Department of Geography and Anthropology, UMI Microform.

Light, Ivan and Edna Bonacich

- 1988 *Immigrant Entrepreneurs: Korean in Los Angeles*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press.

Lim, In Sook

- 1995 *Reconstruction of Marital Roles and Marital Power Relations among Korean Immigrant Working Couples in the U.S.*, Ph.D. Dissertation, The University of Texas at Austin, UMI Dissertation Services, A Bell & Howell Company.

Litiatco, Vicki J.(ed.)

- 1996 *Philippine Banking Almanac 1995-1996*, Ventures Unlimited, Inc. Philippines, p.15.

Makil Lorna P.

- 2007 "South Koreans in Dumaguete: A Preliminary Study", Virginia A. Miralao and Lorna P. Makli (eds.), *Exploring Transnational Communities in the Philippines*, Philippine Migration Research Network (PMRN) and Philippine Social Science Council (PSSC), pp.40-57.

Min, Pyong Gap

- 1996 *Caught in the Middle: Korean Communities in New York and Los Angeles*, University of California Press. Robert M. Blackburn.
- Miralao Virginia A.
- 2007 "Understanding the Korean Diaspora to the Philippines", Virginia A. Miralao and Lorna P. Makli (eds.), *Exploring Transnational Communities in the Philippines*, Philippine Migration Research Network (PMRN) and Philippine Social Science Council (PSSC), pp.24-39.
- Moon, H. Jo
- 1999 *Korean Immigrants and the Challenge of Adjustment*, Greenwood Press.
- Noh S, Speechley M, Kasper V, Wu Z
- 1992 "Depression in Korean Immigrants in Canada: I. Method of the Study and Prevalence of Depression", *Journal of Nervous and Mental Disease*, 180, pp.573-577.
- Noh S, Wu Z, Avison WR
- 1994 "Social Support and Quality of Life: Sociocultural Similarity and Effective Social Support Among Korean Immigrants", In G Albrecht, R Fitzpatrick (eds.), *Advances in Medical Sociology*, Vol. V, *Quality of Life in Health Care*, Greenwich, CT, JAI Press, pp.115-137.
- Oh, Sunhoo
- 1988 *Korean Immigrant Families and Their Social Networks*, The Graduate School in Partial Fulfillments of the Requirements for the Degree of Doctor of Philosophy in Sociology State University of New York at Stony Brook, UMI.
- Park, Kyeyoung
- 1997 *The Korean American Dream Immigrants and Small Business in New York City*, Cornell University Press, Ithaca and London.
- Park, Tai-Young
- 1995 *Marital Satisfaction among Korean Immigrant Spouses in the United States*, The Florida State University School of Social Work, Ph.D Dissertation.

Parreñas Rhacel Salazar

- 2001 *Servants of Globalization: Women, Migration and Domestic Work*, Stanford University Press.

Rayaprol, Aparna

- 1997 *Negotiating Identities Women in the Indian Diaspora, New Delhi*: Oxford University Press.

Shim, Jae Chul.

- 1992 *Impersonal Influence and the Growth of an Ethnic Community: The Origin and Consequence of Korean-Black Conflicts in Southern California*, Submitted to the Graduate School of the University of Wisconsin-Madison in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree of Doctor of Philosophy (Journalism and Mass Communication), University of Wisconsin, U.S.A.: UMI Dissertation Services, A Bell & Howell Company.

Tigno. Jorge V.

- 2001 "A Preliminary Study of Foreign Nationals in the Philippines: Strangers in our Midst?", Edited by Maruja M.B. Asis, *The Philippines as Home Settlers and Sojourners in the Country*, Philippine Migration Research Network(PMRN), Philippine Social Science Council(PSSC), pp.1-40.

Um, Shin Ja

- 1984 *Korean Immigrant Women in the Dallas-Area Apparel Industry Looking for Feminist Threads in Patriarchal Cloth*, University Press of America.

Van Santen José & Schaafsma Juliette

- 2000 "Mafa Women and Migration", Jacqueline Knörr, Meier Barbara (eds.), *Women and Migration Anthropological Perspectives*, Campus Verlag St, Martin's Press, pp.21-62.

Yoon, In-Jin.

- 2000 "Forced Relocation, Language use, and Ethnic Identity of Koreans in Central Asia," Quezon City: *Asian and Pacific Migration Journal*, Vol.9, No.1, pp.35-64.

Yoo, Jin Kyung

1998 *Korean Immigrant Entrepreneurs: Networks and Ethnic Resources*, New York
& London, Garland Publishing, Inc.

Yuh, Ji Yeon

2002 *Beyond the Shadow of Camptown: Korean Military Brides in America*, New
York University Press.

[英語 統計]

Board of Investments in the Philippines

*Amount of Equity Investments Approved under Various Investment Incentives
Laws by Country (1968-2000).*

Korean Chamber of Commerce Philippines, Inc.

1996 *Member's list as of October 26, 1996*

2000 *Korean Companies in the Philippines (Overseas branches, Trading
companies, Representatives office, Manufacturing companies Updated as of
July 2000.)*

Korean Information Service, Seoul Korea

1999 *Republic of Korea-Philippines Relations, November 1999.*

Philippine Business Profiles & Perspectives, Inc., The University of Asia and the
Pacific

1996 *The Top 7000 Corporations 1996-1997.*

Philippine Economic Zone Authority

Investments by Country New Reg'd. & Expansions/Add'l. Investment.

あとがき

博士論文をまとめるにあたって、多くの方々にご協力いただいた。筆者がフィリピンへ行く度に、お世話になった当時、韓人会会長の李寛洙氏、韓人会総務の金永岐氏、そして、比韓文化財団の朴ヒョンモ会長、2003 年度韓人会の張在中会長、婦人会の趙愛道会長には、たいへん感謝している。また、社会組織の代表者の方々にもたいへんお世話になった。筆者に心を開き、ライフ・ストーリーを語ってくださった方々には感謝を伝えたい。多くの方々の支援があつてこそ、論文をまとめることができた。この場をかりてお礼を申し上げたい。

修士課程から博士課程までご指導いただいた津田守先生に心より感謝している。また、学部時代、筆者が四国学院大学在学中にご指導いただいた横山正樹先生（現在、フェリス女学院大学）からも常に励ましとご助言をいただいた。お二人の先生との出会いによって、研究生活がはじまった。

ようやく、博士論文をまとめ終えることができた。長い道のりであった。その間、私は二児の母親になった。8 歳の男の子と 1 歳 3 ヶ月の女の子を育てている。息子が 2 歳の時と 3 歳の時、一緒にフィリピンへ行き、この博士論文のための調査をおこなった。フィリピン行きには、義父も連れ添ってくれた。義父の助けがあつて、実現した調査であった。日常生活においても、義父母からは、子育てをしながらの研究生活を支えていただいた。心から感謝している。

この論文では、ディアスポラという言葉をもちいたが、私の両親は、ディアスポラであった。新潟県出身の私の父は戦時中、満州で暮らし、母は樺太で生まれ育った。特に父の場合は、終戦後の棄民政策の中、命からがら本土へ帰ってきたのであった。祖父はソ連に抑留されたため、祖母が 4 人の子どもを引き連れて帰ってきた。長男であった父が、赤ん坊だった弟を守り、背負って帰ってきたという。

終戦時、父は 10 歳、母は 9 歳であった。幼い 2 人が、それぞれの家族と共に日本に戻っていなかったら、私の命はありえなかった。父も母も新潟で学齢期を過ごし、やがて成人し、職場の同僚を通じて 2 人は出会ったとのことだ。母が父との結婚を決意したのは、お互いに引揚者だから、苦労を分かち合えるだろうと思ったからであった。戦渦をくぐりぬけて、命のぬくもりが受け継がれてきたことに感謝する。

祖母も、父もすでに天国へ旅立ってしまった。天国で 2 人とも、博士論文の完成を喜んでくれていることだろう。これまで、研究を支えてくれた両親、義父母、祖母、兄、夫、

子どもたちに心から感謝の気持ちを伝えたい。

育児やさまざまな事情でなかなか研究を進めることができなかった私に対し、津田守先生は常に励まし、導いてくださった。大学院生活において、諸先生方から懇切丁寧なご指導、ご助言をいただいた。このご恩を忘れずに、学ばせていただいたことを今後にいかしていきたいと考えている。